

京都教育大学
平成 25 年度 修士論文

対話によるメタ認知形成を目指した小学校社会科メディア単元学習の革新

京都教育大学大学院 教育学研究科 教科教育専攻 社会科教育専修 2 回
大上拓也

指導教員 水山光春
指導教員 平石隆敏

目次	頁
はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第1章 メディア・リテラシー教育の現状と課題・・・・・・・・	2
第1節 メディア研究の現状と課題・・・・・・・・	2
1. メディア研究の現状・・・・・・・・	2
(1) マスターマンのメディア・リテラシー観・・・・・・・・	4
(2) バッキンガムのメディア・リテラシー観・・・・・・・・	6
(3) 鈴木みどりのメディア・リテラシー観・・・・・・・・	10
2. メディア研究の課題・・・・・・・・	12
第2節 教育におけるメディア教育の現状と課題・・・・・・・・	13
1. 情報化社会への中央教育審議会の対応・・・・・・・・	13
2. PISA 調査にみるメディア・リテラシーの可能性・・・・・・・・	18
第2章 対話的送受信によるメディア・リテラシーの構築・・・・・・・・	20
第1節 対話の視点を加えたメディア・リテラシー・・・・・・・・	20
1. 情報の受信と発信の関係・・・・・・・・	20
2. 構成主義的アプローチによる対話的送受信・・・・・・・・	22
第2節 メタ認知形成の理論によるメタ認知形成・・・・・・・・	26
1. メタ認知の分類と発達段階・・・・・・・・	26
(1) メタ認知の分類・・・・・・・・	26
(2) メタ認知の発達段階・・・・・・・・	28
2. メタ認知形成のためのサクセスフル知能理論・・・・・・・・	30
第3節 小学校社会科におけるメディア単元学習の現状と課題・・・・・・・・	34
1. メディア単元学習の分析のためのフレームワーク・・・・・・・・	34
(1) 学習方法の視点・・・・・・・・	34
1) 受動的受信と批判的受信・・・・・・・・	34
2) 活動的送信・・・・・・・・	35
3) 対話的送受信・・・・・・・・	36

(2) メタ認知形成過程の視点	36
1) 知識獲得コンポーネント	36
2) パフォーマンス・コンポーネント	36
3) メタ・コンポーネント	36
2. 小学校社会科におけるメディア単元学習の分析	37
(1) 分析対象	37
(2) 事例分析の一例	37
(3) 事例分析から分かる現状	38
(4) 事例の傾向別分類	39
1) 知識受信型の単元	40
2) 受信発展型の単元	41
3) 送信終結型の単元	42
4) 対話的送受信型の単元	43
(5) 分類の結果	44
3. 小学校社会科におけるメディア単元学習の課題	44
 第3章 小学校社会科第5学年のメディア単元学習	45
第1節 メディア単元の構成	45
1. 構成するための基本的な考え	45
2. 指導計画	46
3. 評価規準	48
第2節 小学校社会科第5学年メディア単元学習の実践	51
1. 実践校と児童の実態	51
(1) 実践校、学年、クラス	51
(2) 事前アンケートから見る児童の実態	51
1) 事前アンケート実施の動機	51
2) 事前アンケートの設問	52
3) アンケート結果	53
4) 事前アンケートに見る児童の実態	57
2. 実践授業指導案	59

第3節 授業実践の分析及び考察	77
1. 授業分析と考察	77
(1) 1時間目の授業の分析と考察	77
(2) 2時間目の授業の分析と考察	79
2. 事前・事後確認シートの分析と考察	82
(1) 放射状タイプと網目状タイプ	82
(2) 人の存在の有無	83
(3) 分析のフレームワークと集計結果	84
(4) 分析結果の考察	87
終章	88
おわりに	90
謝辞	91
参考文献	93
付録	

はじめに

現代社会は高度情報化社会とも呼ばれ、我々を取り巻く情報メディアは日一日と進化し続けている。このような状況において、我々はそれらの恩恵を受けると同時に、様々な問題にも対処する必要に迫られている。そのために、教育現場では「メディア・リテラシー」を取り上げ、教科教育内や日常生活でこの能力を培う努力をしている。本研究は、社会科において情報メディアをどのように扱い、どのような能力を子どもたちに獲得させるべきかを明らかにするものである。

第1章では、各研究や教育現場において異なる「メディア・リテラシー」を整理し、その問題点を考察する。その上で、現代社会で求められるメディア・リテラシーについて考え、本研究の方向性を提示する。

第2章では、現代社会で求められるメディア・リテラシーの視点として、社会構成主義の「対話」と、認知心理学の「メタ認知能力」を取り上げ、メディア・リテラシーを再定義する。この定義を基に、社会科教育で行われている小学校社会科のメディア単元の分析・考察を行い、新たなメディア単元の可能性を提示する。

第3章では、第2章の分析を基に作成した、小学校社会科メディア単元の実践とその結果について述べる。子どもたちのメディアに対しての考えが、授業前と授業後でどのように変化したか、どのような成果と課題があったかを確認する。

終章では、本研究全体の成果と課題を確認し、今後の研究の方向性を提示する。以上の構成で本論を進めていく。

第1章 メディア・リテラシー教育の現状と課題

現代は高度情報化社会とも呼ばれるように、我々の周囲を取り巻く情報メディアの発展には目覚ましいものがある。また、現代社会の特徴の一つとして、情報メディアによって我々と世界との距離が近くなったことが挙げられる。このことは我々に恩恵をもたらす一方で、その扱いを間違えると大きな問題に発展し兼ねないという危険も孕んでいる。本章では、このような状況を乗り越えるために必要な能力としてのメディア・リテラシーを、研究と教育の視点から明らかにし、その課題を考察する。

第1節 メディア研究の現状と課題

1. メディア研究の現状

前述したように、現代社会においてメディア環境は著しく変化している。このことは、ほとんどの家庭にテレビやPC機器があり、京都市の小学校においては一つの教室にPCが一台ずつ設置されているという状況からも推察できる。また我が国において、携帯電話の世帯別保有率は90%を超えており（図1¹）、それに伴って携帯電話を持つ子どもが増加し、小学校でも都道府県によっては半数以上の子どもたちが所持しているという実態がある²。子どもたちはこのような環境の中で日々、多くの情報とともに生活している。

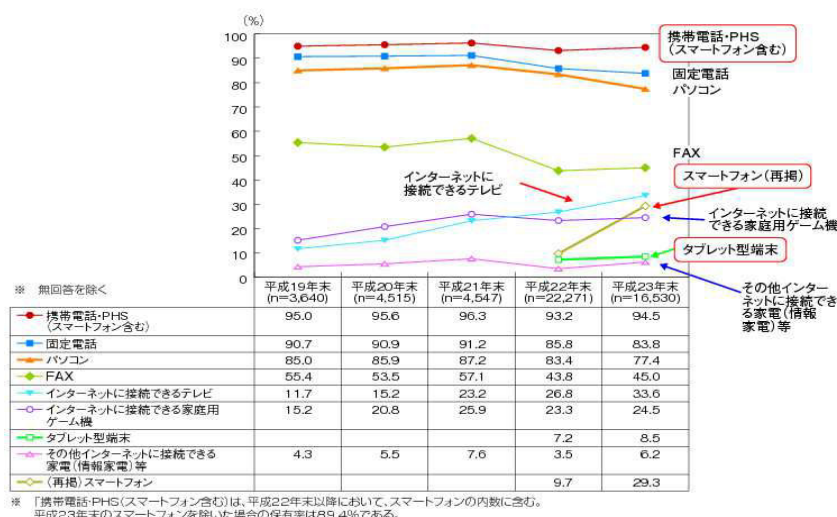


図1 主な情報通信機器の世帯保有状況（平成19～23年末）

¹ 総務省平成24年版 情報通信白書,
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc122310.html>,
2013年12月9日閲覧

² 小学生携帯電話所有率, <http://todo-ran.com/t/kiji/14679>, 2013年6月7日閲覧

しかし、このようなメディア環境の変化は決して緩やかに、段階を踏んで起こったものではない。インターネットが世の中に普及し始めたのは 1990 年代後半であり、そこから異常とも言える速度で我々の生活の中に浸透してきた。そのことを示すものが以下の図 2³である。

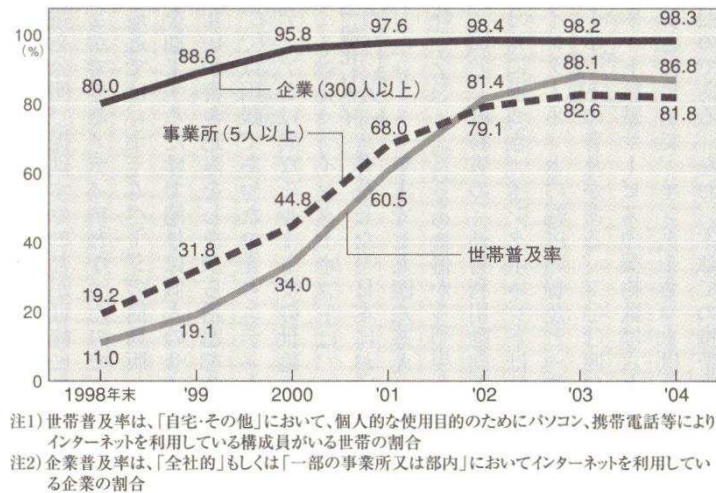


図 2 企業・事務所・世帯別のインターネット普及率

図 2 を見ると、1998 年末に 11.0%であったインターネットの世帯普及率は、以後 5 年も経たない間に 90%近くにまで上昇している。このような急激な変化の中に我々がその身を置いているという現状を今見直す必要がある。

このような状況に対して、文部科学省は情報教育を充実させることで対応した。これは子どもたちにメディア・リテラシーを獲得させ、高度情報化社会の中で主体的に行動できる力を養うことを目標としている。社会科教育において、メディア・リテラシーは以下のように定義されている。

メディア・リテラシーとは様々なメディアの特質を分析的に理解し、情報の発信や受信を知的に行い、他者とのよりよい関係を構築し自己実現を果たすための資質・能力である⁴。

³ 藤竹暁 (2005) 『図説日本のマスメディア〔第二版〕』日本放送出版協会, p260.

⁴ 日本社会科教育学会 (2012) 『新版社会科教育事典』ぎょうせい, p.254.

これはメディア・リテラシーの定義の一つであるが、このメディア・リテラシーという能力は近年取り上げられ出したものであり、その解釈については様々な考え方がある。つまり、メディア・リテラシーの定義の一つをとっても、三者三様の定義が存在しているのである。したがって以下では、立場の違うメディア研究者のメディア・リテラシー観を取り上げ、整理し、その中から現状のメディア・リテラシー教育の課題を考察する。

(1) マスターマンのメディア・リテラシー観

マスターマン, L. はメディア・リテラシーの中心となる能力について、以下のような考えを提示した。

メディアは能動的に読み解かれるべき、象徴的システムであり、外在的な現実の、確実で自明な反映などではない。この原則は、言葉を変えれば、テレビ、新聞、映画、ラジオ、広告、雑誌は作られているということである。すなわち、メディアというのは、単に「現実」を伝達したり反映したりしているのではなく、それを構成し表象するプロセスに深く関わっているということである⁵。

この考えは、メディア・リテラシーにおける「受信」に深く関わっている。つまり、メディア・情報を批判的に受信・分析することが重要で、決して鵜呑みにしてはいけないという考えである。これは、メディアは常に情報を再構成しているという考えに依って立っている。マクルーハン, M. の「メディアはメッセージである⁶」という言葉にもあるように、事実を情報に介するメディアはその過程で何らかの意図を付与している。情報は事実そのものではないため、事実を読み取るためには批判的な分析が必要不可欠である。マスターマンはメディアによって構成された情報を検討する対象として、以下の四つの領域を提示している（表 1）。

⁵ マスターマン, L. (2010) 『メディアを教えるークリティカルなアプローチへー』世界思想社, p.28.

⁶ マクルーハン, M. (1987) 『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房, p.7.

表 1 メディアを構成する四つの一般的領域⁷

領域	i) メディアを構成する資料、情報源、決定要因	ii) メディアの情報が真実だと確信させるために用いられる、主要な技法と記号化	iii) メディアが構成する「現実」の性質、メディア表現に含まれる価値	iv) オーディエンスがメディアの構成物をどのように読み解き、受け取っているか
検討する内容	誰が構成するのか、テキストが内包する利害関係、相反する利益や圧力の絡み合い	選択（情報の何を重視しているか）、イメージのレトリック（映像などの作られた真正性）、イメージとテキスト（見出しの意図）など	明らかに政治的なものとしてのイデオロギー、常識・無意識・無自覚なものとしてのイデオロギー	人々がメディアで何をするか、テキスト内でのオーディエンスの位置づけ

表 1 を見ると、読み取るべき情報が誰に、どのように生産され、何のメディアを使用し、どのような技法で伝えられているかということを細かく分析することを重視していることが分かる。特に、「メディアの情報が真実だと確信させるため」や「作られた真正性」という言葉から、メディアに騙されないようにすることを前提としていることが分かる。このメディアの持つ危険性について、川上和久（1994）は以下のように述べている。

マス・メディアが人々の社会的現実認識に大きな影響を与え・・・（中略）・・・大きな社会的影響力を持っている以上、特定の権力と結びついて、その意図する方向の情報を選択して送出する危険性は大きく・・・（中略）・・・細心の注意を払う必要がある⁸。

確かに、メディアから情報を受け取る時には、その情報を疑う能力は必要であるが、この構図は「メディア＝悪」という認識を持ってしまう可能性がある。さらに、マスターマンは情報の受信について詳しく言及しているが、発信については言及していない。

⁷ マスターマン, L. (2010) 前掲書, pp.29-33, pp.155-298. を参考に筆者が作成。

⁸ 川上和久（1994）『情報操作のトリック その歴史と方法』講談社現代新書, p.107.

したがって、マスターマンのメディア・リテラシー観は批判的な分析に重点をおいたものであり、メディアに対抗するための能力としてメディア・リテラシーを位置付けている。

(2) バッキンガムのメディア・リテラシー観

バッキンガム, D. は以下のように述べ、マスターマンのメディア・リテラシー観を批判している。

メディア・リテラシー教育への単なる防御的アプローチは、(学習者の)メディアの消費者としての自らの経験と矛盾するだろう⁹。

このことを換言すると、単にメディアに騙されないようにするという姿勢だけでは不足しているということである。バッキンガムは、メディアが独力で受動的なオーディエンスに価値観を押し付ける力について疑問を抱いている。その上で彼はさらに、発信者の立場としてのメディア・リテラシー観を提示している。

メディアが必然的にそして不可避に有害であるとか、若い人たちがメディアの影響の単なる受動的な犠牲者であるといったような見方から始めるべきではない…(中略)…保護の一形態ではなく、参加の一形態と見られるべきである¹⁰。

バッキンガムは、子どもたちを最終的にはメディアの制作者にすることを重要としている。その意図は、制作する側の考えが分かれば、情報の受け手の考えも分かるというものである。これはメディアへの批判的な参加を意味し、参加のための参加が目的ではない。メディアがもつ特性やその効果について、情報を発信するという方法で理解し、主体的な態度を養うのである。また、自らが発信者となるためには、既存のメディアを分析することが有効としている。メディアの分析をする際の視点として、バッキンガムは以下の四領域を提示している（表 2-5）¹¹。

⁹ バッキンガム, D. (2006) 『メディア・リテラシー教育 学びと現代文化』 世界思想社, p.21.

¹⁰ バッキンガム, D. (2006) 同上書, pp.21-22.

¹¹ 吉田正生(2007)「メディア教育とシティズンシップ」『社会科公民教育における英国シティズンシップ教育の批判的摂取に関する研究』 pp.25-29. に筆者が加筆.

統括 目標	メディアは、情報を生産しそれを売って利潤をあげている営利企業である。				
下位 視点	経済学的視点	法学的視点	政治社会学的視点	技術的視点	組織論的視点
主発 問	○メディアは何を売っているのだろうか。 ○メディアは商品をヒットさせるためにどんなことをするのだろうか。	○メディアを規制している法規にはどのようなものがあるのだろうか。 ○その実効性はどうなのか。	○メディアが作成する情報に大きな影響を及ぼすのはどのような社会集団なのか。逆に声が反映されていない社会集団は何か。 ○私たちはメディアが流す情報をそのまま受け取るしかないのか。	○どのような技術を駆使して情報を生産しているのか。	○どのような人たちがどのように力をあわせて一つの情報を生み出しているのか。
下位 目標	メディアは経済活動を行っている。	メディアは法的規制の下に置かれている。	メディアは社会的存在であり、様々な社会組織や社会集団と相互交渉をしている。	新聞社は新聞独自の、テレビ局はテレビ独自の技術を用いて情報を制作・流通させている。	一つの情報がわれわれに届けられるまでにはいろいろな人々の働きがある。

表2 メディア分析における「制作」の視点

表 3 メディア分析における「言語」の視点

統括 目標	メディア、情報を生産するに当たっては固有の文法を用いて構成している。		
下位 視点	「文法」の歴史	「文法」の効果	ジャンル（適用「文法」の相違）
主 発 問	○現在も踏襲されている制作作法はどのようにして定着してきたのか。（制作作法） ○メディアの約束事はどのようにして確立されたのか。（約束事）	○ある技法は、どんなイメージを生み出す効果があるか。（選択） ○他の技法が併用されたとき、効果にどのような違いが見られるか。（連携効果）	○ジャンルによって、制作作法や約束事は異なるのだろうか。
下位 目標	メディアが用いている制作作法や約束事は、長い年月をかけて定着してきた。	メディアが用いている「文法」を知り、テキスト読み書きやメディアの意図を解釈するのに役立てる。	メディアがジャンルによって使い分けている「文法」を知り、テキスト読み書きやメディアの意図を解釈するのに役立てる。

表 4 メディア分析における「表象」の視点

統括 目標	メディアが発出する情報（テキスト）は、メディアの何らかの意図のもと構成されている。		
下位 視点	客観性の装いの解体	表象および価値観の淵源の同定	ステレオタイプ化
主 発 問	○メディアが伝えていることは、事実なのかそれとも誰かの意見（解釈）か。	○メディアの言っていることは誰の意見（解釈）と同じだろうか ○メディアがとりあげていない見解はどういうものか。	○メディアはどのようにしてステレオタイプを生み出し、浸透させているのだろうか。

下位 目標	メディアは、事実そのものを伝えているように見せているが、実は何らかの見解によって切り取ったものを伝えている。	メディアが伝えていることの中には、誰か（特定の社会集団）の見解や価値観が入り込んでいる。	ある社会集団についてのステレオタイプをメディアは～～のようにして生み出している。
----------	--	--	--

表 5 メディア分析における「オーディアンス」の視点

統括 目標	情報の受信者がメディアを解釈し、意味をつくりだす。		
下位 視点	影響	解釈	活用
主発 問	○メディアが流す世界像・事件像・人物像は、それらに対するわれわれの見方に影響を与えているのだろうか。	○メディアが流した情報のうち、我々はある情報は間違いないとし、他のはおかしいとする。なぜか。	○我々はどのようにして情報を有効に活用しているのだろうか。
下位 目標	メディアが流す世界像・事件像・人物像は我々の判断に少なからず影響を与えている。しかしそれはメディアが構成したものである。	情報の正否の判断には、我々の社会的背景、メディアとの間の心理的要因、利用経験、性格、テキストを読み解く技能、既存の知識などによって様々なものが関係している。	我々が情報を活用する際、自分たちに必要な情報を選択し、それらを情報活用のルールやマナーに従っている。

以上のことから、バックinghamはマスターマンの情報の批判的な受信という視点に加え、情報を能動的に発信することに重点を置いている。「制作」や「言語」、「リプレゼンテーション」では、マスターマンの重視する批判的な受信に共通する点が多い。特に「リプレゼンテーション」の視点では、メディアは現実を再構成しているという立場から、情報の中に入り込んでいる価値観やステレオタイプを読み取ろうとしている。

マスターマンとの大きな違いは、オーディアンスを客観的に捉えているということである。マスターマンは学習者＝オーディアンスと位置づけ、オーディアンスの情報に対する受け取り方を自分の受け取り方として客観視することが重要としている。しかし、バックinghamはオーディアンスを必ずしも学習者と重ねることを求めているわけではない。それは、学習者が情報を発信する対象としてのオーディアンスの存在があるからである。自

身が発した情報をオーディエンスはどのように受け取るか、を考えるということを念頭に置いている。

しかし一方で問題点もある。バッキンガムは、メディア・リテラシーを情報の批判的な受信に裏付けられた情報の発信としているが、発信の活動がゴールになっている。発信を行い、その影響を評価する活動は重要である。しかし、その活動から生まれる学習者と社会の関係は決して広くはない。現代社会は日一日と周囲のメディア環境が変化している。その中には即時的で双方向の特徴を持つメディアも存在している。橋元良明（2011）は、このようなメディアの条件として「空間的障壁の克服」「双方向性」「同時性」を挙げ、以下のように述べている。

この条件が備わったために、圧倒的な臨場感が生まれ、情報の交換効率が飛躍的に高いものとなった。・・・（中略）・・・距離的に離れたところにある空間を共有するとともに、一方で隣にいてもそれぞれ異なった空間をもつシーンが出現した¹²。

このような状況では、受信と発信はほぼ同時に行われ、その活動を分ける境界線は曖昧になっている。これからの時代は、情報の受信と発信の両者を包括的に捉えた、新しい能力を要求している。

（3）鈴木みどりのメディア・リテラシー観

鈴木は次のようにメディア・リテラシー観を述べている。

メディア・リテラシーの取り組みにおいては、つねにメディアと自分との間に一定の距離を置いて読むことが必要である。クリティカルな読みとは、メディア・テキストを否定的にとらえ、批判することではない。テキストを客観的かつ分析的に読み解くことによって、自己の判断にもとづいた自律的読みを導き出すことを意味している¹³。

このことから分かるように、鈴木も批判的な受信に重点を置いていることが分かる。

¹² 橋元良明（2011）『メディアと日本人 変わりゆく日常』岩波新書、p.26.

¹³ 鈴木みどり（2004）『新版 Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』リベルタ出版、pp.23-24.

しかしそれは、情報を否定的に受け取って騙されないようにするという意味ではなく、情報を自分の中に落とし込み、それを生産的なものにしていく態度を重視している。また、鈴木はメディアの研究モデルについての構成図を以下のように示している（図2）。

このモデルは、メディアの「現実」は「生産・制作」、「テキスト」、「オーディエンス」の3つの要素で構成されていることを示している。つまり、「現実」を捉えるためには、メディアがどのように制作されたのか、どのような文脈で語られているか、オーディエンスはどのように受け取っているか、ということを読み取る必要があるとしている。この考えはマスターマンと共通している部分が多いが、大きな点で異なっている。それは、マスターマンは発信に意味を見出さなかったことに対して、鈴木は発信する活動もメディア・リテラシーと定義していることである¹⁴。しかし、情報の発信よりも受信に重点を置いていることから、マスターマンの考えに近いといえる。

¹⁴ 鈴木みどり（2004）同上書, p.17.

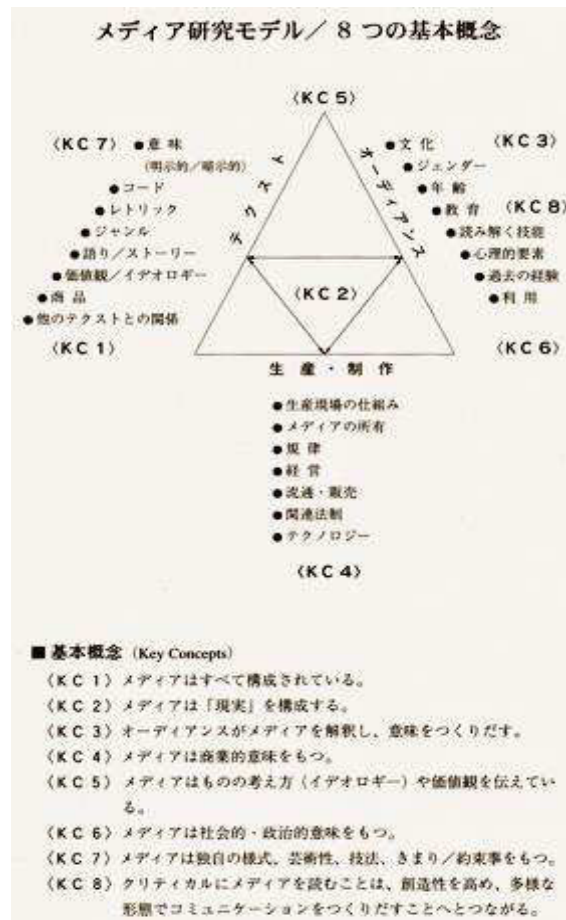


図 3 鈴木メディア研究モデル

2. メディア研究の課題

以上のように、メディア・リテラシーの考えは研究者によって様々である。もちろん、その研究当時の社会の状況によって異なる可能性を考慮すると当然のことである。しかし、このことは同時に、現代社会に対応したメディア・リテラシー観を提示する必要があるということも示している。かつて情報メディアは、一方向の性格が強いという特徴を持っていたが、最近では双方向の性格をもったメディアが増加してきている。こういった現状を考慮してメディア・リテラシーを定義する必要があるだろう。

前述した内容を基に、メディア研究の課題を以下に 3 点挙げる。

- ・メディアが即時的に情報の受信と発信が行えるようになっている現状に対応できていない。
- ・メディア・リテラシーの発達段階、具体的な習得方法について言及していない。
- ・メディア分析をどのように教育に適用するのかということが不明。

以上の3点を問題意識として、以降の論を進めていく。

第2節 教育におけるメディア教育の現状と課題

1. 情報化社会への中央教育審議会の対応

中央教育審議会が、社会の情報化に対して初めて触れた答申は生涯教育に関するものであった。その一文を以下に示す。

社会の都市化や情報化を進めており、このような状況の下で、多くの人々が新たな知識・技術の習得や主体的な情報選択能力の涵（かん）養、都市生活への適応など種々

の対応を迫られている¹⁵。

科学技術などの急速な発達により、当時の社会でもその変化への対応が求められていたことが読み取れる。しかし、この時はまだ生涯教育を中心に考えられており、とりわけ学校教育の中で情報化に対応するという段階にまでは触れられていない。

しかし、その 10 年後に出された 1991 年の答申の中では以下のように述べられている。

近年の社会の変化は、国際化、情報化の進展、さまざまな技術革新の進展などますます急速なものとなっており、高等学校の職業学科もこれらの変化に適切に対応していくことが求められている¹⁶。

このことから、社会の情報化の影響は高等学校の段階にまで及んでいることが分かる。また、この答申で求められている高等学校像の中に、「時代のニーズに合った情報処理技術者の養成を目指した高等学校」という文言が見られる。つまり、情報機器の取り扱いを教育の中に取り入れることを求めているのである。

さらに 1997 年に出された答申では、中高一貫教育の中で「情報、外国語などに重点を置いた学習を行うことができるようにすること」を留意する必要があるとされている。また、生徒に求める能力とその教育活動について以下のように述べている。

情報化に対応する教育を重視する観点を軸に据えて、6 年間にわたり、十分な時間をか

けてインターネットなどの情報ネットワークを活用したり、情報リテラシーを体系的に育成したり、情報モラルをしっかりと身に付けさせるような教育活動を積極的に取り入れていくことが期待される¹⁷。

¹⁵ 中央教育審議会答申（1981）「生涯教育について」

¹⁶ 中央教育審議会答申（1991）「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」

¹⁷ 中央教育審議会答申（1997）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」

ここでは、情報リテラシーと情報モラルの習得を生徒に求めている。情報リテラシーとは、「情報機器の操作などに関する観点から定義する場合(狭義)と、操作能力に加えて、情報を取り扱う上での理解、更には情報及び情報手段を主体的に選択し、収集活用するための能力と意欲まで加えて定義する場合(広義)¹⁸⁾」がある。広義の場合、前述のメディア・リテラシーと類似する点が多いため、本論では同義語として扱う。情報モラルとは、「プライバシーや著作権の侵害など、個人情報の収集、管理に関する情報社会のルールというべきもの¹⁹⁾」である。このことは、これらの能力の育成を中学校段階にまで求められるようになるほど、社会の情報化は進展していたことも示している。

しかし、1998年の答申から社会の情報化、メディアに対して強い警戒の色が見られるようになる。モノが豊かになり、それによって失われるものについて、答申では以下のように述べている。

高度情報通信社会では、子どもであっても、大人と同様に、多くの多様な情報に簡単に触れたり発信したりすることができ、両者の垣根は極めて低くなっている。このことをよい方向に生かせば、子どもたちの知性や感性を触発し、日常生活の幅を広げ、それを豊かにすることができるであろう。・・・(中略)・・・しかし、その一方で、情報メディアへの過度ののめり込みは、屋内への閉じこもりに表れるような人間関係の希薄化、直接体験の不足、心身の健康への影響などの問題に拍車をかけるおそれもある²⁰⁾。

中央教育審議会はこれ以後、情報化によってもたらされた恩恵と、それによって失われつつあるものを、「情報化の光と影」と例え、特に小・中学校の児童・生徒とメディアとの距離を離す論調に変化する。つまり、情報と上手く付き合えば恩恵は得られるが、それに伴うリスクも高いため、子どもたちのテレビゲーム・パソコン・インターネット等との関係を見直すべきだということである。このことを裏付けるように、門脇厚司はテレビの効力の一つを以下のように述べている。

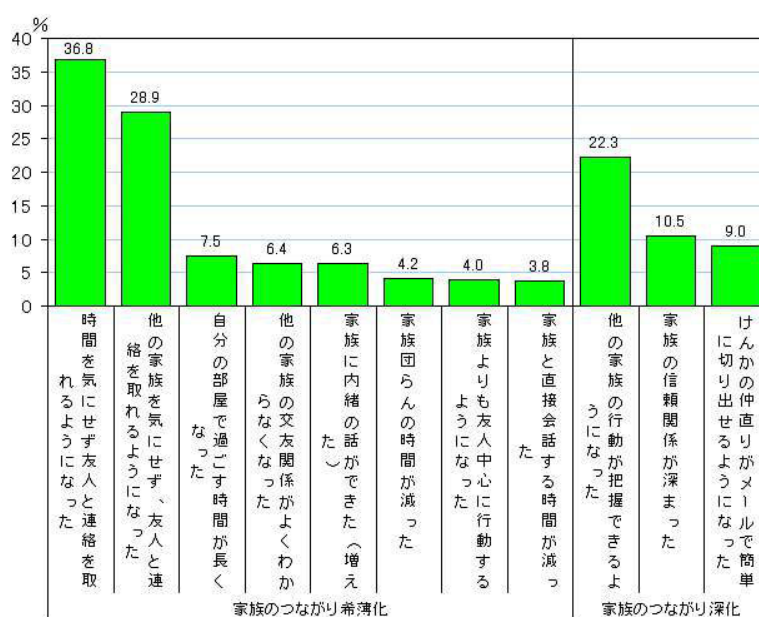
¹⁸⁾ 総務省(1998)「通信白書」

¹⁹⁾ 文部省(1990)『情報教育に関する手引き』ぎょうせい, pp.107-109. を要約して引用.

²⁰⁾ 中央教育審議会答申(1998)「新しい時代を拓く心を育てるために 次世代を育てる心を失う危機」

(子どもたちは) テレビから発せられる一方的で強すぎる刺激から身を守るために、外からの刺激にまったく反応しなくなり、反応しない状態が習い性になると、今度はテレビをみていないときでも外界からの刺激に反応しなくなるというのである²¹。

このような状況を憂慮して、中央教育審議会は、子どもたちがメディアと接する時間や機会を制限するような方針を打ち出した。この方針の重要性は、2007年に内閣府が行った、「IT 機器と家族のつながり」に関わるアンケート調査からも読み取ることができる(図4)。



(注)「携帯電話・PHSやインターネットを使うようになってから、以下の変化はあなたご自身にあてはまりますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。(○はいくつでも)」という問に対する回答の割合。回答者は、全国の15歳以上80歳未満の男女3,383人。

(資料)内閣府「国民生活選好度調査」(2007年)

図4 IT 機器と家族のつながり²²

以降の中央教育審議会の答申(2002年²³、2003年²⁴、2005年²⁵)は、情報化の危険性を訴え、子どもたちとメディアの関係性を考え直すように訴える内容となっている。しかし、2007年の答申から子どもたちとメディアの距離を離すだけでは解決にならないと

²¹ 門脇厚司(1999)『子どもの社会力』岩波新書, p.11.

²² 内閣府(2007)「国民生活選好度調査」

²³ 中央教育審議会答申(2002)「新しい時代における教養教育の在り方について」

²⁴ 中央教育審議会答申(2003)「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」

²⁵ 中央教育審議会答申(2005)「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について 青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について」

いう論調が展開される。そのことが読み取れる箇所を以下に示す。

青少年がこれらを情報の入手手段としてだけでなく、情報の発信手段や創作・表現の場として、また新しいコミュニケーション手段として使いこなしていることは、情報化社会を生きる青少年が社会と意欲的にかかわり成長していくに当たって大変頼もしいことである。・・・(中略)・・・情報メディアの発信側にいる大人に対しては、青少年が社会のルールやマナー等を情報メディアを通じて学んだり、情報メディアの活用や報道活動等への参画により青少年が社会とかかわる体験や社会参画の機会を得たりすることができるよう支援すること等を通じて、青少年の健全育成に資する情報メディア環境の整備に向けて不断の努力が求められる²⁶。

このように、教育は情報メディアを有効に活用する場を提供していく必要性を打ち出している。その具体的な方策には、NIE（教育に新聞を）などの取り組みや、情報端末「ケータイ²⁷」に対する認識を子どもたちと家庭の間で共有するなどの活動が挙げられている。さらに、学習指導要領の改善に関わる 2008 年の答申では、以下のように述べられている。

小学校段階では、各教科等において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの積極的な活用を通じて、その基本的な操作の習得や、情報モラル等にかかわる指導の充実を図る。特に、総合的な学習の時間において、情報に関する学習を行う際には、問題解決的な学習や探究活動を通して、情報を受信し、収集・整理・発信したり、情報が日常生活や社会に与える影響を考えたりするなどの学習活動が行われるよう配慮することとする。また、道徳においても、その指導に当たって、発達段階に応じて情報モラルを取り扱うよう配慮する²⁸。

この答申の大きな意義は、社会の情報化に対して小学校が行うべき方策の道筋を示し

²⁶ 中央教育審議会答申（2007）「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」

²⁷ 保護者は子どもとの連絡のために電話機能に着目して携帯「電話」を子どもに買い与えているのに対し、与えられた子どもはメール送受信やインターネット閲覧等の様々な機能を有した情報端末「ケータイ」と捉えている。

²⁸ 中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」

ていることである。また、2013 年に出された答申には、「学校教育の中でもディベートやプレゼンテーション等を積極的に取り入れ、コミュニケーション能力の育成を図るとともに、日本の豊かな伝統や文化を理解し、世界へ情報発信する力の修得を図ることが重要である²⁹⁾」と述べており、その具体的な方法についても言及している。

以上の答申から、中央教育審議会が捉えるメディア・リテラシーを以下のようにまとめることができる。

- ・ 情報を受け身に受信するのではなく、情報を批判的に分析し、有効に活用していくことができる能力。
- ・ 自己の不利益とならないように、情報モラルを身に付け、適切に情報と関わることをすることができる能力。
- ・ 幼稚園、初等・中等・高等教育など、各段階において段階的に育成されるべき能力。

しかし、これらの能力を培うために、学校生活、教育課程内でどのような支援を子どもたちに行っていくべきか、という課題については各学校に委ねられているということが現状であり、課題でもある。

2. PISA 調査にみるメディア・リテラシーの可能性

文部科学省は学習指導要領の改訂に当たり、OECD（経済協力開発機構）の PISA 調査の結果を強く意識している。学習指導要領の中で特に意識された要素は以下の 3 点である。

OECD（経済協力開発機構）の PISA 調査など各種の調査からは、我が国の児童生徒については、例えば、① 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・

²⁹⁾ 中央教育審議会答申（2008）「今後の青少年の体験活動の推進について」

技能を活用する問題に課題，② 読解力で成績分布の分散が拡大しており，その背景には家庭での学習時間などの学習意欲，学習習慣・生活習慣に課題，③ 自分への自信の欠如や自らの将来への不安，体力の低下といった課題，が見られるところである³⁰。

我が国のこのような現状を解決するために文部科学省は OECD の提唱するキー・コンピテンシーを取り上げた。キー・コンピテンシーは以下のように定義されている。

- ・「キー・コンピテンシー」とは、日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシーをすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で、特に、人生の成功や社会の発展にとって有益、さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されたもの。
- ・個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略³¹。

以上のように、キー・コンピテンシーとは子どもたちが現代社会に対応していくために必要な能力として選択されたものである。したがって、現代社会が求めるメディア・リテラシーを考える上で重要な視点となるものである。

キー・コンピテンシーは、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」「多様な集団における人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」の3つの要素から成り立っている。これらの能力と、前述したメディア・リテラシーを関連させて見ると、特に「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」の「テクノロジーを活用する能力」の項目が深く関連している。特に「テクノロジーには、遠隔地間の協働、情報へのアクセス、他人との双方向のやりとりなど新たな可能性。そのためには、E-mailの送信など単なるインターネットの活用スキル以上の能力が必要」という記述は現代社会に求められているメディア・リテラシー観を示唆する内容となっている。つまり単なる受信・発信だけではなく、それ以上の能力の可能性を提示している。現代社会におい

³⁰ 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領総則編』，p.1.

³¹ 教育情報センター「教育における“コンピテンシー”について OECD PISA調査の基本概念」旺文社

ではツイッター（twitter）やソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）などのツールが広まり、以前よりも格段にメディアが我々の身近になってきたことは前述の通りである。これらの新しいメディアの広がりについて、武田徹（2011）は以下のように述べている。

ソーシャルメディアこそジャーナリズムの担い手になるのだとする立場もある。しかし、そうした立場は、根深いマスメディアへの反感、マスメディア・ジャーナリズムへの批判をその背景に踏まえている³²。

つまり、既存のメディアでは不十分であるという現実が、新たなソーシャルメディアのようなメディアの需要を生んでいるということである。しかし、そこには情報の即時性や双方向性が保障されるようになったという利点の反面、誰もが簡単にメディアの制作側になれるということで様々な弊害も生じている。

以上のような OECD の提唱にもあるように、新たな可能性もこれらのツールなどの新たなメディアから生まれるだろう。したがって、どのような社会の変化にも対応できる柔軟な姿勢や、情報を社会の関係と関連して分析し、自らの考えを広げていくことができる能力が必要になってくる。そのためには、情報の受信者・発信者という二分法にとられるのではなく、それらを相互作用的なものとみなしていく必要がある。本研究は、そのような能力を養うために「対話」と「メタ認知」をキーワードにして、小学校社会科のメディア単元学習を分析し新たな可能性を提案していくものである。

第2章 対話的送受信によるメディア・リテラシーの構築

第1節 対話の視点を加えたメディア・リテラシー

1. 情報の受信と発信の関係

小学校学習指導要領における社会科メディア単元の、目標と内容は以下のようになっている。

目標

³² 武田徹（2011）『原発報道とメディア』講談社現代新書, pp.113-114.

- (2) 我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の産業の発展や社会の情報化の進展に関心をもつようにする。

内容

- (4) 我が国の情報産業や情報化した社会の様子について、次のことを調査したり資料を活用したりして調べ、情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする。

ア 放送、新聞などの産業と国民生活とのかかわり

イ 情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり³³

これらのメディア単元で重視されていることは、「情報産業と国民のかかわり」や「情報化による影響」を理解し考えることである。すなわち、「情報産業と国民のかかわり」や「情報化による影響」を理解し考えるということは、自分たちが一方向に受信・発信を行い、その方法を学ぶというものではない。自分たちが受信・発信を行うということは、どのような人や物事と繋がっているのかを考え理解し、その行動が社会にどのような影響を及ぼすのかについてまで考えることでもある。つまり、小学校社会科で子どもたちに獲得させたい能力とは、情報の受信者と発信者の立場を相互作用的に捉え、社会の関係性が理解できるようになる能力である。しかし、学習指導要領の記述内容は曖昧であり、文部科学省がどの程度までこれらの能力を意識しているのかは明確ではない。したがって、情報の受信者と発信者の立場を相互作用的に捉えるという視点を持ちながら学習指導要領を読む必要がある。

前述の通り、マスターマンや鈴木は情報をどのように受信するかという能力を重要視している。以下にこの関係性を簡単に図示する(図5)。このとき、情報は発信者から受信者への一方向性しか持たない。これは社会の関係性を理解するという点においては不十分であると言わざるをえない。もちろん、情報を批判的に分析する能力は重要である。しかし、高度情報化社会である現代において、情報・メディアを一方向に利用するといふだけにとどまることは難しい。社会の関係性を見ていく際には、自らが情報社会に関わっていくことを念頭におく必要がある。

学習者

³³ 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領社会科編』pp.24-25.

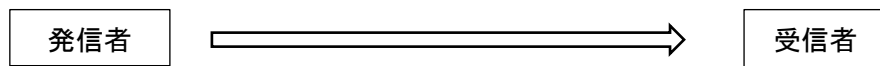


図5 学習者が情報を受信する時の関係性

また、最終的にメディア制作を目指すバッキンガムの、情報を発信する能力を重視する考え方も十分とは言えない。確かに情報を受信し、受け取ったことを自分なりに解釈し、それを自分の目的の達成のために外部に発信するという行為は、一方向的な受信よりも高度な活動である（図6）。さらに、情報を受信する時の関係性よりも社会との関係が広がっている。前者は受信者である自分が情報の最終到達地点であったが、後者においては受信者である自分が発信者になることから、関係性は際限なく広がっていくことが考えられる。しかし、この考え方にも問題点がある。それは、学習者が情報を発信することが最終の活動となってしまっていることである。情報を発信することは技術であり、内容ではない。発信することによって社会にどのような影響があり、それを受けて自分たちはどのようなことを考えるのか、という段階にまで学習を深めなければ、情報の送受信の方法を学ぶ「情報操作」の学習と大差はない。バッキンガムもこの点に同意しているものの、具体的な方法については言及していない。



図6 学習者が情報を発信するときの関係性

以上のことから、情報の受信・発信の二分法で語られる情報と社会の関係性には限界があることが分かる。情報とは常に一定のものではなく、何らかの人やメディアに捉えられ、解釈された時点で元のものとは全く違った意味合いを持つものである。また、受け取った情報や発信した情報は、自分の意図したものとは違った意味合いをもって社会に出ていくことになりがちである。したがって、現代社会と情報との関係性を見ていくためには、双方向の視点、発した情報の影響を考える視点が必要になる。

2. 構成主義的アプローチによる対話的送受信

社会の関係性を理解し考える一助となるものが「対話」であり、考え方としての「社会構成主義」である。社会構成主義は、社会は様々な考えや人、文化などによって構成されたものであり、そこには唯一絶対のものは存在しないのではないかという疑問を投じる立場である。その考えが顕著に表れているガーゲン, K. J. の、分析についての考えを以下に示す。

私たちにとって必要なのは、過去のできごとに関する入念な説明ではなく、社会に対する鋭い分析を続けることです。この分析は、今起きていることについて多様な立場からの理解を可能にし、さまざまな人々と対話を進めていくてがかりとなり、私たちの目を未来の可能性に向けさせてくれるようなものでなければなりません³⁴。

分析とは多くの場合、現在のある時点でどのようなことが起こったのかということの説明に主眼が置かれている。しかし、それでは分析が終わった時点で分析した結果は過去になり、過去を語っていることになる。インターネットやマスメディアが普及している現代社会において、現在のある時点を限定的に捉えることは極めて難しい。ただし、ガーゲンは分析を無駄なことであるとは言っていない。重要なことは、未来の可能性のために分析を続けていくという姿勢であるというのである。分析が過去の説明のために行われるものではなく、未来を語る材料となり、我々に新たな視点を与えてくれるものである限り、分析は極めて有効なものである。さらに、そのためには対話が必要であるということも示している。

対話については様々な定義があり、日常会話や話し合いといった身近なものから、ヴィゴツキーの自己内対話や、他者に説明することによる理解の精緻化のための対話のようなものまで数多く存在する。それらの中で社会構成主義が示す対話は、自分の考えを常に反省し、社会の関係（歴史や文化など）からお互いの考えは構成されたものであると気づくための手段である。自分の考えを常に反省することについての意義を、ガーゲンは以下のように述べている。

³⁴ ガーゲン, K. J. (2004) 『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版, p.288.

ある対話のあり方を反省するためには、このように異なる共同体に属する声が必要なのです。二つの共同体が、私の中で出会います。つまり、私自身が、二つの世界をつなぐ水路となるのです。自らを反省することによってはじめて、自分が入り込んで多くの共同体を結びつけることができるようになり、より調和的に世界を再構成する可能性が開かれることになります³⁵。

対話の中で自分の考えを反省するということは、自分とは異なる考えに出会うことであり、また自分の考えを再認識する機会でもある。社会と自分の関係を考える際、一般に自分の経験や所属する共同体の文化によってのみ考えることが多い。しかし当然のことながら、社会には自分とは異なった考え方や文化の人間がほとんどであり、そのことを認めない限り、自分と社会の関係は閉鎖的なものになってしまう。つまり、自分と社会の関係を捉えるには、自分の考えが絶対ではないという姿勢を備え、異なる文化の文脈を認めることが重要である。このことは、情報の受信者と発信者の関係を考える際にも有効である。

情報を受信する際、その情報を正しい・正しくないという二分法で批判してしまうことが多い。このことは「メディア＝悪」という前提をもった、メディア・リテラシーをメディアに対する防御的アプローチで語る研究者が主張する文脈である。しかし、その正しい・正しくないという基準は極めて曖昧で、ある共同体に属する人にとっては正しく、その共同体に対立する人にとっては正しくないといった状況は、領土や経済に関する問題など、近年多く見られる。つまり、ここで語られるべきは正しい・正しくないといった二分法ではなく、共同体によって受け取り方に違いがあるということを受け止め、未来に向けて考えていくことである。この点は鈴木の実信活動の批判的アプローチの考え方と立場を同じくする。

また、情報を発信する際にも同様のことが言える。前述したように、情報を発信することによって社会にどのような影響があり、それを受けて自分たちはどのようなことを考えるかという段階にまで学習を深めなければいけない。自分の発信した情報が社会に与える影響を考えると、自分の文脈でのみ考えていると、意図せざる結果に陥る場合がある。現在、社会問題になっているツイッター（twitter）やミクシィ（mixi）などのSNSに関わる問題が最たるものである。このような問題が発生することから、子どもた

³⁵ ガーゲン, K. J. (2004) 同上書, p.95.

ちをインターネットメディアから離そうとする動きも一方では存在している。しかし、この動きは「メディア＝悪」という認識のもとで行われている単なる防御的アプローチと同等である。自分が意図せざる影響が出たとき、そのことについて反省し、未来に向けて目を向ける視点が必要である。発信に重点を置くバッキンガムの考え方はこの視点が不足している。つまり、自分が発信した情報が将来的にどのような人に受け取られ、どのような影響を及ぼすのかということを考えることによって、情報の発信による自分と社会の関係性を考えることができるのである。

以上のように、情報の受信・発信を構成主義的アプローチで見ると、それぞれの課題が明らかになる。このことに関連して、ガーゲン³⁶は情報の受信者・発信者の関わりを以下のように述べている。

この（メディアの）「犠牲者」というイメージは、現在の分析における重要な核となっています。私たちが、自分の意思に反してコミュニケーションの集中砲火—大部分はメスメディアによる—の犠牲者になっていると主張する声は、さまざまところで上がっています³⁶。

ガーゲンも、現代社会において人々が「メディアの犠牲者」とであると認識する考えが根強く存在していることを認めている。しかし、このことを認めた上で新たな視点も提示している。

視聴者は、受動的な犠牲者などではなく、行動的で思慮深い批評家として扱われます。あるいは、知らないうちに形成された権力を脅かす復讐者として描かれることもあります³⁷。

ここで言及されている復讐者とは、メディアによってある行動を促されていると感じた受信者が、その思惑に反した行動をとることを意味している。例えば、メディアによってあるべき女性像が規定されていると考える人たちによる、権力への抵抗運動などが挙げられる。ここでは、その抵抗運動がメディアによって報道されることも見越しており、ここでの人々はメディアを利用して自らの意図を伝えるという復讐者として描かれ

³⁶ ガーゲン, K. J. (2004) 同上書, p.291.

³⁷ ガーゲン, K. J. (2004) 同上書, p.293.

ている。ただし、その復讐者の行動もメディアに利用されることも考えられる。この状況はほぼ際限なく繰り返されるものであるが、ここで考えるべきは情報の受信者と発信者の間にある密接な相互作用についてである。情報の受信者は単なるメディアの犠牲者ではありえず、またメディアも単に受信者から復讐されるべき対象ともなりえない。つまり、どちらが優位であるかというような議論ではなく、相互作用の結果どのようなことが起きることが考えられるかということを議論していく必要がある。

したがって、筆者の定義する対話的送受信とは、情報の受信者と発信者の関係を理解し、情報の送受信とその評価を繰り返し行うことによって、「メディア」という観点から見た社会の構成を考えていくというものである。その関係性を以下の図7に示す。

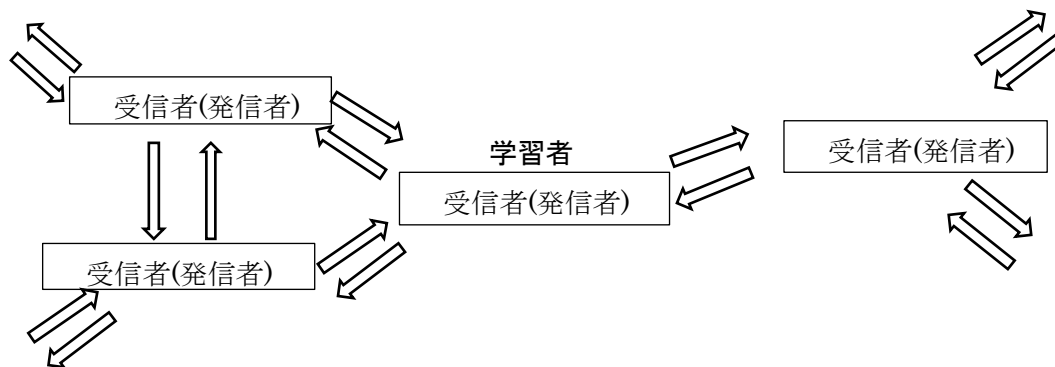


図7 対話的送受信の関係性

第2節 メタ認知形成の理論によるメタ認知形成

1. メタ認知の分類と発達段階

(1) メタ認知の分類

メタ認知とは、学習力を支える高次の認知機能であり、認知のための認知とも言われる。メタ認知の定義・分類について、三宮真智子の『メタ認知 学習力を支える高次の認知機能』を参考にまとめよう³⁸。

³⁸ 三宮真智子（2008）『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房, pp.1-16. を参考にメタ認知についてまとめた。

メタ認知という言葉は1970年代にフレーベルが用い始めたものである。フレーベルはメタ認知を大きく「メタ認知的知識」と「メタ認知的活動」分類し、定義した。（図8）

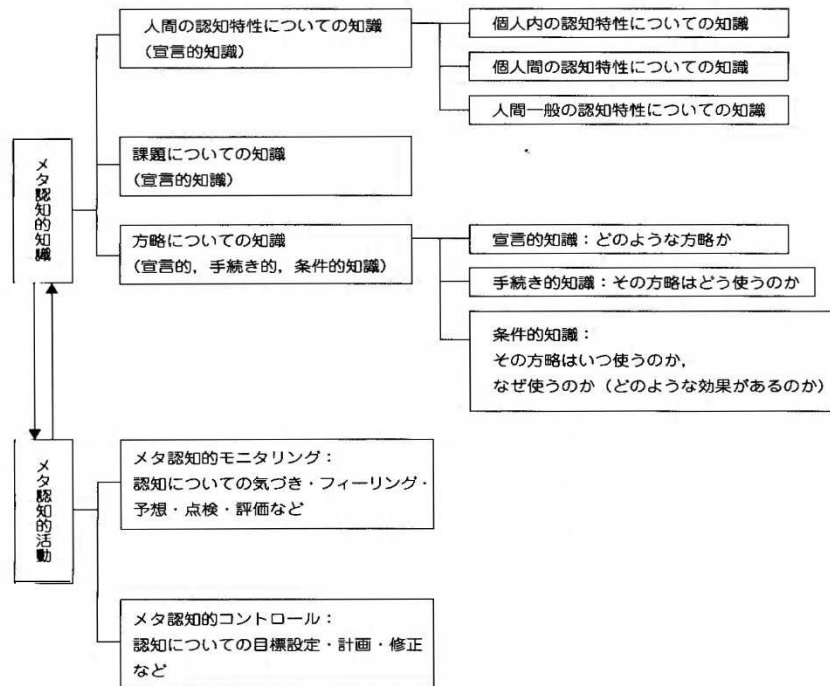


図8 メタ認知の分類

メタ認知的知識はさらに「人間（自分や他者、人間一般）の認知特性についての知識」「課題についての知識」「方略についての知識」に分かれる。「人間（自分や他者、人間一般）の認知特性についての知識」は個人内での認知特性や個人間の比較、人間の認知についての一般的な知識を示している。「課題についての知識」は課題の性質が、私たちの認知活動に及ぼす影響についての知識であり、「方略についての知識」は目的に応じた効果的な方略の使用についての知識である。さらに方略についての知識は、宣言的知識、手続き的知識、条件的知識に派生する。

メタ認知的活動は「メタ認知的モニタリング」と「メタ認知的コントロール」に分け

られる。学習活動を事前段階、遂行段階、事後段階に分け、それぞれの段階でモニタリングとコントロールの活動を循環的に働かせるものである。つまり、モニターした結果に基づいてコントロールを行い、コントロールの結果を再度モニターし、必要があれば再度コントロールを行う。このように相互に関わりながら働く活動をメタ認知的活動と定義している。（図9）

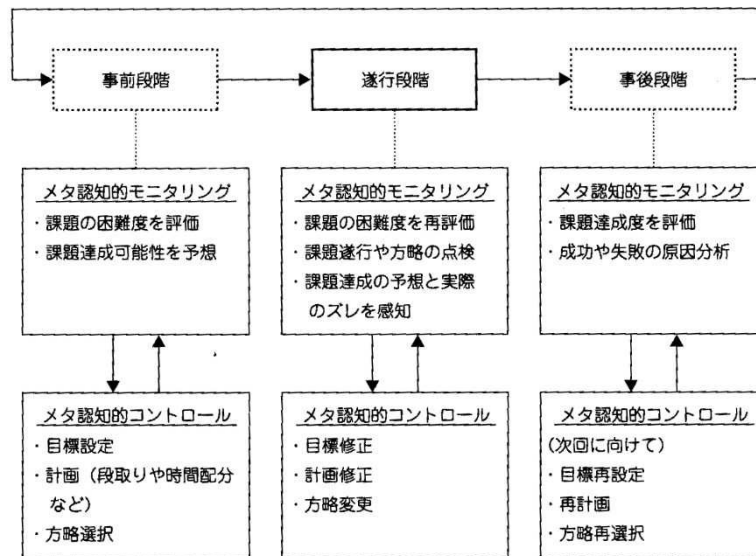


図9 課題遂行の各段階におけるメタ認知的活動

1986年にアメリカ心理学会主催のシンポジウム「知能とその測定」³⁹において知能の定義にメタ認知が加えられた。そのシンポジウムと1921年の同学会主催のシンポジウムの差異点は以下の通りである。

顕著な違いは、まずメタ認知に関するものであった。前回にはほとんど見られなかったが、今回の回答では、認知についての知識や実行プロセス（executive processes）といったメタ認知に関連する内容への言及が目立っていた。他にも、知識の役割や知

³⁹ スタンバーグ, R. J., & Berg, C. A. (1986) Quantitative integration: Definitions of intelligence: A comparison of the 1921 and 1986 symposia. In R. J. Sternberg & D. K. Detterman (Eds.), *What is intelligence? Contemporary*

識と心的プロセスの相互作用を重視した意見が見られた⁴⁰。

メタ認知は、自己の学習や行動に対して自身が評価を行い、それを反省して次の学習や行動をよりよくしていくというものである。つまり、この能力は社会構成主義の示す対話と通じるところがある。メタ認知は自分を客観的に見るための反省を行うので、自分が社会の関係の中でどのような場所に位置しているかを考え、社会の関係についての認識を広げていくために必要な能力である。

(2) メタ認知の発達段階

佐伯胖は、メタ認知に関わる視点について以下のように述べている。

視点を設定するとは自己の分身としての“小びと”を生み出し、対象に派遣してみることである。派遣された“小びと”がそこで様々に動いてみることを通して、人間は世界を理解していく⁴¹。

つまり、自らの視野や理解を深めるために主観的な視点ではなく客観的な視点である“小びと”を生み出し、それによって他者を理解したり自分を理解したりするのである。これはまさにメタ認知に関わる能力である。これに関連して、ピアジェ, J. はメタ認知的コントロールが可能になる時期について以下のように述べている。

前操作期にみられる思考の自己中心性 (egocentrism) からの脱却すなわち脱中心化 (dicentration) は、多くの場合、児童期になってようやく可能になる⁴²。

このことから、思考の自己中心性を脱却する時期は前操作期 (2～6歳) と具体的操作

⁴⁰ 三宮真智子 (2008) 『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房, pp.24・25.

⁴¹ 宮崎清孝、上野直樹 (1985) 『コレクション認知科学 3 視点』東京大学出版会, p.130.

⁴² ピアジェ, J. (1970) Piaget's theory. P. H. Mussen (Ed.), *Carmichael's manual of child psychology*. 3rd ed. Vol. 1. New York: Jhon Willey & Sons. 中垣啓訳 (2007) 『ピアジェに学ぶ認知発達の科学』北大路書房

期（7～11歳）の間、つまり小学校中学年前後の段階であることが分かる。そして、脱中心化によって子どもは自分の視点を離れて他者の視点をとる視点取得が可能になる。さらに、思考の自己中心性から脱却したのちに獲得する能力をピアジェは社会中心性と呼び、その能力をシーゲル, I. E. コッキング, R. R. (1983)⁴³は以下のように説明している。

客観的世界の前因果的理解から合理的アプローチへ移行するためには、子どもが思考の社会化を進めるように自己中心的な見方を減らす必要がある。すなわち、子どもは、自己の視点を客観化し、他人が別の見方を持っているかもしれないということ（視点の相互性）を理解しなければならない。発達初期の状態では、「自我が外的世界や他人と混同される。世界の見え方は主観的固執によって歪められ、他人の見え方は個人の視点が他人をすべて排除するくらい優勢であるという事実によって歪められる⁴⁴」この混同が少なくなり、子どもは徐々に他人の視点を意識するようになる。これは、社会中心性（sociocentrism）と呼ばれる。

この能力は自分の認識を社会に向けるために重要なものとなっている。自己の視点を客観化することがこの段階から可能となってくる。また、長島・寺田（1977）⁴⁵は、児童期中頃である9、10歳頃に思考過程の意識化やプランニングが見られるようになることから、9、10歳頃を発達の質的転換期と見る立場をとっている。長島・寺田はこの転換期で子どもが獲得するものは、具体的事物、事象に関連しながら、しかも具体物からは直接的には導かれない、より高いレベルでの一般化、概念化された思考能力であるとしている。この能力は言い換えるならば具体的事象の一般化である。さらにこの時期は、前述のピアジェが主張する思考の自己中心性の脱却の時期とも重複しており、自分と社会の関係を見ていく上で必要になってくる能力を獲得する重要な時期に当たる。

したがって、小学校段階の子どもがメタ認知を形成することは可能であり、それによって社会の関係についての認識が広がり、メディア・リテラシーを獲得することにつながると思われる。

⁴³ シーゲル, I. E. コッキング, R. R. (1983) 『認知の発達—乳児期から青年期まで』サイエンス社, p.96.

⁴⁴ ピアジェ, J. (1930) The child's conception of physical causality. New York: Harcourt, pp.301-302.

⁴⁵ 長島瑞穂・寺田ひろ子 (1977) 「子どもの発達段階」 秋葉英則他『小・中学生の発達と教育』創元社

2. メタ認知形成のためのサクセスフル知能理論

メタ認知的思考を獲得するためのモデルとして、スタンバーグ, R. J. がサクセスフル知能理論⁴⁶を提示している。その内容は以下の通りである。

分析的知能…知能の基礎となる情報処理システム

- ・メタ成分(メタ・コンポーネント)...問題解決を効率的に実行する成分。
問題認識、目標設定、その評価
- ・実行成分(パフォーマンス・コンポーネント)...問題要素の解読、解決策の比較。
三段論法的推論など。
- ・知識獲得成分(知識獲得コンポーネント)...問題解決に必要な知識を学習する成分。
選択的な比較、語彙の理解など。

創造的知能…経験的知能。新しい仕事をどれだけ効率的にこなすことができるか。

- ・新しさを処理する能力…新しい事態において学習し、考える能力。
- ・情報処理を自動化する能力…繰り返しなどによるルーチン化。
読書、演奏などがその例。

実地的知能…文脈的知能。自分の生活に関連した現実世界から選択・形成・適応する能力。分析的知能の応用にあたる。

- ・適応…周りの特定の文化に適応する技術。
採用面接のときに印象がよくなる技術など。
- ・選択…自分の才能や興味にあう環境を選択する能力。
- ・形成…選んだ環境が自分の能力と十分に適合しない場合でも、その環境を改変し、
適合させる能力。

分析的知能とは、物事の本質や状況を的確に分析・判断したり、問題を把握したりする能力である。この能力は問題解決や意思決定の場で役立つ能力であり、小学校社会科

⁴⁶ 村上宣寛 (2007) 『IQ ってホントは何なんだ？ 知能をめぐる神話と真実』 日経 BP 社, pp.82-86.

が公民的資質の基礎の形成を目指して行っている授業の中でも重要視されてきたものである。つまり、分析的知能を養うことを通してメタ認知的思考能力を形成することは、小学校社会科の教科内においても可能なことであり、かつ自分たちと社会との関係を見ていく上で重要な能力となる。また、分析的知能を支える3つの成分としてメタ成分(メタ・コンポーネント)、実行成分(パフォーマンス・コンポーネント)、知識獲得成分(知識獲得コンポーネント)が示されている。これらは知能のコンポーネント理論(図10)の中で、認知課題の解決過程に必要な成分として定義されている。特に、スタンバーグ(1986)⁴⁷の中で「私は、知能におけるメタ・コンポーネントの役割を、力をこめて強調する」と述べており、それぞれの成分が重要としながらも、メタ・コンポーネントが知能においてより高次の制御機能であるとしている。したがって、分析的知能ではメタ認知能力の形成が目的とされており、知識獲得成分や実行成分はメタ認知能力形成のための成分である。

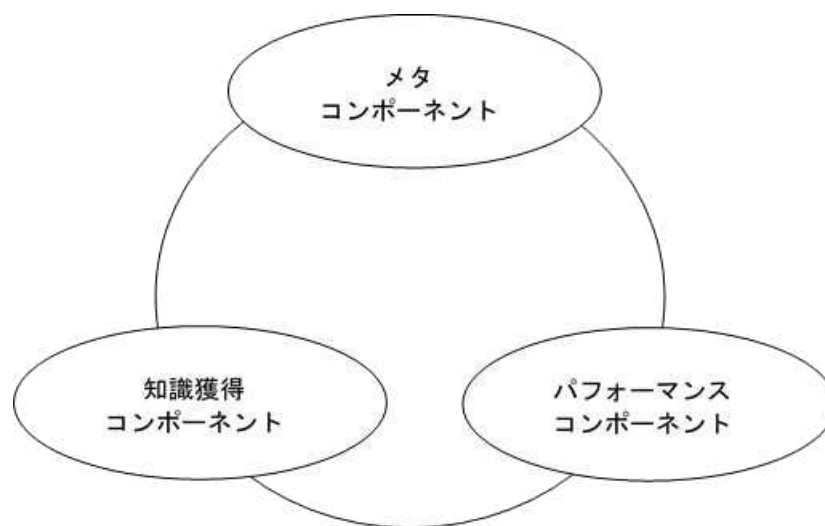


図10 知能のコンポーネント理論の成分間の関係

⁴⁷ スタンバーグ, R. J (1986) Intelligence Applied: Understanding and increasing your intellectual skills. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich. pp.24-25.

創造的知能は、適応すべき課題や状況に直面したときに、独創的な着想で行動の指針を見出し、問題を新たに捉えなおす能力である。この能力は、分析的知能と同様に基礎的な能力として位置づけられているが、教科教育内で養う能力というよりも日常生活で養われる能力である。読書や演奏など、日々の生活習慣の結果によって効率的に行うことができるような経験的なものであることがその理由として挙げられる。

実践的知能は、分析的知能・創造的知能を日常生活において具体的にどう活用していくかを判断し、その方法を見出す能力であり、日常的な賢さとも表現されている。この能力は教科教育における学習や日常生活の経験をもとに発揮される能力であるため、より発展的に位置付けられている。

このようにスタンバーグは、知能は分析的能力・創造的能力・実際的能力の3つの能力で構成されているとサクセスフル理論の中で提示している。スタンバーグはこれらの能力にはバランスが必要であるとしながらも、分析的知能と創造的知能が基礎的な能力であり、そこから実践的知能の獲得のために互いに関連し合っているという考えを示している。実践的知能において、メタ認知的要素が大きく関連し能力の基礎となることから、実践的知能が低い場合にはメタ認知形成に大きく関わっている分析的能力に立ち返る必要がある。言い換えると、メタ認知能力の基礎である分析的知能を養いつつ、創造的知能、実践的知能に発展させていくという流れとなる。（図11）ただし、創造的知能、実践的知能は教科教育内よりも日常生活や社会経験等によって培っていく能力である。つまり、メタ認知が形成される時期であり、かつ義務教育の最初の段階である小学校段階で、分析的知能を教化教育内で培う意義は十分にある。したがって、小学校段階では分析的知能の獲得を目指すことが妥当であると言える。

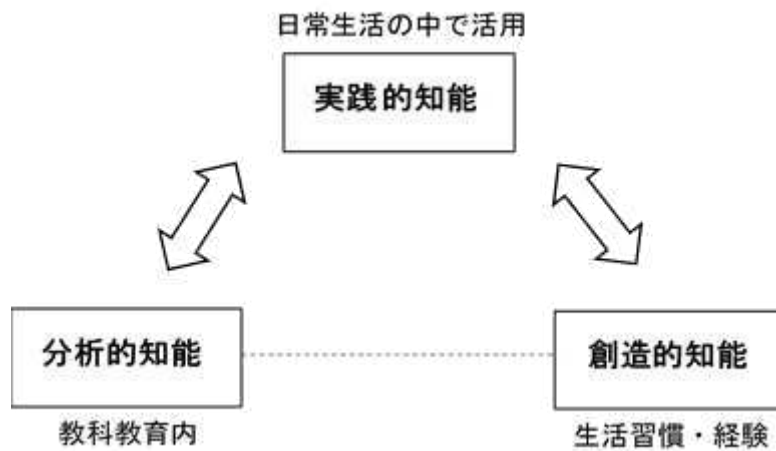


図11 サクセスフル理論における知能の関係

第3節 小学校社会科におけるメディア単元学習の現状と課題

1. メディア単元学習の分析のためのフレームワーク

本節では、実際の小学校現場で情報・メディア単元の学習がどのように行われている

かを分析していく。その際、分析のフレームワークとして以下の枠組みを使用する。（図12）

		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メタ 認 知 形 成 過 程	知識獲得 コンポーネント				
	パフォーマンス コンポーネント				
	メタ・コンポーネント				

図12 メディア単元分析のためのフレームワーク

（1）学習方法の視点

ここで意味する学習方法とは、単元の中で子どもたちが実際に行う学習活動や教師の発問のことである。単元の中で行われている学習活動や発問を分類するために、メディア・リテラシーで重視されている能力を参考に4つの視点を設定した。

1) 受動的受信と批判的受信

受動的受信とは、批判的に情報を読み取っているとまでは言えないが、情報を受信することを中心とするもの、また批判的受信とは、マスターマンらが重視するメディア・リテラシーの分析能力を中心とするものとして位置付ける。批判的に情報を読み取るということについて、鈴木は以下のように述べている。

メディア分析を試みるためには、単にメディアを評論するのではなく、まず、メディア内容を客観的に分析することが必要である。そのうえで、メディア・テキストがどのような視点や価値観にもとづいてつくられているかを、一歩離れたところからクリティカルに読み解き、意識化する必要がある⁴⁸。

⁴⁸ 鈴木みどり（2004）前掲書，pp.16-17.

以上のように、単にメディアを評論するだけでは批判的な読み取りとは言えず、何も考えずに読んだり、見たり、聞いたりしているに過ぎない。批判的な読み取りのためには、メディアが実際にどのような社会観、価値観を私たちに提示しているのかを分析していく必要がある。そのためには、計画された調査、事象の比較・分類、他者とのコミュニケーションなどの活動が行われなければならない。したがって、ここで意味する受動的受信と批判的受信の違いは、これらのような分析の視点をもってメディアの読み取りが行われているかいないかという点にある。

2) 活動的送信

活動的送信とは、バッキンガムの重視するメディア制作を中心とするものである。メディア制作と表現すると、子どもたちにとって困難な学習活動を想起してしまうが、必ずしもそうではない。このことに関連する考えを、バッキンガムは以下のように示している。

メディア制作は必ずしも「ハイテク」機材へのアクセスに関わらなくてもよい。安い使い捨てカメラや、たとえペンやハサミ、ノリを使ってでも多くを達成することができる。しかも、特に初期段階においては、制作活動を小規模で扱いやすいものにしておくことが重要である⁴⁹。

以上のように、新聞や広告を簡単な道具を用いてでもメディア制作は可能である。重要なことは、テキスト分析から技術を要する入門的な実践経験に発展させることである。したがってここでは、外部に情報を発信することが主な学習内容として考えられる。その活動例としては、学習の成果を新聞や広告、CMなどの制作を通して表現するものが挙げられる。

3) 対話的送受信

前述の対話的送受信の定義の通りである。

⁴⁹ バッキンガム, D. (2006) 前掲書, p.106.

(2) メタ認知形成過程の視点

メタ認知形成過程の視点として、前述のスタンバーグのサクセスフル理論における分析的知能を取り上げる。さらに、分析的知能を形成するために知能のコンポーネント理論を参考に分類の基準を設定した。

1) 知識獲得コンポーネント

ここでは、メディア単元の学習を進めていく上で必要な知識・技能を獲得する。例えば、批判的に情報を分析するとき、その分析方法を知らなければ効果的な学習成果を得ることはできない。また、ある問題について考えるとき、その問題のそのものの意味が分からなければ考えることもできない。学習活動を深めていく上で、基本的かつ重要な段階である。したがって、単元の最初の段階で行われることが予想され、単元の学習のために必要な知識や技能を獲得しているかどうかを分類の基準とする。

2) パフォーマンス・コンポーネント

ここでは、実際に問題解決を行っているかどうかを分類の基準としている。情報を批判的に受信するという学習内容であるなら、資料の収集や選択、分析が行われていればこの段階に該当する。

3) メタ・コンポーネント

ここでは、学習者が自らの学習活動を振り返り、評価しているかどうかを分類の基準としている。獲得した知識、実行した課題などを振り返り、自分たちの選択した方法は適切だったか、よりよい結果を出すためにはどのようにすればよいかを考える段階である。したがって、単元内においてこの段階だけが存在することはありえず、知識の獲得、課題の遂行と組み合わせられることによって始めて意味をもつものである。

以上のような分類基準から、前掲のフレームワークを用いて実際の授業単元を分析していく。

2. 小学校社会科におけるメディア単元学習の分析

(1) 分析対象

前述したフレームワークをもとに、授業の分析を行った。分析対象は以下の通りであ

る。

- ・『社会科教育』明治図書（過去5カ年分）No.571-650に掲載されている小学校社会科の「情報」を扱った単元。
- ・『日本NIE学会誌』創刊号・第6号に掲載されている小学校社会科・総合的な学習の時間の「情報」を扱った単元。

(2) 事例分析の一例

18.「注目単元の指導案一書き方&見方」久保里美					
『社会科教育 No. 601』明治図書, pp. 50-53.					
		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メ タ 認 知 形 成 過 程	知識獲得 コンポーネント	○身近な情報手段の種類を知る。 ○映像や資料ができる過程を知る。	○記者名を掲載している理由を知る。	○インターネット等での情報発信について知る。	
	パフォーマンス コンポーネント	○昨日のニュースについて話し合い、紙面で確かめる。 ○紙面で気づいたことを発表する。	○情報手段の種類分けをする。 ○同じ記事を他社と比べる。		
	メタ・コンポーネント		○新聞記事が社会に与える影響について考える。 ○これからの社会の姿を想像し、情報を得る方法と利用者の判断について考える。		

図13 事例分析の一例

図13の分析では、身近な情報手段の種類や映像や資料が作り上げられていく過程を知る学習活動を、「受動的受信—知識獲得コンポーネント」に位置付けている。これは、この学習活動が情報を受け取ることに主眼を置いており、分析や比較を目的としていないためである。一方、情報の比較や分類を行っている学習活動は「批判的受信—パフォーマンス・コンポーネント」に位置付けている。また、これらの学習活動を踏まえて、新聞記事が社会に与える影響や未来について考えている学習活動を、「批判的受信—メタ・コンポーネント」に位置付けている。情報発信の方法についての理解を深める学習活動は「活動的送信—知識獲得コンポーネント」に位置付けた。このように、前述した

基準に則って先行事例の分析を50事例行った。その上、現在の社会科の現状を分析し、その傾向ごとに分類を行った。

(3) 事例分析から分かる現状

事例分析の中で位置付けた発問や学習活動の傾向を以下に示す（図14、枠内の数字はあてはまる授業の数）。ただし、「受動的受信—知識獲得コンポーネント」に2つ以上の発問や学習活動があっても1つとして計上している。他についても同様である。

		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メタ 認知 形成 過程	知識獲得 コンポーネント	24	23	11	3
	パフォーマンス コンポーネント	16	42	18	3
	メタ・コンポーネント	5	17	6	1

図14 事例分析の各段階の合計

このように見てみると、受信を主な目的とした発問や学習活動が多いことが分かる。また、活動的送信を目的としたものもかなりあり、現在の社会科では受信と発信のどちらもが重視されていることが分かる。筆者の考える対話的送受信をおもな目的としたものは非常に少ないが、相互作用の重要性を説き、それを意識した単元もいくつか実践されている。詳細は後述するが、現代社会における情報の受信者、発信者の問題を考慮し、そのことを小学生に考えさせようとしている内容である。したがって、その実践はほとんど行われていないものの、それらの重要性は一部で認識されているということが分かる。

(4) 事例の傾向別分類

分析の結果から、情報を扱った単元は3つの類型に分けられることが分かった。そこに

筆者が目指す単元の類型を加え、合計4つの類型を以下に示す。またこれらの類型をフレームワークに当てはめたものが図15である。

- A 知識受信型… 知識の獲得、またその方法や過程に重点を置いているもの。
- B 受信発展型… 情報を受信する過程を通して自分の考えを深め、発展させることに重点を置いているもの。
- C 送信終結型… 外部に情報を発信することを目的として単元を構成しているもの。
- D 対話的送受信型… 情報の受信者と発信者の関係を理解し、情報の送受信とその評価を繰り返し行うことに重点を置いているもの。

		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メタ 認知 形成 過程	知識獲得 コンポーネント	A		C	D
	パフォーマンス コンポーネント				
	メタ・コンポーネント	B			

図15 フレームワークにおける類型

1) 知識受信型の単元

8.「知識活用型“メディア・リテラシー”の教材開発」小山茂喜					
『社会科教育 No. 582』明治図書, pp.78-80					
		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メ タ 認 知 形 成 過 程	知識獲得 コンポーネント		○新聞各社によって考えが違うことを知る。		
	パフォーマンス コンポーネント		○平和主義について新聞記事を読み比べて考える。 ○食糧自給率のグラフを読み取る。 ○グラフにタイトルをつけ、その理由も書く。		
	メタ・コンポーネント				

図16 知識受信型単元の例

<本単元の流れ>

- ・新聞の記事を紹介し、新聞社によって考えが違うことを知る。
- ・平和記事についての記事を読み、どのような考えがあるか、どこが違うのかといったことを比較する。
- ・食料自給率のグラフを諸外国のものと比べたり、カロリーベースの自給率の意味を考えたりする。
- ・それぞれのグラフにタイトルをつけ、その理由も言えるようにする。

この単元では、情報を批判的に受信する活動に重点が置かれている。子どもたちの活動としては、まず新聞各社の考えが違うことを知り、その上で平和や食料自給率に関する記事を読み比べている。情報を参考資料として使っているのではなく、自分たちの考えを深める材料として扱っていることが特徴である。反面、その情報から社会における自分を見たり、クラスに何かを発表したりするといった活動には重点が置かれていないので、この単元は知識受信型と位置付ける。

2) 受信発展型の単元

13.「小学5年“能力育成用語”の分析と解釈」山下真一					
『社会科教育 No. 593』明治図書, pp.32-33.					
		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メ タ 認 知 形 成 過 程	知識獲得 コンポーネント		○資料から必要な情報を読み取る。		
	パフォーマンス コンポーネント		○表されている事柄の全体的な傾向をとらえる。 ○複数の事柄を関連付けて読み取る。 ○必要な資料を収集したり、選択したりする。		
	メタ・コンポーネント		○資料を整理し再構成することで自分の考えを深める。		

図17 受信発展型単元の例

<本単元の流れ>

- ・いくつかの資料から、テーマに沿った情報を読み取る。
- ・それらの情報の全体的な傾向を捉え、他の事象との関連性を読み取る。
- ・さらに詳しく知るためにはどのような情報が必要か考え、収集・選択を行う。
- ・集めた資料をもとに、テーマについての自分の考えを整理し、再構成する。

この単元では批判的に受信した情報をもとに、自分の考えを深めるために資料を再構成するといった活動に重点が置かれている。情報を批判的に解釈することで、今までの自分の考えを省察し、新たな考えを持つようにすることを目指した単元構成である。このように、情報の受信よりもその活動から得たものをもとに、自分の考えを深めたり、自分が社会の中でどのような位置にいるのかといったことを考えたりする活動に主眼が置かれている単元を受信発展型と位置付ける。

3) 送信終結型の単元

31.「学習成果が光る表現活動」 江崎広章					
『社会科教育 No. 623』 明治図書, pp. 80-81.					
学習過程		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メ タ 認 知 形 成 過 程	知識獲得 コンポーネント		○新聞、雑誌、インターネット、看板、ラジオなどの働きの違いを知る。	○メディアの発信における効果について知る。	
	パフォーマンス コンポーネント		○各メディアにおける情報のつくられ方を比べながら調べる。	○自分の学区の自慢大会を行う。	
	メタ・コンポーネント		○各メディアの有効的な使い方を考える。	○発表大会を評価する。	

図18 送信終結型単元の例

＜本単元の流れ＞

- ・新聞や雑誌などのメディアの働きの違いを知る。
- ・各メディアにおいて、情報がどのようにつくられているか比べる。
- ・各メディアにおける発信の効果について知る。
- ・各メディアの有効的な使い方を考える。
- ・それらをもとに、自分の学区の自慢大会を行い、全体に発表する。
- ・発表大会を通して、分かったこと、よかったことなどを評価する。

この単元では、それぞれのメディアの役割を批判的に検討した上で、その中のいずれかを使って学区の自慢大会を行っている。発表方法としては、新聞や映像を用いながらクラス全体に発表するというものである。それまでに学習したメディアの特徴を考慮し、それを外部に発信し、評価するという活動で単元を締めくくっている。自分たちが得た情報を、自分たちが制作者になってより理解を深めているので、この単元ではバックギムの制作者の視点が採用されていると考えられる。したがって、この単元は送信終結型に位置付ける。

4) 対話的送受信型の単元

28.「双方向の情報～情報ネットワーク～にかかわる新教材の着眼点」安野功					
『社会科教育 No. 618』明治図書, pp. 114-117.					
		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メ タ 認 知 形 成 過 程	知識獲得↓ コンポーネント	□	○一方向の情報を受信する側の責任と判断について知る。	□	□○双方向型メディアの特色を知る。
	パフォーマンス↓ コンポーネント	□	○同じ出来事でも、新聞によって書かれ方が違うのはなぜか？	□	○一方向型と双方向型のそれぞれの長所と短所を考える。
	メタ・コンポーネント	□	□	□	○情報の受信、発信それぞれにおける適切な判断と責任について考える。

図19 対話的送受信型の単元

＜本単元の流れ＞

- ・一方向の性格をもつメディアから発せられる情報を受け取るときの責任と判断について知る。
- ・ある同じ事件について、新聞によって書かれ方が違うのはなぜか考える。
- ・双方向の性格をもつメディアの特色を知る。
- ・一方向型と双方向型のメディアの長所と短所を考える。
- ・情報の受信、発信それぞれにおける適切な判断と責任について考える

この単元では、情報の双方向性を理解するという観点から、情報の受信者と発信者の関係について考えている。一方向性のメディアと双方向性のメディアの長所と短所を考える活動を通して、それぞれの場合に自分たちがどのような行動をしていけばよいのかについて子どもたちに考えさせている。ただ、社会における自分の位置について考えたり、自分の考えをクラスに発表し、それを相互的に評価したりするといった活動などは行われてはいない。しかし、単元を通して情報の受信者と発信者の関係を批判的な視点で考えさせようとしているのでこの単元は対話的送受信型として位置付ける。

(5) 分類の結果

以上の類型に分けた結果、Aタイプが13事例、Bタイプが17事例、Cタイプが17事例、Dタイプが3事例となった。もちろんこれらの類型にそのまま当てはまる事例ばかりではないので、その場合は単元の中でもっとも重視している発問や学習活動、全体を通して子どもたちに理解させたいことや考えさせたいことを読み取って分類を行っている。その結果をまとめたものが表6である。

表6 類型別集計表

A:知識受信型	B:受信発展型	C:送信終結型	D:対話的送受信型
13	17	17	3
30		17	3
受信活動中心		発信活動中心	対話的送受信

3. 小学校社会科におけるメディア単元学習の課題

前掲の表から、A・Bタイプは受信中心、Cタイプは発信中心なので、その数から見ても現在の社会科は受信を主な学習活動としていることが分かる。また情報の発信についても、獲得した知識を発信することを通して理解を深めるという流れが社会科の中で確実に息づいている。そして、筆者の定義するDタイプの単元は3事例にすぎなかった。

筆者は対話的送受信の考え方は重要だと主張する立場にあるが、決して他の活動を中心に考える立場を批判するものではない。情報化社会において、批判的に受信する活動も、積極的に外部に発信していく活動とともに重要である。しかし、それだけでは不十分であることは第1章で論じた。したがって、表6の3つの類型がバランスよく分布するべきだと考える。以上から、事例数としては少ない対話的送受信型の単元を開発し、小学校社会科において時代の変化に対応したメディア・リテラシーの獲得を目指す意義は大きいにあるといえるだろう。

第1節 メディア単元の構成

1. 構成するための基本的な考え

前章までの理論を元に、メディア単元の構成を考える。この時、中心となるのは、以下の図 20 に示す対話的送受信の視点である。

		学習方法			
		受動的受信	批判的受信	活動的送信	対話的送受信
メタ 認知 形成 過程	知識獲得 コンポーネント				
	パフォーマンス コンポーネント				
	メタ・コンポーネント				

図 20 単元構成の中心となる対話的送受信の段階

当然、1 時間の授業の中に対話的送受信のすべての視点を組み込むことは難しい。したがって、単元の全体を通してそれらを保障していく。そのために、単元の大きな流れを以下の表を提示しながら説明する。(表 7) なお、今回の授業単元は全四次（全 11 時間）で構成する。

単元の各次において、先述した対話的送受信の段階を組み込む。これは、それぞれの段階で獲得した知識や技術を、その度に評価と再構成を繰り返し、自己の認識や技術を拡大させるという意図をもとにしている。したがって、各次の間に子どもたち自身が自分たちの学習を振り返り、その内容や自分が獲得した能力などを自己認識する時間を設ける。また、その時に振り返ったものを子どもたち自身が記録し、それを他者と共有したり、比較したりする時間も設ける。これらの活動から、子どもたちは自分を客観的に評価し、他者の視点も獲得することができる。

また、これらの学習は単元の各次の結果でもある。当然、これらが社会科の他領域や他教科、子どもたちの日常生活へと関連していくことが考えられる。したがって、単元を通して子どもたちに正しい知識を獲得させるということよりも、メディア学習の全体を通して自己の認識や社会との関わりに対する考えを広げさせることに重点を置く。

表 7 単元の流れと留意点

段階	授業に導入する要素	
第一次	知識獲得コンポーネント	
	パフォーマンス・コンポーネント	
	メタ・コンポーネント	
		⇐ 評価・再構成
第二次	知識獲得コンポーネント	
	パフォーマンス・コンポーネント	
	メタ・コンポーネント	
		⇐ 評価・再構成
第三次	知識獲得コンポーネント	
	パフォーマンス・コンポーネント	
	メタ・コンポーネント	
		⇐ 評価・再構成
第四次	知識獲得コンポーネント	
	パフォーマンス・コンポーネント	
	メタ・コンポーネント	
		⇐ 評価・再構成

⇒社会科の他領域、他教科、日常生活へ関連

2. 指導計画

以上の考えをもとに、メディア単元（全四次、11 時間構成）指導計画を作成する。このとき、学習指導要領における小学校社会科の内容である「ア 放送，新聞などの産業と国民生活とのかかわり、イ 情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり」を踏まえる必要がある。したがって、第一次ではメディアとはどのようなものか、第二次ではテレビ産業との関わり、第三次では社会で活用されている情報ネットワークについて、第四次ではメディアのこれからの可能性について主に学習内容として取り上げる。以下に指導計画を提示する。（表 8）

表 8 指導計画

次	時	主題	主な授業のねらい
第1次 「情報の世界を広げよう」	1	情報・メディアってどんなもの？ 情報やメディアにはどのような特徴があるか。	身の回りの情報・メディアについて知り、それらの特徴についての理解を深める。また、情報のもつ特性についても考える。
	2	情報を利用するわたしたち どのように情報を利用すれば私たちの生活がよくなるのか。	情報を送受信する上で気をつけることを踏まえつつ、生活の中で発生する問題を、情報機器を用いて解決する手段を考える。
第2次 「メディアが送る情報」	1	テレビの情報 テレビ放送は情報をどのように伝えているか。	日常の生活に深く関わっているテレビについて理解するとともに、どのような役割を果たしているかについて考察する。
	2	テレビ局の番組づくり テレビ局は、どのように情報をわたしたちに送っているか。	テレビ局が私たちに情報を送る過程を知り、制作者の人々がどのような想いで情報を送っているのかを考える。
	3	メディアとわたしたち メディアとわたしたちはどのような関係をつくっていけばよいか。	テレビ局が情報を送る過程で起こる問題について理解するとともに、情報の受信者・発信者としてどのようなことに気を付けなければいけないかを考える。

第3次 「社会を変える情報」	1	生活の中の情報 わたしたちは普段、どのような情報にふれているか。	身の回りにある情報ネットワークについて知り、それらがどのように活用されているかについて関心をもつ。
	2	活用されている電子カルテ 病院では、情報をどのように活用しているか。	病院で活用されている電子カルテについて調べ、それが私たちの生活にどのように役立っているのかを考察する。
	3	地域をつなぐ総合病院 病院は地域とどのようにつながっているか。	情報ネットワークが整備されることによって、社会のいろいろな所同士がつながることを理解する。
	4	情報の発達と医療の進歩 これからの病院と患者の関係はどのようなになっていくだろう。	病院と患者の関係が情報ネットワークによって変わっていくことを理解するとともに、他の場面でも同じような変化がないか考える。
第4次 「情報化社会の中のわたしたち」	1	情報に囲まれて わたしたちは情報とどのようにかわっていったらいいか。	情報を送受信する上での利点や問題点をまとめ、どのようなことに気をつけて情報と付き合っていくべきか考える。
	2	受け取る情報、発信する情報 情報を活用するうえでどのような情報があるか。	情報と私たちの関係を整理し、情報化社会のこれからの可能性について考える。

3. 評価規準

指導計画にしたがって、以下に評価規準を提示する。その中に、それぞれの評価規準に対応するメタ認知形成過程を示している。知識獲得コンポーネントに該当するものにはローマ数字のⅠ、パフォーマンス・コンポーネントに該当するものにはⅡ、メタ・コンポーネントに該当するものにはⅢを表中に記載している。(表9)

表 9 評価規準と対応するメタ認知形成過程

次	時	評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
第1次 「情報の世界を広げよう」	1	Ⅱ. 身の回りの情報やメディアについて、自分の知っていることを発表したり、ワークシートに記入したりすることで意欲的に学習しようとしている。			Ⅰ. メディアの特徴や情報のもつ特性について、理解している。
	2		ⅡⅢ. 生活の中で起こり得る問題について、情報機器を用いた解決方法を自分なりに考え、表現できている。	Ⅱ. 提示された問題について、その問題点を読み取ることができる。	
第2次 「メディアが送る情報」	1	ⅠⅡ. テレビについて知っていることを発表したり、ワークシートに記入したりすることで、意欲的に学習しようとしている。	ⅠⅡ. テレビが放送する情報についてどのような意味があるが考えることができる。		
	2	Ⅱ. 情報が送る過程について興味をもち、制作する人々の想いも積極的に理解しようとしている。			Ⅰ. 情報が送る過程を理解している。
	3		ⅡⅢ. テレビ局から情報を受け取る者として、どのように気を付けなければならぬかを考え、発表できる。	Ⅱ. テレビ局が情報を送る過程で発生する問題について読み取ることができる。	

第3次 「社会を変える 情報」	1	Ⅱ. 情報ネットワークが活用されている場面について関心をもっている。			Ⅰ. 情報ネットワークとはどのようなものか理解している。
	2	Ⅱ. 電子カルテについて積極的に調べようとしている。	Ⅱ. 電子カルテがどのように役立っているのかについて考えることができる。		Ⅰ. 電子カルテについて理解している。
	3		Ⅱ Ⅲ. 情報ネットワークの整備によって、社会のつながりがどのように変わるかを考え、表現できる。	Ⅱ. 情報ネットワークの仕組みを読み取ることができる。	
	4		Ⅱ Ⅲ. 情報ネットワークが社会にどのような変化をもたらすのかについて考え、発表できる。		Ⅰ. 病院と患者の関係が情報ネットワークによって変化することを理解している。
第4次 「情報化社会 の中のわたし」	1		Ⅱ. 情報と付き合っていく上で気を付けなければいけないことを考え、発表できる。		Ⅰ. 情報を送受信する上での利点や問題点を理解している。
	2	Ⅱ. 情報化社会が今後どのように変化していくかについて関心をもっている。	Ⅱ Ⅲ. 情報化の進展によって起こり得る可能性について考え、発表できる。	Ⅱ Ⅲ. 情報と私たちの関係を整理することができる。	

第2節 小学校社会科第5学年メディア単元学習の実践

1. 実践校と児童の実態

(1) 実践校、学年、クラス

実践校：京都教育大学附属京都小中学校

学年・クラス：第5学年B組（男子15名、女子16名、計31名）

(2) 事前アンケートから見る児童の実態

1) 事前アンケート実施の動機

社会の情報化に伴って、我が国におけるインターネットの普及率は約80%にもなっている。データ上ではほとんどの家庭にインターネットが整備され、様々なメディアを日常生活の中で利用していることになる。（図21）

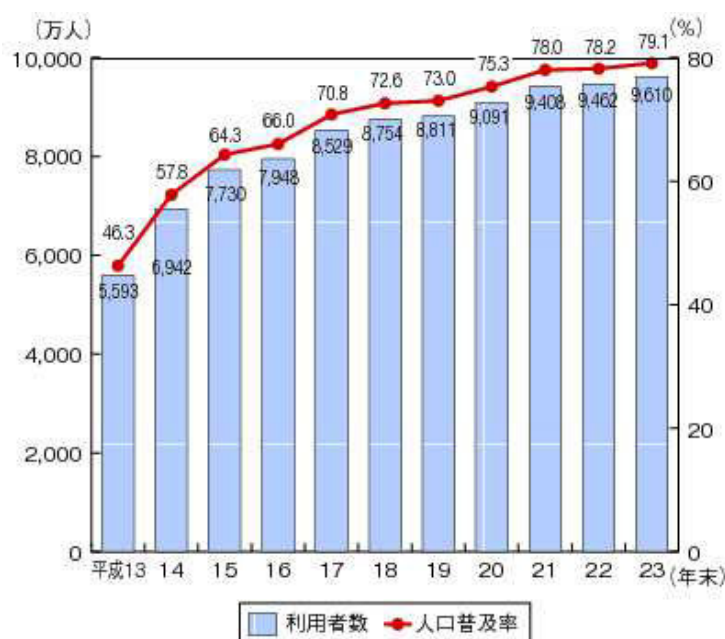


図21 インターネットの利用者数及び人口普及率の推移⁵⁰

一方、様々な理由から情報メディアに慣れ親しんでいない人たちも存在し、それらの間には格差が存在している。このような状況から、子どもたちを取り巻くメディア環境の概観を知る必要がある。したがって子どもたちがどのようなメディア環境で日々生活

⁵⁰ 情報通信の現況と政策動向 2013年11月18日閲覧
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc243120.html>

をしていて、メディアに対してどのような意識を持っているかについて知るアンケートを、授業を実践するクラスの全員に対して行った。

2) 事前アンケートの設問

事前アンケートの設問内容を以下に示す。

① 下の中で、家にあるものに○をしてください。(いくつ○をしてもよいです。)

- ・テレビ ・パソコン ・携帯電話（スマートフォンも含む）
- ・ iPod touch（アイポッドタッチ）などの携帯電話と似たような機能をもつもの

② 下の中から、自分が一番身近だと感じるものに○をしてください。

(一つだけに○をしてください。)

- ・テレビ ・パソコン ・携帯電話（スマートフォンも含む）
- ・ iPod touch（アイポッドタッチ）などの携帯電話と似たような機能をもつもの

③ 家で自分が自由に使用できるパソコンはありますか？

- ・ある ・ない

④ ③で「ある」と答えた人に質問です。パソコンをどのようなときに使用しますか？

(いくつ○をしてもよいです。)

- ・調べ物 ・誰かとの連絡手段 ・ゲーム ・音楽を聞く
- ・DVDや動画などを見る ・その他（ ）

⑤ 自分が自由に使用できる携帯電話を持っていますか？

- ・持っている ・持っていない

⑥ ⑤で「持っている」と答えた人に質問です。携帯電話をどのようなときに使用しますか？(いくつ○をしてもよいです。)

- ・家族との連絡 ・家族以外の誰かとの連絡 ・ゲーム ・音楽を聞く
- ・動画などを見る ・その他（ ）

⑦ 最近世間では、ツイッター（Twitter）やフェイスブック（Facebook）、
 ブログなどが流行していますが、これらについてあなたは知っていますか？

- ・ 知っており、実際に自分も利用している
- ・ 知っているが利用したことはない
- ・ 名前を聞いたことはある
- ・ 全く聞いたこともない

⑧ ツイッター（Twitter）やフェイスブック（Facebook）、ブログなどについて、こ
 れから利用したいと思いますか？

- ・ 既に利用している ・ 是非利用したい ・ どちらかというとう利用したい
- ・ どちらかというとう利用したくない ・ 利用したくない
- ・ よく分からない

⑨ ⑧のように答えた理由があれば下の四角の中に書いてください。

3) アンケート結果

先述の事前アンケートを実践クラスに対して 2013 年 9 月 27 日に行った。その集計結
 果と子どもたちの記述内容を以下に示す。

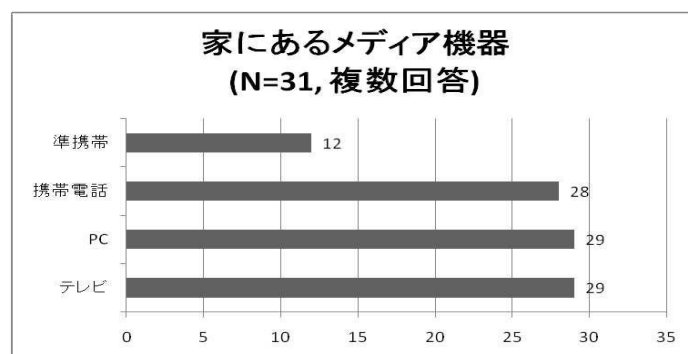


図 22 設問①に対する児童の回答

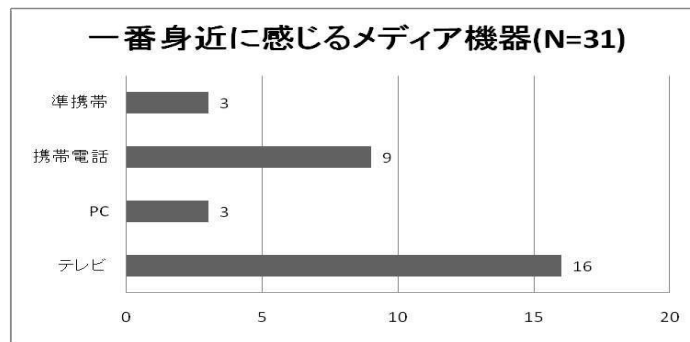


図 23 設問②に対する児童の回答

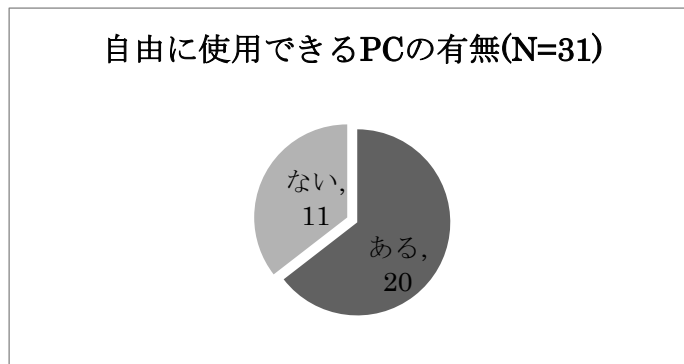


図 24 設問③に対する児童の回答

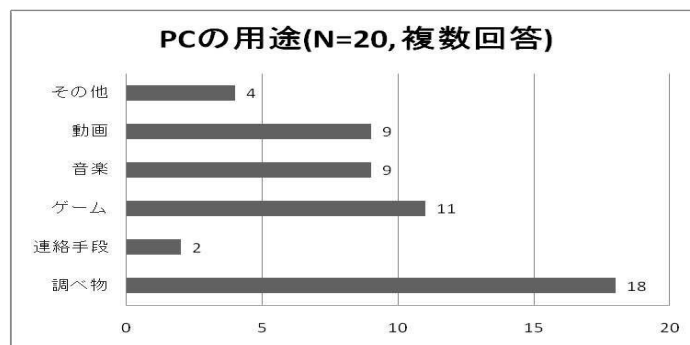


図 25 設問④に対する児童の回答

<その他の回答内容>

- ・テスト勉強・資料を見るとき（社会科の勉強）・ラジオを聞く・書き物

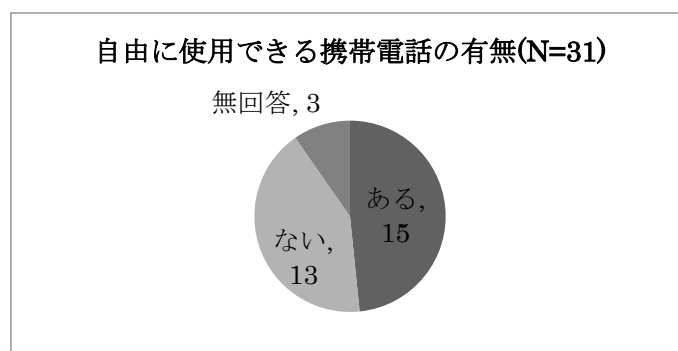


図 26 設問⑤に対する児童の回答

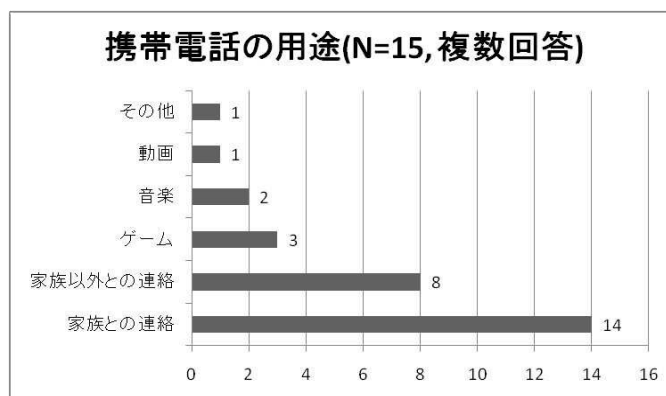


図 27 設問⑥に対する児童の回答

<その他の回答内容>

- ・写真を撮るなど

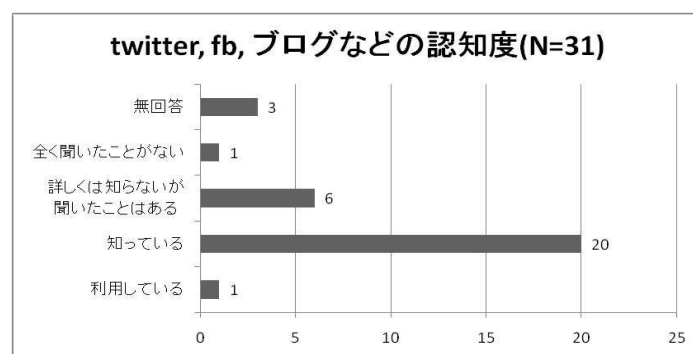


図 28 設問⑦に対する児童の回答

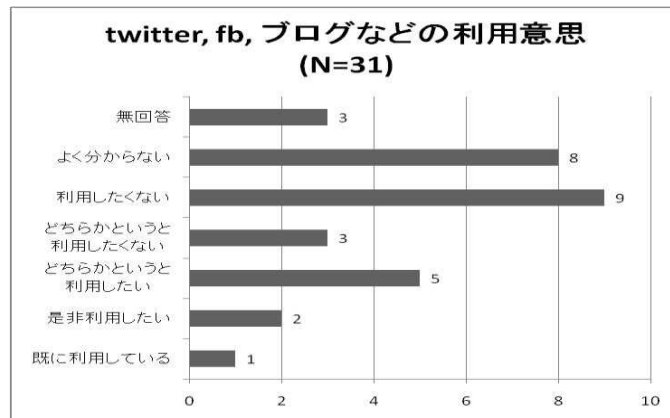


図 29 設問⑧に対する児童の回答

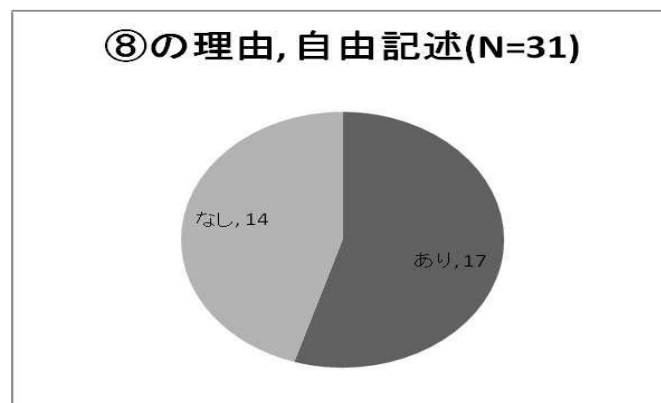


図 30 設問⑧に対する児童の回答

<自由記述の回答内容>

「是非利用したい」の回答者…2名

- ・お母さんがフェイスブックやラインの方でれんらくをとっていてメールはあまりつかっていないから。
- ・他の人とコミュニケーションをとることは大事だから。

「どちらかというど利用したい」の回答者…2名

- ・何となくおもしろそうだから。
- ・最近の流行を知りたいから。

「どちらかというと利用したくない」の回答者… 1名

- ・個人情報や同級生や友達以外の人に自分の人の事を知ってもらいたくないから。
(家の人も含む)

「利用したくない」の回答者… 7名

- ・あまり意味わからないから、こわい。
- ・最高きみつがもれるから。
- ・自分の個人情報などが外部にもれるから。
- ・ツイッターなどでいやなことがあるかもしれないから。
- ・自分のことを人に知らせる必要がないから。
- ・電子の文字で打つそっちよくな感想などが人をきずつけてしまうかもしれない。
いじめに発展してしまうかもしれない。個人情報流出？
- ・いみがわからない。

「よく分からない」の回答者… 5名

- ・良いものかどうか余り分からないし、家族も使用していないので利用したいかしたくないかもよく分からないです。
- ・利用したいような気もするけど、ぼう言などのダメなこともあるし、あまりやり方も分からないから、よく分かりません。
- ・利用していい事があるのかもわからずやるのはよくないから。
- ・聞いたことがなく、意味もわからない。
- ・いまいち意味が分からないから。

4) 事前アンケートに見る児童の実態

以上の結果より、附属京都小中学校5年B組の子どもたちは、情報に対して決して疎くはないことがわかる。設問②では、一番身近なメディア機器にテレビを挙げている子どもが最も多いが、携帯電話や他のものを一番身近と感じている子どもも多い。これは、家庭内のメディア環境が整っているため、子どもたちにとっても垣根の低いものとなっているためであろうと推測できる。またこのことは、設問③の自分が自由に使用できるPCや携帯電話を持っている割合が高いという結果からも言及できる。しかし、これらのメディア機器を使いこなすことができているとはこれだけでは言い切れない。

また設問⑥の結果からも、保護者が「家族との連絡」以外での子どもたちの携帯電話

の利用を制限していることが読み取れるが、制限するだけでは有効な対処法とは言い難い。また、ツイッターやフェイスブックなどの認知度が高いことも注目される。ニュースや新聞、周囲の人から情報を得ているのだと推測できるが、⑧⑨の結果からあまり良い印象を持っていないようである。これも使用制限の延長なのか、あるいはニュースなどで良くないニュースを聞くからなのかは定かではない。確かに危機意識を持っていることは重要だが、必要以上の危惧を抱くことは有効に利用する可能性を摘むことになる。

したがって子どもたちには、情報の性質をしっかりと理解し、それらを有効に活用していく態度を養っていく必要があると考える。情報やメディア機器に対しての意識を「何かよくわからないが怖いもの」から「うまく使えば役に立つもの」という意識に変えることが求められる。

以上のアンケートより、児童の実態として大きく以下の2点が読み取れる。

- ・児童の間で、日常的に接しているメディアはそれぞれ異なる。
- ・メディアを利用することに対しての認識は、やや慎重な姿勢を見せている児童が多いものの、全体的にばらつきが見られる。

これらの2点を受けて、メディア単元において扱う教材設定、授業の流れを考案した。

2. 実践授業指導案

1. 日時 平成 25 年 10 月 16 日（水） 第 2 校時（ 9 : 44 ～ 10 : 34 ）

2. 学年・組 第 5 学年 B 組（男子 15 名、女子 16 名、計 31 名）

3. 場所 第 5 学年 B 組 教室

4. 単元名 わたしたちの生活と情報

5. 単元の目標

（社会的事象への関心・意欲・態度）

・日本の情報化社会の現状に関心をもち、その変化について意欲的に学習しようとする。

（社会的な思考・判断・表現）

・情報やメディアが私たちの生活や産業と密接な関係をもっていることや情報化社会で生きていくためにはどうすればよいかを考える。

（観察・資料活用の技能）

・各種メディアから集めた資料などを参考にしながら、情報化社会のよい所や抱える問題を調べ、分かりやすくまとめることができる。

（社会的事象についての知識・理解）

・情報化社会の中で、私たちとメディアの関係がどのようなになっているかということや、それぞれのメディアが持つ働きについて理解する。

6. 単元観

第 5 学年の情報・メディア単元は、「我が国の産業の様子，産業と国民生活との関連について理解できるようにし，我が国の産業の発展や社会の情報化の進展に関心をもつようにする。」ことを目標としている。

現代社会の情報化は著しく、大人であってもその変化に対応することは難しい。しかしその反面、子どもたちを取り巻くメディア環境は大人とほとんど変わらず、日常生活においても子どもたちがメディアと接する機会が多い。このような状況においては、子どもたちを有害情報から守るべく、子どもたちとメディアを切り離すことは困難である。したがって、本単元では子どもたちを取り巻くメディアを有効に利用できるように、メディアの特徴、メディアと産業との関わり、子どもたち自身と情報・メディアの関係を考えていく。

第一次の「情報の世界を広げよう」では、まず子どもたちに情報・メディアの知識を

整理させる。日常生活で何気なく触れているメディアについて考える時間を設け、その特徴やどのように利用すれば有効かということを考えさせていく。また、実際に日常生活で起こり得る課題を与え、それらをメディアを利用してどのように解決するのかを考えさせ、子どもたち自身の持っている情報・メディアについての関係性を広げたい。

第二次の「メディアが送る情報」では、子どもたちの生活に溶け込んでいるテレビを中心に考えていく。テレビによって自分たちのもとに情報が送られてくるまでには、どのような人々との関わりがあり、どのような想いで情報が送られているのかを考えさせる。そしてその中で、情報には様々な人の想いが込められていることを理解させ、その想いを受け取ることの重要性を理解させると同時に、情報を鵜呑みにすることの危険性についても理解させたい。

第三次の「社会を変える情報」では、私たちの生活を便利にするために実際に利用されている医療ネットワークについて学習していく。どのような技術がどのような人たちに役立っているのかを調べ、提供してくれる人と利用する人との関係を整理させる。このとき、第一次で学習した自分たちとメディアとの関係を振り返り、自分たちの中のメディアとの関係性を広げさせたい。

第四次の「情報化社会の中のわたしたち」は本単元のまとめにあたる。今まで学習してきたことをもとに、もう一度自分たちの生活を振り返り、これからどのようにして情報・メディアと関わっていくべきかを考える。さらに、情報を受信・発信するうえで発生しうる問題や、有効な活用方法などをクラス内で交流し、自分なりの情報との付き合い方を考えさせたい。

7. 指導計画（全 11 時間）

第 1 次「情報の世界を広げよう」・・・2 時間（本時 1/2）

- ・情報・メディアってどんなもの？
- ・情報を利用するわたしたち

第 2 次「メディアが送る情報」・・・3 時間

- ・テレビの情報
- ・テレビ局の番組づくり
- ・メディアとわたしたち

第 3 次「社会を変える情報」・・・4 時間

- ・生活の中の情報
- ・活用されている電子カルテ
- ・地域をつなぐ総合病院
- ・情報の発達と医療の進歩

第4次「情報化社会の中のわたしたち」・・・2時間

- ・情報に囲まれて
- ・受け取る情報、発信する情報

8. 本時の学習

①教材観

本時はメディアの特徴を考える学習を中心に行う。私たちの日常生活のいたるところにメディアは存在している。多くのメディアにはもちろん、それぞれに特徴がある。これらは情報のもつ特徴としての「広範性」「即時性」「保存性」を表すものだが、それぞれのメディアによってそれらを表す程度は異なる。例えば、テレビは情報を公共の電波に乗せて広範囲に情報を提供することができるが、携帯電話はプライベートの色が強く、テレビほど広範囲に情報を提供することは難しい。このように、それぞれのメディアには長所と短所がある。私たちはこれらをうまく使い分けて生活しているのである。

これらについて考えることは、今後の情報・メディア単元の学習を進めていく上でも有効である。メディアの特徴を理解しているということは、実際の問題解決の場においても有効な情報選択能力を有しているということである。どの場合にどのメディアを活用することが適切かを選択する能力は、近年重要視されているメディア・リテラシーの形成にも重要な意味をもつ。

②児童観

5-B の子どもたちはお互いに仲が良く、グループ活動なども活発に行うことができる。また活動的な子どもも多く、授業中は積極的に挙手をして発言している。自分の考えを表現することが得意な子どもも多く、発言することが難しい子どもは絵や文章で自分の考えを表現することでもできている。

5-B の子どもたちには、抽象的な発問から考えさせるよりも、具体的な事例をもとに抽象的な概念を獲得させる方が適切だと考えられる。

③指導観

導入では、まず子どもたちの日常生活におけるメディア環境についての発問を行う。クラス全体でブレインストーミングを行いながら、メディアとはどういうものかということを理解していく。

展開では、子どもたちにとって身近なメディアである「テレビ」「パソコン」「携帯電話」「新聞」を中心に活動をしていく。これら4つのメディアの特徴を、情報の特性「広範性」「即時性」「保存性」に関わる3つの発問に答えさせながら理解させる。3つの発問とはすなわち、「情報をより多くの人に伝えることができるのは…?」「情報をより速く伝えることができるのは…?」「情報を保存しやすいのは…?」である。このときの返答方法は、4つのメディアをそれぞれの場合においてランク付けするというものである。子どもたちはメディアをランク付けする活動の中で、それぞれのメディアを比較している。本時では、この比較する活動を重視している。比較をするということは、無意識のうちにそれぞれの長所と短所を見つけようとしているということである。そしてその比較の視点を、情報の3つの特性から指導者が限定しているため、この活動を通して多くの視点を獲得させることが期待できる。また、メディア同士を比較しやすいように、それぞれの発問で1位と4位に選んだメディアの選択理由をワークシートに記述させる。ただし、順位がどうしてもつけられない場合があってもよいということは留意させる必要がある。

また、この活動の中で他者の意見を聞くことのできる時間を設けている。ここで子どもたちは自分の意見とは違う意見に触れ、様々な考えがあることを学ぶことができるだろう。ここで留意すべき点は、正解は一つではないという共通理解をさせることである。各種のメディアには様々な用途があり、その全てを把握することは難しい。したがって、子どもたちには今自分が出した答えは現段階のものであり、今後まだまだ変化していく可能性があるということを理解させる。

本時のまとめでは、メディアにはそれぞれ長所と短所があり、それらをうまく使い分ける必要があることを理解させる。この理解は今後の学習にも重要なものとなるため、図や言葉を用いながら分かりやすく授業者が提示したいと考えている。

④本時の目標

- ・身の回りの情報・メディアについて知ろうとする。
- ・それぞれのメディアの特徴について理解する。

⑤本時の展開

段階	授業者の発問	学習者の活動(求める知識)	指導上の留意点	準備物等
導入 5分	○普段、家でどのように 過ごしているか。	・勉強 ・テレビ ・ゲーム ・漫画	・脱線し過ぎない ように注意する。 ・発表されたもの を板書する。	パワーポ イント
	○メディアとは何か知って いるか。	・マスコミ ・知らない ・今発表されたようなもの	・メディアという言 葉を聞くと難しく感 じることを留意す る。	
	・メディアという言葉につ いて説明する。	・媒体。手段。特に、新聞・雑 誌・テレビ・ラジオなどの媒体。 ・情報を伝えるときに使うもの。		

展開 40分	○メディアの中で身近だと思うものは何か。	・テレビ ・パソコン ・携帯電話 ・新聞 など		
	○「テレビ」「パソコン」「携帯電話」「新聞」の中で、自分が優れていると思う順にランク付けせよ。 ・自分の意見を発表させる。	・ワークシートに理由とともに記入させる。	・理由はなぜ一番にしたか、となぜ最後にしたかの2点を書くように指示する。	ワークシート
	○多くの人に情報を知らせる場合はどうか。	・テレビ ＜理由＞ 全国に放送しているから。 ・パソコン ＜理由＞ インターネットで全世界に発信できるから。 ・新聞は地域限定だからそこまで広がらないから。 など	・ワークシートに記入した意見を発表させる。 ・児童の意見の要点をまとめながら板書する。	フラッシュカード パワーポイント
	○情報をより速く伝える場合はどうか。	・携帯電話 ＜理由＞ 伝えたい相手にすぐ電話できる。 ・パソコン ＜理由＞ インターネットですぐに発信できる。 ・テレビだと放送されるまでに時間がかかる。 など	・他のメディアと比べながら考えると考えやすいことを留意させる。 ・それぞれのメディアを使った一例をパワーポイントで提示する。 ・正解は一つではないことを留意させる。	
	○情報を保存しやすいのはどれか。	・新聞 ＜理由＞ 記事を切り取って保存できるから。 ・テレビ ＜理由＞ 録画をしたら保存できるから。 ・携帯電話 ＜理由＞ メールなどは記録されているから。		

まとめ 5分	・それぞれのメディアの特徴をまとめる。	<テレビ> 広い範囲に速く情報を伝えることができる。 私たちが情報を発信することは難しい。 録画などで情報を保存できる。 <パソコン> 広い範囲に速く情報を伝えることができる。 使うための技術が必要。 データとして情報を保存できる。 <携帯電話> 情報を速く伝えることができる。 範囲は限られている。 ※スマートフォンはパソコンのように使うこともできる。 <新聞> 情報を保存しやすい。 情報を伝えるまでに時間がかかる。	・パワーポイントでそれぞれの特徴を提示する。	パワーポイント
-----------	---------------------	--	------------------------	---------

⑥評価の観点と方法

- ・身の回りの情報やメディアについて、自分の知っていることを発表したり、クラスの意見を聞いたりすることで意欲的に学習しようとしている。
- ・メディアの特徴や情報のもつ特性について理解し、ワークシートに記入している。

⑦板書計画

テレビ	パソコン
広い範囲に情報を伝えることができる。	情報を速く広く伝えることができる。
伝えるまでに時間がかかる。	使うための技術が必要。
この部分でランク付けの発表とやりとりを行う。	
新聞	携帯電話
情報を保存しやすい。	情報を速く伝えることができる。
情報を伝えるまでに時間がかかる。	情報を伝える範囲は限られている。

名前 _____

「テレビ」「パソコン」「携帯電話」「新聞」を場合によってランク付けしよう！

○多くの人に情報を知らせる場合はどうか。

1

2

3

4

<理由>

<理由>

○情報をより速く伝える場合はどうか。

1

2

3

4

<理由>

<理由>

○情報を保存しやすいのはどれか。

1

2

3

4

<理由>

<理由>

1. 日時 平成 25 年 10 月 18 日 (金) 第 5 校時 (13 : 38 ~ 14 : 48)

2. 学年・組 第 5 学年 B 組 (男子 15 名、女子 16 名、計 31 名)

3. 場所 第 5 学年 B 組 教室

4. 単元名 わたしたちの生活と情報

5. 単元の目標 (略)

6. 単元観 (略)

7. 指導計画 (全 11 時間)

第 1 次「情報の世界を広げよう」 . . . 2 時間 (本時 2 / 2)

- ・情報・メディアってどんなもの？
- ・情報を利用するわたしたち

第 2 次「メディアが送る情報」 . . . 3 時間

- ・テレビの情報
- ・テレビ局の番組づくり
- ・メディアとわたしたち

第 3 次「社会を変える情報」 . . . 4 時間

- ・生活の中の情報
- ・活用されている電子カルテ
- ・地域をつなぐ総合病院
- ・情報の発達と医療の進歩

第 4 次「情報化社会の中のわたしたち」 . . . 2 時間

- ・情報に囲まれて
- ・受け取る情報、発信する情報

8. 本時の学習

①教材観

本時の学習は、子どもたちの社会の認識を広げることを中心に進めていく。前時の学習から、子どもたちはそれぞれのメディアの特徴の基本的な部分を理解した。本時ではそれらのメディアと自分たちがどのようにつながっているのかを考えていく。

子どもたちの認識している情報・メディアの関係性を広げるためにテレビや新聞、イン

ターネットの機能を自分たちがどのように利用すると有効なのかを考えさせる。実際に生活していく上で起こりうる問題を設定し、それを解決するためにはどのようにすればよいかを考える活動を行う。このとき取り上げる問題は、実際にツイッター上で起こった出来事を参考にしている。その出来事とは、ある人物（以下、A さん）が父を亡くし、その遺品の携帯電話の画像の場所を知りたいと思ったことに端を発する。A さんはその場所がどこかわからなかったため、自身の利用するツイッター上に画像をアップロードし、フォロワーに問いかける。1000 人以上の人がそのツイートをフォローする中、その中のある人物（以下、B さん）がある行動をとる。その行動とは、B さんが運営するインターネットサイトにそのツイートを転載し、さらに多くの人たちに応援を求めたのである。ほどなく、その画像の場所が特定され、B さんは A さんに報告を行う。A さんは「父がこの画像を残した意味は、人のあたたかさを私に教えるためだったのかもしれない。」と感謝した。

この出来事は、情報・メディアの視点から見るととても興味深いものである。まず、写真の場所を探すという、一人で行えば途方もない時間がかかるであろう問題をインターネットメディアで解決している点である。このことは、これからの人とメディアのつながりの可能性を示唆してくれるものとなっている。また、メディア関係者でもないごく普通の人たちが、情報の受信者となったり発信者となったりしている点も考えさせられる。情報を批判的に受信するだけでなく、自らが情報を発信する能力の必要性和、それらの立場を自在に入れ替えながら行動していくことの重要性を示している。そして、人のあたたかさという言葉にも表れているように、メディアを通して私たちは際限のない人や物事と関わりをもっているということを教えてくれている。このような出来事を自分の問題のように考え、解決する方法を導き出せば、これからの学習に新たな視点を加えることができるだろう。

②児童観

5-B の子どもたちはお互いに仲が良く、グループ活動なども活発に行うことができる。また活動的な子どもが多く、授業中は積極的に挙手をして発言している。自分の考えを表現することが得意な子どもが多く、発言することが難しい子どもは絵や文章で自分の考えを表現することもできている。

5-B の子どもたちには、抽象的な発問から考えさせるよりも、具体的な事例をもとに抽象的な概念を獲得させる方が適切だと考えられる。

授業前アンケートの結果から、ほとんどの子どもたちは SNS などの存在を知っているようである。しかし、実際に利用しているのはごく少数で、それらに対しては「よくわからないものであり、あまりいいものだとは思わない。」という認識を持っている。しかし、その反面メディアを日常的に利用している子どもは多く、メディアに対する曖昧な防御意識と実際のメディア環境が矛盾している点も見受けられる。

③指導観

導入では、前時に行なったテレビ、携帯電話、パソコン、新聞の特徴を振り返る。そのすべての長所と短所を押さえるというよりは、どのような視点で考えたのかということとを思い出す時間にしたい。

展開では、幻の生物とされているツチノコを探すという問題解決の事例を取り上げる。ツチノコは 1970 年代に流行した、日本に存在しているとされる未確認生物である。ツチノコの存在を知らない子どもたちもいるので、どのような生物かを特徴を挙げながら簡単に説明する。ツチノコを目撃情報があったということを説明し、その場所がどこなのかを知るためにはどのようにすればよいかということを考える。このとき、ツチノコには懸賞金がかけられていることを説明したり、多くの方法が考えられることを示唆したりするなどして、子どもたちの興味を引きたい。

自分たちなら何を使い、どのようにしてその場所を突き止めるのかをワークシートに書かせる。このときは誰にも相談せず、自分の意見を記入させる。その後、隣同士で意見を交換しあい、他者の意見を評価しながらその評価を自分に転換し、自分の意見を再構成させる段階を設ける。こうすることで、自分を客観的に評価することができ、自分の理解がどのようなものなのかを考えることができる。その後、全体に意見を発表させ、子どもたちはさらに多くの意見があることを知る。このとき、授業者は何が正解で、この方法はおかしいなどという発言はしないように努める。どのような意見が来ても、評価する主体は子どもたちであるので、発表に対する質問や批判などは子どもたち自身から出ない限りは行わない。そして最終的に、クラス全体の意見を聞いた上で自分がどの方法をベストだと思うかをワークシートに記入させる。これを授業者があとで確認し、どのような思考の変化が子どもたちに起きていたのかを評価したい。

その後、実際にあった事例としての twitter 上での出来事を紹介する。ここで留意した

いことは、これが正解ではないということである。問題解決には様々な方法が考えられるので、この事例を正解だと思わないように伝えたい。この事例をパワーポイントで整理しながら、受信者と発信者の関係や人と情報・メディアのつながりの広さを考えさせたい。

まとめでは、私たちは情報の受信者でもあり、発信者でもあることと、私たちは情報・メディアによって多くの人や物事とつながりを持っていることを確認したい。そして、この視点を持ちながらこれからの社会の学習を進めていくように伝えたい。

④本時の目標

- ・問題解決の事例の問題点をよみとることができる。
- ・生活の中で発生する問題を、情報機器を用いて解決する手段を考え、人と情報、メディアの関係を考える。

⑤本時の展開

段階	授業者の発問	学習者の活動(求める知識)	指導上の留意点	準備物等
導入 5分	・前回の授業の確認 ・それぞれのメディアには違った働きがあり、それぞれにより所、悪い所がある。	<テレビ> 広い範囲に情報を伝えることができる。 伝えるまでに時間がかかる。 <パソコン> 情報を速く広く伝えることができる。 使うための技術が必要。 <携帯電話> 情報を速く伝えることができる。 その範囲は限られている。 <新聞> 情報を保存しやすい。 情報を伝えるまでに時間がかかる。	・前時の授業のワークシートを振り返り、簡単に確認を行う。	・ワークシート

展 開 40 分	○このような問題が起こったとき、あなたはどのように行動するか？		・実際に自分にその問題が起こっていることをイメージさせる。	
	<事例> ある一枚の写真がある。これがどこかの景色を写したものか知りたいとき、あなたはどうか。	<テレビを利用> ・テレビに自分が探している写真を放送してもらい、知っている人を探す。 ・テレビは色々な年齢層の人が見ているから有効。 <新聞を利用> ・新聞の投書欄を利用して、写真について知っている人を探す。 ・大体の写真の場所の目星がついていれば、地域に広がる新聞は有効。 <インターネットを利用> ・分からないことを聞くサイトやブログなどを利用し、写真について知っている人を探す。 ・自分の知りたい情報が	・写真をパワーポイントで提示する。 ・ワークシートにあるように、自分がどのような手段でどのように問題解決を行うかを考える。 ・自分の考えを読んで、他の人が分かるように書くように注意する。 ・メディアの特徴についても留意させる。	パワーポイント

	多くの人に速く伝わるので有効。 など		
○自分が書いた考えを隣の人と意見交換する。	・ペアワークを行う。	・ワークシートを利用して、相手の意見の良い所を取って自分の意見を変えてもよいと指示する。	
○クラス全体の意見を確認する。	・ペアワーク後に再構成した自分の考えを発表する。	・ペアワークでよかった意見があれば推薦させる。 ・主だった意見を板書する。 ・自分にはない気になる意見があればワークシートに記入させる。	
○これらの解決方法に共通点はあるか？	・知っている人に聞いている。 ・多くの人に聞くためにメディアを利用している。	・この時点であまり意見がでなくてもよい。	
・情報と自分たちの関係を整理する			
・この問題で「あなた」は情報の発信者であることを確認する。		・発信者ということばが難しそうであれば、適宜補足する。	

	○では「あなた」の質問を受け取った人はどのような行動をしてくれるか。	・写真について知っていることを教えてくれる。 ・写真について知っている人を探してくれる。	・この段階ではあまり意見は出なくてもよい。	
	・実際にあった写真の場所探しの事例を紹介する。	・実際にあった twitter の事例について聞く。		パワーポイント
	○写真について聞かれた人はどのような行動を取っているか。	・写真について知っている人を探してくれる。 ・写真の場所を確認してくれている。	・意見が出にくいようであれば、パワーポイントの該当箇所を提示する。	
	・写真について聞かれた人は「受信者」でもあり「発信者」でもある。			
まとめ 5分	私たちは情報の「受信者」でもあり「発信者」でもある。 人は社会の中で、情報やメディアによって多くの人や物事とつながりをもっている。			
			・次回からの学習の中でも常に意識するように伝える。	

⑥評価の方法と観点

- ・生活の中で起こり得る問題について、情報機器を用いた解決方法を自分なりに考え、発表やワークシートに記入するなどして表現できている。
- ・提示された問題について、その問題点を読み取り、活動することができている。

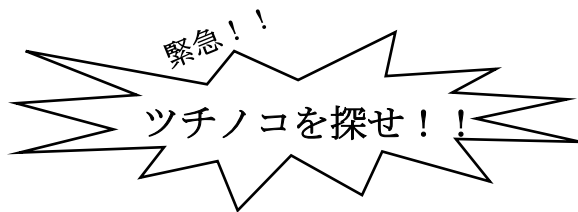
⑦板書計画

分からない情報を知りたいとき

わたしたちはどうすればいいだろうか？

方法

理由



☆ツチノコの居場所を探すために、あなたはどのような方法を使いますか？

<使うもの>

<方法>

○となりの人の意見を聞いて、自分の意見を改良しよう。

○クラスみんなの意見を聞いて、自分が一番よいと思った方法を書こう。

<使うもの>

<方法>

☆まとめ

・わたしたちは でもあり でもある。

・わたしたちは社会の中で、

によって多くの人や物事と をもっている。

○自分と情報メディア（テレビや新聞など）のつながりを、
下に図や言葉で表してください。

例)



※新聞やテレビ以外のものでも、つながりがあれば書いてください。
書き方は自由です。自分の思う通りに書いてください。

自分

第3節 授業実践の分析及び考察

1. 授業分析と考察

(1) 1時間目の授業の分析及び考察

実際の授業の流れは付録の授業記録に示す。授業内で児童が記入したワークシートの結果を以下に示す。尚、同率一位などの回答も認めているため、各順位の合計は異なっている。

表 10 設問 1「情報を多くの人に伝える場合」の回答の分布

	1位	2位	3位	4位
新聞	15	12	1	2
テレビ	17	11	2	0
携帯電話	3	1	17	9
パソコン	1	2	10	17

表 10 より、情報を多く伝える場合には新聞やテレビが適している、と考えている児童が多いことが分かる。反対に、携帯電話やパソコンでは情報を多くの人に伝えることができないと考えている児童が多い。新聞やテレビを 1 位としている児童の理由は、「もっている人が多い。」「ほとんどの家庭が取っているので一番身近だと思う。」など、自分たちの経験と照らし合わせた回答がほとんどであった。一方、携帯電話やパソコンを 4 位としている児童の理由は、「もっている人が少ない。」「私も持ってないし、1 番身近でないような気がするから。」など、こちらも自分たちの経験から世の中のメディア状況を推測した理由を挙げている。つまり、児童は「自分たちの周囲のメディア環境＝世の中のメディア環境」と考えている。このことは同時に、児童のメディアに対する認識が変われば、このランキングの分布も大きく変容する可能性も示している。

表 11 設問 2「情報を速く伝える場合」の回答の分布

	1位	2位	3位	4位
新聞	0	2	3	25
テレビ	25	4	1	0
携帯電話	10	15	6	0
パソコン	2	7	17	4

表 11 より、情報を速く伝える場合にはテレビや携帯電話が適していると考える児童が多いことが分かる。反対に、ほとんどの児童が新聞では情報伝達に時間がかかると考えていることが分かる。筆者の予想では、携帯電話がより上位に位置づくと考えていたが、想定よりも 1 位のポイントは下回った。これは、小学校 5 学年の段階では携帯電話よりもテレビについての知識の方が多くを示している。テレビを 1 位にした理由として、「速報が見れる。」「実況中継ができる。」「緊急速報がすぐ流せる。」など、多くの手段があることを挙げている。緊急速報などは携帯電話にも対応しており、実況中継よりもメールや電話の方がより速く情報を伝えることができるが、多くの児童はテレビを 1 位としている。

また、新聞を 4 位とした理由には、「作るのに時間がかかる。」「朝刊と夕刊しかない。」などがある。多くの児童がこれらの意見に同調したが、一人の児童が号外の存在を指摘したことにより、新聞を再評価する場面が見られた。ここで児童は、自分たちのメディアへの認識だけが全てではないと気づき、意見をクラス全体で交流する意味を再確認しただろう。

表 12 設問 3「情報を保存しやすいもの」の回答の分布

	1位	2位	3位	4位
新聞	20	3	4	3
テレビ	7	7	7	9
携帯電話	12	6	10	2
パソコン	10	6	8	6

表 12 の結果を見ると、児童が情報を保存しやすいと考えるメディアの回答の分布には、やや新聞が多いものの全体として大きな偏りは見られなかった。新聞の切り抜きやパソコンの履歴、テレビの録画など、様々な方法で情報を保存するという意見が出た。また、新聞の保存性に対して紙の劣化という問題点を挙げ、クラスに疑問を投げかけた児童もいた。

1 時間目全体を通して、クラス内でのメディアに対する認識は一定共有できたと考える。児童それぞれが考える各メディアの長所と短所を意見交流し、自分たちのメディアに対する認識を広げることができただろう。本時の学習では、指導案にも記述したようにそ

それぞれの発問で正解を求めている。児童の回答は、その時点でその児童にとって正しいものであり、その価値観で生活している。しかし、他の児童の違う価値観と出会ったとき、それまでの価値観が揺らぎ、自分の納得いく形で価値観を再構成する。このようにして自らの考えを広げていくのである。本時の学習では、自分の意見を客観的に評価し、再構成する場面を明確に設定してはいないが、次時の学習ではその活動を主題としている。本時は次時の学習に向けての知識を獲得する段階として、その役割を果たしたと考える。

(2) 2 時間目の授業の分析と考察

実際の授業の流れは付録の授業記録に示す。以下では、授業内で児童が記入したワークシートの結果を元に、授業内において児童がどのような思考を行い、どのような変容があったのかを分析する。分析する対象は授業内で行った、「どこで撮影したか分からない写真の場所を知りたいとき、あなたはどのようにしてその場所がどこか調べますか？」という発問の答えである。

まず、児童が調べる手段として挙げているものを分類する。ここでは児童の回答を 4 タイプ (a ~ d) に分類している。a タイプは「自分が大統領になる。」や「超能力で探す。」などの、現実に達成困難と思われる回答、b タイプは「人に聞いてまわる。」や「探偵に頼む。」などの、人を使う回答、c タイプは電話のような 1 対 1 のコミュニケーションを行うメディアを用いる回答、d タイプはパソコンやインターネットなどの多方向に広がりをもつメディアを用いる回答であり、d に近い回答ほど効率がよい分類に設定している。これらを児童が授業内で考える段階、すなわち「自分だけで考える段階」「隣の友人と考える段階」「クラス全体で考える段階」のⅠ～Ⅲの段階でどのような変化があるかを確認する。各段階の回答タイプの合計と、各児童の思考の変化の結果は以下の通りである。(表 13、14) ただし表中の段階Ⅱの x とは、記述が無かったことを示している。その段階で記述が無かったということは、その児童に思考の変化が無かったということと捉え、統計を取る際にはその児童の段階Ⅰの回答を段階Ⅱの回答として扱っている。また、ここでの児童の番号は無作為に振り分けたものである。

表 13 各段階の回答タイプの合計

	I	II	III
a	3	1	1
b	11	7	6
c	1	2	2
d	16	21	22
合計	31	31	31

表 14 児童の回答の変化

児童	I	II	III	パターン
1	d	x	d	②
2	b	d	d	④
3	d	d	d	②
4	d	d	c	①
5	a	d	d	④
6	d	x	d	②
7	d	d	d	②
8	d	x	d	②
9	d	x	d	②
10	a	x	a	②
11	b	x	d	④
12	b	x	b	②
13	b	x	d	④
14	b	x	b	②
15	d	b	b	①
16	d	x	d	②
17	d	d	d	②
18	d	d	d	②
19	b	d	d	④
20	b	c	d	④
21	d	x	d	②
22	b	x	d	④
23	d	x	d	④
24	b	d	b	③
25	a	d	d	④
26	d	d	d	②
27	b	c	c	④
28	d	x	b	①
29	b	b	b	②
30	d	d	d	②
31	c	d	d	④

表 13 を見ると、ほとんどの児童が一番効率のよい d タイプの回答を行っている。また段階 I よりも段階 II、IIIの方が効率のよい回答の総数が多くなっていることから、児童が隣の児童、クラス全体と意見を交流する中で自己の意見を再構成し、より効率のよい

回答に意見を変えたことが伺える。しかし、この数値のみを見ただけでは詳細なことは分かりにくい。そこで表 14 を詳しく見てみよう。

表 14 中のパターンとは、児童の思考変化の流れをパターン分けしたものである。パターン①は児童 4 のように、回答タイプが効率のよい d から効率の悪い c へと移っているような、右下がりの思考変化のものを示している。パターン②は児童 3 のように回答タイプが変わらなかったもの、パターン③は児童 24 のように、一度効率のよい回答タイプに移ったが、以後の段階で効率の悪い回答タイプに戻った、思考変化が山型のもの、パターン④は効率の悪い回答タイプから効率のよい回答タイプに変化した、思考変化が右上がりの形を指しているものを、それぞれ示している。それらの分類の結果を示したものが以下の表 15 である。

表 15 思考変化のタイプ別回答数

思考変化のパターン		回答数
①(右下がり)		3
②(維持)	全体	17
	d-d除く	4
③(山型)		1
④(右上がり)		10

表 15 より、一番多い思考変化のパターンは②の維持パターンとなっている。しかし、最初から筆者が最も効率のよい回答タイプと設定した d タイプの意見を段階 I で持ち、その意見をずっと変化させなかった児童を除くとパターン②の思考変化をした児童は 4 人となる。このように考えると、一番多かった思考パターンは④の右上がりパターンとなり、クラスの多くの児童が他の児童との意見交流を通して、より効率のよい回答タイプへと自分の意見を変化させたことが認められる。

一方、パターン①や③のように、意見交流した結果効率の悪いタイプに意見を変化させた児童も少数ではあるがいる。その原因としては、授業者の指示が正確に伝わっていなかったことや、児童が問題を正確に判断できなかったことが考えられる。この課題は今後の単元の展開の中で解決していかななくてはならないが、この授業が単元の導入段階であり、児童がこのような授業方法に慣れていないことや、多くの児童が自分の意見を効率のよいタイプに変化させていることを考えると、この授業において、児童の意見を

再構成する能力をつけるという目的は一定達成できたと言える。

2. 事前・事後確認シートの分析と考察

この分析は、子どもたちのメディアへの認識（相互関係・社会の広がり）が授業前と後ではどの程度変化したのかを確認するために行った。今回は、クラス内で一定のメディア認識を共有した段階、つまり1時間目の学習直後に事前確認を行い、第一次の学習が終わる2時間目の直後に事後確認を行った。ただし、事後確認シートの記入形式は、事前確認で記入したものに加筆するという形式をとる。その理由は、事前と事後の確認でどのような意識の変容があったか確認するためである。以下ではそれらを分析する際に設定した枠組みの説明を行い、その分析と考察を行う。

(1) 放射状タイプと網目状タイプ

児童が記入した自分自身とメディアの関係図は、大きく2つのタイプに分けられた。筆者はその1つを「放射状タイプ」、もう1つを「網目状タイプ」と名付ける。

放射状タイプとは、「自分」を中心としてそれぞれのメディアと関係を持っていることを示しているものである。このタイプは自分が中心となっているため、情報と関わる主体は自分自身であり、自分は「メディアを利用している」という一方向の認識であると考えられる。したがって、ここでは受信・利用をするためにメディアと関係しているという構図が構成されている。(図31)

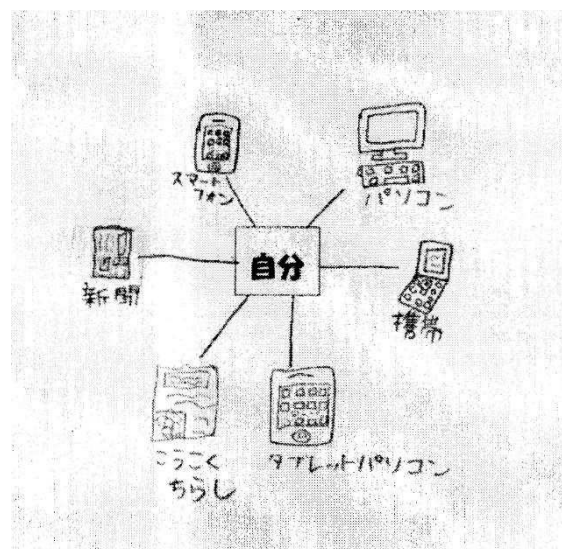


図31 放射状タイプの一例

他方、網目状タイプは自分が中心というよりも、そのどれもが中心となり得るということが示されている。つまり、自分は様々な関係性の中の一部にしか過ぎないという認識が児童の中に存在しているということである。またここでは、自分が送受信した情報は巡り巡って自分のもとに返ってくることも示されている。メディアによって自分と社会の関係が広がっていることと、自分とは関わっていないところでも、そのつながりが広がっていることを認識できていることが示唆される構成となっている。(図 32)

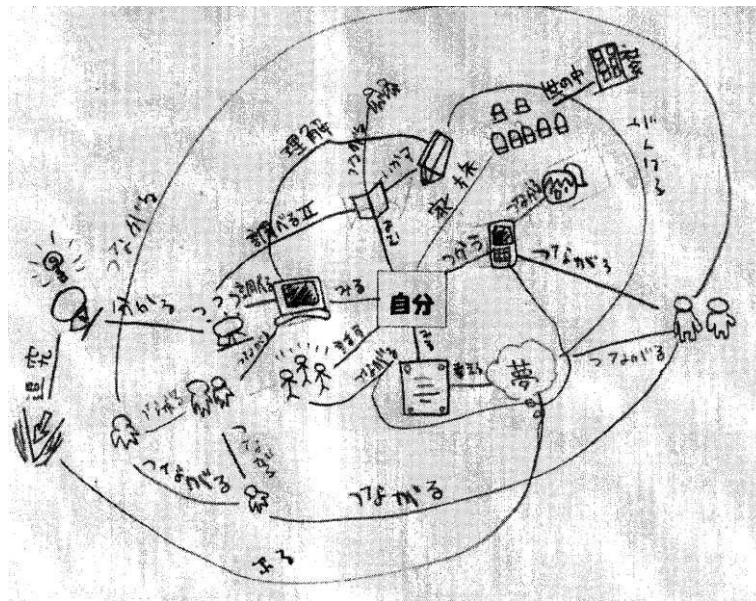


図 32 網目状タイプの一例

(2) 人の存在の有無

児童の記入内容を分けるもう一つの大きな要因が、人（自己・他者）の存在の有無である。メディアとは、我々と情報・他者との間を介するものであるから、メディアの先には常に人の存在がある。したがってこの構成図の中に人が記入されているということは、情報は人によって作られたり、作り変えられたりして自分たちの元に届いているという認識があるということを意味する。反対に人の存在が記入されていないものは、そういったことを考えておらず、人によって送られた情報を無批判に受け入れてしまう危険性があることが示唆される。

(3) 分析のフレームワークと集計結果

以上の 2 つの視点から今回の分析を進めた。その際用いたフレームワークを以下に示す。(表 16)

表 16 事前・事後確認シート分析のフレームワーク

		人の存在	
		無	有
構図の広がり	放射状	A	B
	網目状	C	D

また、その際に 4 つのタイプを A～D と分類した。すなわち A は「放射状・人の存在無」 B は「放射状・人の存在有」 C は「網目状・人の存在無」 D は「網目状・人の存在有」を示すものである。それらの分布がどのようなになっているか、事前、事後の結果を以下に提示する。(表 17、18)

表 17 事前確認シートの集計結果

		人の存在	
		無	有
構図の広がり	放射状	A 23	B 3
	網目状	C 2	D 2

表 18 事後確認シートの集計結果

		人の存在	
		無	有
構図の広がり	放射状	A 10	B 11
	網目状	C 1	D 8

以上のように、大きく見ると事前と事後では表の左上（放射状・人の存在無）から右下（網目状・人の存在有）に認識レベルが移行していることがわかる。その認識レベルの移行の詳細をまとめた表を以下に示す。（表 19）

表 19 各認識レベルからの推移人数の内訳

	A	B	C	D	事後合計
A	A→A 10 人				10 人
B	A→B 9 人	B→B 2 人			11 人
C	A→C 1 人	B→C 0 人	C→C 0 人		1 人
D	A→D 3 人	B→D 1 人	C→D 2 人	D→D 2 人	8 人
事前 合計	23 人	3 人	2 人	2 人	計 30 人

また実際にどのような記述内容があったのかを示すために、確認シートに見られた項目を集計した表を以下に提示する。（表 20）

表 20 事前・事後確認シートに見られた項目とその増加数

項目の種類		項目数(事前)	項目数(事後)	増加数
PC (iPad、タブレットPC含む)		32	36	4
携帯電話 (スマートフォン含む)		32	40	8
本 (教科書、図鑑、雑誌、漫画含む)		27	34	7
テレビ(アニメ含む)		28	28	0
新聞		27	28	1
人 (他の人、家族、友達含む)		9	49	40
ニュース		9	9	0
口		6	10	4
広告		6	8	2
インターネット (Yahoo、google含む)		5	11	6
手紙		5	7	2
資料(パンフレット含む)		5	6	1
ゲーム(wii、DS含む)		4	6	2
ラジオ		4	5	1
ミュージックプレイヤー (iPod含む)		2	4	2
社会		0	2	2
その他の情報に 関わる項目	物語	1	1	0
	情報	1	1	0
	メール	1	3	2
	宣伝	1	1	0
	ブログ	0	6	6
	うそ情報	0	1	1
	事件	0	1	1
	メディア	0	1	1
	パワーポイント	0	1	1
	写真	0	1	1
	小計	4	17	13
その他の体の部 分、動作に関わ る項目	夢	1	1	0
	耳	0	2	2
	足	0	2	2
	追究	0	1	1
	おもしろい	0	1	1
	目	0	1	1
	手	0	1	1
	勘	0	1	1
	プレゼント	0	1	1
	小計	1	11	10
その他の道具に 関わる項目	鉛筆	1	1	0
	家電	1	1	0
	小計	2	2	0
その他の施設に 関わる項目	店	1	1	0
	学校	0	1	1
	小計	1	2	1
合計		216	345	129

(4) 分析結果の考察

以上のように事前と事後の比較から、子どもたちのメディアとの関係の構図には一定の拡大が見られた。数値にすると、事前から事後にかけて認識レベルを上げた人数が 16 人 (表 20 中網掛け部分)、変化しなかった人数が 14 人である。また、表 20 の結果から、クラス全体で事後確認シートに書き加えられた項目数は 129 にも上っており、平均すると一人の児童に対して 4 項目ほどの増加が見られている。このことから、1 時間目終了時と 2 時間目終了時の短い期間での変化を考えると、一定の効果は得られたと考える。さらに表 20 を見ると、事後確認シートで書き加えられた人に関する項目数は 40 となっており、増加数では一番多くなっている。もちろん、これは授業者が授業の目標として「生活の中で発生する問題を、情報機器を用いて解決する手段を考え、人と情報、メディアの関係を考える。」ことを挙げているためであるが、この結果からこの目標の大部分は達成できたと考えられる。またごく少数ではあるが、自分と情報の関係の構成図の中に、「社会」の項目を記述している児童が見られた。これは自分と情報、メディアとの関わりは社会にもつながっているということを理解しているという証拠である。

しかし、表 17、18 の集計結果から課題も残っていることが分かる。それは、放射状・網目状、人の存在の有無に関して、きれいに二分していることである。もちろん事前確認シートの方では、放射状と網目状の比率は 26 : 4、人の存在の無と有の比率は 25 : 5 であり、事後の方では前者は 21 : 9、後者は 11 : 19 であることを考えると順当なものでもあるのかもしれない。しかし、児童が生活しているメディア環境やメディアに対する認識についての格差は、授業前から明らかになっていた。それらを考慮した上で行った授業を通して、児童のメディア観が二分化しているという結果は慎重に受け取るべきだろう。今後の単元の展開でこの二分化の現象が広がることのないように配慮する必要がある。特に分析フレームワークの A や B に属する子どもたちに対する今後の支援などを講じる必要がある。

終章

本研究の成果と課題

本研究は、現代において必要不可欠な能力であるメディア・リテラシーを、メディア研究と教育の現状を踏まえて再定義し、小学校社会科において行われるべきメディア単元学習を提案したものである。第1章、第2章でも述べたように、現代社会は急激に変化しており、それに伴って求められる子ども像、メディア・リテラシー像も多様に変化している。さらに学校現場では、どのようなメディア・リテラシーを重視するか、ということさえも意見が異なっている。

そもそも、メディア・リテラシーの要素である「批判的受信能力」や「活動的発信能力」の重要性は、各教科においても言及されていることであり、学問においても目新しいものではない。しかし、その重要性は年々声高に叫ばれている。この原因を、筆者はメディア・リテラシーの本質が曖昧なままに、言葉だけが拡散しているからであると分析する。メディアとは本来、情報を伝達する際の媒介でしかない。人は、人と関係を結ぶためにメディアを利用しているのである。したがって、メディア・リテラシーの本質とは、人と人との間で行われる相互的なコミュニケーション能力なのである。メディア・リテラシーは社会科のみではなく、他の教科教育や日常生活など、広い分野で培われるべきものと言える。

本研究では、子どもたちのメディア・リテラシーの形成に関わる一つの領域として社会科を選択し、社会科としてどのようなアプローチが可能であるかを提案した。以下に、本研究の成果を3点挙げる。

- ・メディア研究、学校教育、社会科教育におけるメディア・リテラシーの捉え方を整理・分析できた。
- ・メディア・リテラシーの形成に関わって、メタ認知の視点を加えることで、子どもたちのこれらの能力の形成過程を明らかにできた。
- ・メディア単元を作成、実施、評価、改善ができるモデルを提案できた。

一方で、本研究には課題も残っている。以下に課題を示す。

- ・本研究の実践が局所的なものであるため、理論体系を一般化するにはデータが不足している。
- ・今後の情報化の進展において、新たな特徴を持って出現する可能性のあるメディアについての対応が不明確。

データ不足の課題については、今後の実践や、新たな研究の成果とも関連させながら解決していきたい。また、新たなメディアの出現の可能性については、今後の社会情勢について敏感に対応するしか現状はできない。しかし、その時の社会が求めている能力や、社会科教育としてできることは、将来において大きく変わるものではないだろう。したがってこの課題は、教師がメディア・リテラシーの定義を常を持ち、その時の社会の問題や可能性と照らし合わせながら対応していくことで解決していくことができるだろう。

おわりに

本研究は、多様に変化する現代社会の中で子どもたちが逞しく生きていくために、社会科としてどのように子どもたちと関わっていくべきかを模索したものである。情報メディアは我々の生活に無くてはならないものであり、また安易に使用すれば自らの不利益を被るものでもある。さらに、その不利益も目に見えるものから、思慮の外にあるものまで様々である。小学校の子どもたちも、我々大人と同様に、日常的にメディアと接触している。

このような状況において、子どもたちにどのような能力を獲得させるべきかについては本論で述べた次第である。しかし、このような能力は社会科のみが扱う範囲ではない。他教科との関連や総合的な学習の時間、道徳や日常生活など、様々な領域で扱われるべきものである。例えば、カナダではメディア・リテラシーを国語科で扱っている。

その時代や社会情勢によって、子どもたちに求められるは異なるが、その社会で子どもたちが逞しく生きて欲しいという想いが根底にある。本研究はその視点の一つを提案するものであり、さらなる社会科教育、学校教育の発展を願うものである。

謝辞

本論文の作成にあたり、水山光春先生には大変手厚いご指導を頂きました。私が2年生の頃、社会科教育のゼミに来ないか、と声をかけて頂いた時から4年間、本当にお世話になりました。社会科教育について、まだまだ胸を張って分かったと言えないことが心苦しいですが、小学校の現場に入っても研究を続け、子どもたちのために社会科教育の理解を深めていきたいと思います。厳しい中にも優しさがある、そんな先生の温かいご指導に心より感謝申し上げます。

平石隆敏先生には、私がメディアについての理解に苦しんでいる時に、適切なアドバイスを頂きました。また、メディアに関しての新たな視点も頂き、授業分析や授業実践に生かすことができました。いつも優しくご教授頂いた先生のお心遣いに、心よりの御礼を申し上げます。

多くの先生方にも大変お世話になりました。いつも温かく励まして頂いた京都学園大の田中曜次先生、授業実践についての相談を快く受けて下さった附属京都小中学校の深藏心理先生、急なお願いにも関わらず授業実践を快諾して頂き、とても親切に接してくださった附属京都小中学校の尾辺真砂子先生、本当にありがとうございました。現場に先生方のような素晴らしい先生がおられることを、私は誇りに思います。

水山ゼミの仲間にも多くの刺激を頂きました。深井理恵先輩には、研究とはどういうものかということ背中を語って頂きました。尾曲栞さんには、時に厳しい雰囲気になるゼミを、持ち前のやさらかさで和ませて頂きました。優秀な学部の後輩たちにも、良い意味でプレッシャーをかけて頂きました。楽しくも有意義な時間をありがとうございました。

共に学んだ大学院生の仲間・先輩・後輩にも、本当にお世話になりました。皆さんとの交流は、かけがえのないものとなりました。本当にありがとうございました。特に、学部の頃から共に学んでいる小仲一輝くん、寺下勲くんとは、世間話から研究の話まで、様々なことを議論し、お互いを高め合うことができました。あの時間は私にとって一生の宝物です。斎藤忠和先生には、学問する意味を教えて頂きました。先生に教えて頂い

たことを忘れず、日々研究する教員を目指して励みたいと思います。

附属京都小中学校 5 年 B 組の子どもたちには、授業に取り組む真剣な姿勢を見せて頂きました。分からないことに立ち向かう姿、考えたことを発表する力など、私の方も学ぶことがたくさんありました。これからも勉強に遊びに一生懸命取り組んで、それぞれの夢を叶えてください。ありがとうございました。

京都教育大学には、6 年もの間お世話になりました。この大学・大学院生活の中で学んだことはとても多く、そして大きなものでした。これから迷い、苦しむ時が来ても、この 6 年間で得たことを力にして、前に進んで行きたいと思います。子どもたちのために、明るい日本、世界の未来のために、微力ではありますが精一杯頑張っていきます。6 年間、ありがとうございました。

最後に、大学・大学院の進学を快諾し、私の研究や様々な活動を後押しし、支え、また心を休ませる時間をくれた家族に心よりの感謝を申し上げ、謝辞を締めくくらせて頂きます。

2013 年 1 月 10 日

大上拓也

参考文献

社会科教育関連

1. 日本社会科教育学会（2012）『新版社会科教育事典』ぎょうせい, p.254.
2. 吉田正生(2007)「メディア教育とシティズンシップ」『社会科公民教育における英国シティズンシップ教育の批判的摂取に関する研究』pp.25-29.
3. 門脇厚司（1999）『子どもの社会力』岩波新書, p.11.
4. 『社会科教育』明治図書（過去 5 カ年分）No.571-650
5. 『日本 NIE 学会誌』創刊号-第 6 号

情報メディア、メディア・リテラシー関連

6. 総務省平成 24 年版情報通信白書,
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc122310.html>,
2013 年 12 月 9 日閲覧
7. 小学生携帯電話所有率, <http://todo-ran.com/t/kiji/14679>, 2013 年 6 月 7 日閲覧
8. 藤竹暁（2005）『図説日本のマスメディア〔第二版〕』日本放送出版協会, p260.
9. マスターマン, L.（2010）『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ—』世界思想社, p.28. pp.29-33, pp.155-298.
10. マクルーハン, M.（1987）『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房, p.7.
11. 川上和久（1994）『情報操作のトリック その歴史と方法』講談社現代新書, p.107.
12. バッキンガム, D.（2006）『メディア・リテラシー教育 学びと現代文化』世界思想社, p.21. pp.21-22. p.106.
13. 橋元良明（2011）『メディアと日本人 変わりゆく日常』岩波新書, p.26.
14. 鈴木みどり（2004）『新版 Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』リベルタ出版, pp.16-17. pp.23-24.
15. 総務省（1998）「通信白書」
16. 内閣府（2007）「国民生活選好度調査」
17. 武田徹（2011）『原発報道とメディア』講談社現代新書, pp.113-114.
18. 情報通信の現況と政策動向 2013 年 11 月 18 日閲覧
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc243120.html>

学校教育関連

19. 中央教育審議会答申（1981）「生涯教育について」
20. 中央教育審議会答申（1991）「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」
21. 中央教育審議会答申（1997）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
22. 文部省（1990）『情報教育に関する手引き』ぎょうせい, pp.107-109.
23. 中央教育審議会答申（1998）「新しい時代を拓く心を育てるために 次世代を育てる心を失う危機」
24. 中央教育審議会答申（2002）「新しい時代における教養教育の在り方について」
25. 中央教育審議会答申（2003）「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」
26. 中央教育審議会答申（2005）「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について 青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について」
27. 中央教育審議会答申（2007）「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」
28. 中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」
29. 中央教育審議会答申（2008）「今後の青少年の体験活動の推進について」
30. 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領総則編』, p.1.
31. 教育情報センター「教育における“コンピテンシー”について OECD P I S A 調査の基本概念」旺文社
32. 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領社会科編』 pp.24-25.

社会構成主義、メタ認知能力関連

33. ガーゲン, K. J. (2004) 『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版, p.95. p.288. p.291. p.293.
34. 三宮真智子（2008）『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房, pp.1-16. pp.24-25.
35. スタンバーグ, R. J., & Berg, C. A. (1986) Quantitative integration: Definitions of intelligence: A comparison of the 1921 and 1986 symposia. In R. J. Sternberg & D. K. Detterman (Eds.), What is intelligence? Contemporary

36. 宮崎清孝、上野直樹（1985）『コレクション認知科学 3 視点』東京大学出版会、p.130.
37. ピアジェ, J. (1970) Piaget's theory. P. H. Mussen (Ed.), Carmichael's manual of child psychology. 3rd ed. Vol. 1. New York: Jhon Willey & Sons. 中垣啓訳（2007）『ピアジェに学ぶ認知発達科学』北大路書房
38. シーゲル, I. E. コッキング, R. R. (1983) 『認知の発達—乳児期から青年期まで』サイエンス社, p.96.
39. 長島瑞穂・寺田ひろ子（1977）「子どもの発達段階」秋葉英則他『小・中学生の発達と教育』創元社
40. 村上宣寛（2007）『IQ ってホントは何なんだ？ 知能をめぐる神話と真実』日経 BP 社, pp.82-86.
41. スタンバーグ, R. J (1986) Intelligence Applied: Understanding and increasing your intellectional skills. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich. pp.24-25.

付録

付録 1	メディア単元学習の事例分析一覧・・・・・・・・・・	1
付録 2	修士論文実践授業記録・・・・・・・・・・	4

付録1 メディア単元学習の事例分析一覧

論文名・授業テーマ	著者	機関誌名(巻・号)	記載ページ	類型
“情報教材”リフレッシュ&トッピング	島田佳幸	社会科教育 No. 572	pp.32-33.	知識受信型
“マスコミ教材”リフレッシュ&トッピング	角田将士	社会科教育 No. 572	pp.34-35.	受信発展型
調べて考える学習＋参加型学習＋三次元志向のアプローチ	有森歩	社会科教育 No. 572	pp.96-97.	送信終結型
ニュースに関心を持つ仕掛けクイズ	染谷幸二	社会科教育 No. 574	pp.50-51.	知識受信型
“ネット資料”で授業	口川和伸	社会科教育 No. 577	pp.44-47.	受信発展型
5年＝写真・統計資料の見方考え方指導の基本	稲葉忠之	社会科教育 No. 577	pp.62-64.	送信終結型
5年 放送・新聞・電信電話	小原友行	社会科教育 No. 578	pp.94-95.	受信発展型
知識活用型“メディアリテラシー”の教材開発	小山茂喜	社会科教育 No. 582	pp.78-80.	知識受信型
“資料活用力”が育つ勉強のコツ	鈴木康	社会科教育 No. 588	pp.58-59.	送信終結型
「通信と国民生活」子ども熱中の学習問題	松村聡	社会科教育 No. 589	pp.40-41.	知識受信型
「情報の活用」子ども熱中の学習問題	江崎広章	社会科教育 No. 589	pp.42-43.	送信終結型
小学3・4年“能力育成用語”の分析と解釈	桜木泰自	社会科教育 No. 593	pp.30-31.	送信終結型
小学5年“能力育成用語”の分析と解釈	山下真一	社会科教育 No. 593	pp.32-33.	受信発展型
小学5年“学習技能用語”の分析と解釈	中島嘉之	社会科教育 No. 593	pp.50-51.	送信終結型
5年 年間計画＆単元づくりの研究ポイント	秋田真	社会科教育 No. 594	pp.77-79.	知識受信型
見方・考え方をつくる教材解釈と発問	小倉勝登	社会科教育 No. 599	pp. 78-81.	受信発展型
情報の双方向性社会 地域学習にどう盛り込むか	澤井陽介	社会科教育 No. 600	pp. 40-42.	対話的送受信型
注目単元の指導案—書き方＆見方	久保里美	社会科教育 No. 601	pp. 50-53.	受信発展型
新聞の活用—プロはこう指導する	橋本祥夫	社会科教育 No. 602	pp. 47-49.	送信終結型

テーマパークの添乗員になったら	片岡万喜雄	社会科教育 No. 603	pp. 40-41.	送信終結型
“社会の情報化”って何？	田本正一, 藤田守	社会科教育 No. 604	pp. 24-25.	送信終結型
“放送と新聞と国民生活”って何？	福田正弘, 太田正行	社会科教育 No. 604	pp. 32-33.	知識受信型
5年「情報って何だろう？～情報のつくられ方について考える」でする“調査・思考・表現”	梅津正美	社会科教育 No. 606	pp. 62-63.	送信終結型
情報リテラシー＝習得・活用型テーマのベスト3	加賀谷徳之	社会科教育 No. 612	pp. 64-65.	受信発展型
小学5年・子どもをゆさぶる学習問題	藤原なつ美	社会科教育 No. 612	pp. 84-86.	知識受信型
“知識を見える化”する授業とノート指導	森川正樹	社会科教育 No. 615	pp. 50-53.	受信発展型
情報化社会って—ABC ランク見本	福田正弘	社会科教育 No. 616	p. 98.	知識受信型
双方向の情報～情報ネットワーク～にかかわる新教材の着眼点	安野功	社会科教育 No. 618	pp. 114-117.	対話的送受信 型
ネット時代の資料活用の技能とは？	澤井陽介, 石井正広	社会科教育 No. 618	pp. 132-133.	知識受信型
情報の消費者と加速化された社会	岡崎均	社会科教育 No. 619	pp. 28-29.	送信終結型
学習成果が光る表現活動	江崎広章	社会科教育 No. 623	pp. 80-81.	送信終結型
情報化＝ホットな話題から出題クイズ	許鍾萬	社会科教育 No. 624	pp. 38-39.	知識受信型
5年「情報の活用」に有効な学習の作業化	松岡靖	社会科教育 No. 625	pp. 34-35.	受信発展型
「情報ネット」単元に“最速ニュース”挿入のヒント	橋本祥夫	社会科教育 No. 627	pp. 42-43.	知識受信型
こんなニュースで“PC 活用”	戸村隆之	社会科教育 No. 627	pp. 81-83.	知識受信型
NIE を取り入れた活動づくりの指導	小原友行	社会科教育 No. 627	pp. 90-91.	受信発展型
小学校ニュース感度のチェックシート	河田祥司	社会科教育 No. 627	pp. 92-94.	知識受信型
マインドマップを利用して討論—テレビと新聞どちらが情報を得られるか	河野富男	社会科教育 No. 628	pp. 54-55.	送信終結型
情報化社会の学習＝年間計画・単元構成の配慮点	柳沼孝一	社会科教育 No. 634	pp. 46-47.	受信発展型
新・年間教材を入れた年間計画・単元構成のヒント	新谷和幸	社会科教育 No. 634	pp. 80-83.	対話的送受信

				型
社会科の指導内容＝知識の構造図はこうだ！	北俊夫	社会科教育 No. 636	pp. 26-31.	受信発展型
“情報化社会”に対応する指導のアイデア	杉浦勉	社会科教育 No. 636	pp. 46-47.	受信発展型
PISA 型でつくる学習問題テーマ一覧	杉浦孝志	社会科教育 No. 637	pp. 64-67.	受信発展型
“情報化”でつくる PISA 型学習問題のアイデア	高木謙一	社会科教育 No. 637	pp. 94-95.	送信終結型
“動作化”をチャーム UP する知覚語・ベスト 10	田上大輔	社会科教育 No. 641	pp. 40-41.	受信発展型
5 年「情報化社会」＝この発問→こう知覚語化	秋山良介	社会科教育 No. 641	p. 60.	受信発展型
メディア・リテラシーを育成する社会科 NIE 授業の有効性に関する研究 —戦時中の新聞を活用した小学校社会科授業の実践を通して—	松岡靖	日本 NIE 学会誌 第 4 号	pp.81-90.	送信終結型
新聞を活用し社会事象の読み解きに重点を置いた社会科学学習の構想 —小学校社会科学学習を事例に—	橋本祥夫	日本 NIE 学会誌 第 4 号	pp.41-50.	受信発展型
小学校における NIE 導入の初期指導 —言語活動の充実を図る NIE 活動—	橋本祥夫	日本 NIE 学会誌 第 5 号	pp.77-80.	送信終結型
知識基盤社会を生きる能力を育成する教材として新聞の可能性 —新聞を活用した市民性学習の試み—	下田好行	日本 NIE 学会誌 第 6 号	pp.1-10.	送信終結型

付録2 修士論文実践授業記録

(平成25年10月16日(水)実施分)

T: 授業者(大上)

P: 京都教育大学附属京都小中学校
5-Bの児童

T: これから社会の授業を始めます。

P: よろしくをお願いします。

T: よろしくをお願いします。

今日は尾辺先生ではなくて大上先生が社会の授業をします。

P: いえーい

P: ビデオカメラ取ってる?

T: ビデオカメラ撮ってます。

撮ってますけど、あのビデオはほとんど先生が映ってるんで。

P: すっぴんや・・・

T: すっぴんは気にしないでいいよ。ほとんど顔は映らないから。はい、それではね、前期も終わりましたね。

P: はい・・・

T: 後期が始まりましたね。

P: はい・・・

T: 後期一発目の社会ですか?

P: 違う。

T: 違う?

P: え?初めてやろ?

T: えっと、後期の社会は、情報という単元、勉強をしていきます。

P: 情報?

T: 情報っていつでも分かりにくいと思うんで、ちょっとみんなにこんな質問してもいいですか?

P: はい。

T: みなさん、休みの日に何してます?

P: ごろごろしてる!

P: 本読んでる!

P: ゲーム!

P: 公園に遊びに行く!

P: テレビ見てる、テレビ!

(などと口々に言う。)

T: みんないろいろしますね。

今聞いた中では、ごろごろするとか、本読むとか。

P: ゲームする。

T: ゲームする。いろいろしてますね。なんでこんな質問するかというと、まあ後につ

ながってくるんですけど。みなさんに今度はこういう質問をします。メディアって何？

P：メディア知ってる。

T：メディアって何か分かる人？（挙手を求める）
メディアってこんなもんだよーって言えます？

P：ちょっとだけ・・・

T：みんなに説明できる人いますか？
はい。（P1を指名する）

P1：パソコンとか、インターネットとか、そういうもの。

T：おおーすごいですね。他、何か言いたい人ありますか？じゃあP19さん。

P19：えっと、最近見たやつでは、情報を取り入れたものとかを、メディアっていいます。

T：ほおーよく知ってますね！それでね、先生メディアって何かなーって考えてちょっと即答できなかったんですけど、国語辞書で調べたんです。そしたら、なんかこんな難しい言葉が出てきたんです。

（スライドを提示）

P：媒体？

T：媒体とか手段って出てきました。

P：手段？

P：手段って笑

T：なんか分からないですよね？思ってたのと違いますよね、なんか。

それで、よくよく調べると、メディアっていうのは「情報を伝えるときに使うもの」だそうです。今、P1さんとか、P19さんが言ってくださったものとほとんど一緒ですね。

そしたら、今みんなが思い浮かぶメディアって何か、言えますか？

P：はい。

P：言える。
（挙手多数）

T：言えますか？じゃあ、P26さん。

P26：えっと、新聞で見たんですけどやなせたかしさんが亡くなった。

T：ああ、新聞でニュースを見た。

P：アンパンマンが…。

T：ねえ…他何かありますか？P11君。

P11：おし！！噂！

T：噂、おおー、情報を伝えるときに使うものの、噂？

P：あ、そうじゃなくて、口！

T：口！おおー、口もメディアやろと、ほーおもしろいですね！他に何かありますか？じゃあ P23 さんいきましょう。

P23：テレビのニュース。

T：はい、テレビのニュース。おもしろい、いろいろです。言いたいですか？では P12 君。

P12：お手紙。

T：お手紙！おお！お手紙って書く人います？

(挙手半数ほど)

T：ほー、では、メディアっていろいろみなさんの頭の中に出てくるやつがあると思うんですけど、例えばテレビがありますね。テレビ今こんなんですね。

(スライドを提示)

P：おおー。

P：3D テレビとかもある。

T：ねえ、3D テレビとかもありますね。先生がそんなに、ちっちゃいときは、こんなではなかったですけどこんなんが家にありました。

(スライドの古いテレビの画像を指して)

P：あー！

P：家にあるー

P：お兄ちゃんの部屋にある

T：先生が子どものときはこんな薄型とか考えられなかったんですよ。他には、新聞ですね。京都新聞、皆さんの家は京都新聞ですか？まあいろいろこんな記事がありますね。

(スライドの新聞記事を指しながら)

T：あとは本、本もメディアですね。こんな本とか、みんなが好きな図鑑とか、国語辞書とか。

(スライドの本の画像を指しながら)

P：まんが。

T：これ人気じゃないですか？

P：みっけや！

T：みっけですね。あとは、携帯電話なんかもそうですね。

P：ガラケーも持ってるし、スマホも持ってる。

T：こんな携帯（ガラケー）持ってる人？

(半数ほど)

T：違う、こっち（スマホ）っていう人

(半数ほど、こちらの方が多い)

T：多いなあ、では携帯の最初の姿って知ってますか？

P：知ってる！

P：なんかくるくるまわってるやつ。

P：なんかめっちゃ重いやつ。

P：8キロくらいのやつ。

T：これ、先生が生まれる2年前です。こんな大きかったらしいです。

（1987年の携帯の画像を指して）

P：お父さん使ってた。

T：なんかめっちゃくちゃ高かったみたいですね。はい、それで、いろんなこんなメディアがありますよね。そこで、こんなにいっぱいメディアがあつたら、なんか、どれ使ったらいいか分からなくないですか？

P：いいやん別に。

P：そのときの気分。

T：気分で使う、いいですねー。

P：違う、使い分けるんや！

T：使い分ける、ほおー！

P：なんか、いる場所によって。

T：ほお、いる場所によってなるほど。それで、いろいろ考えることはあると思うんですけど、みなさんの身近なもの、この前アンケート取らせてもらいましたね。

P：あー。

T：そこで、みなさんにこれは身近かなと思

うメディアを4つ選びました。

「テレビ」「携帯電話」「新聞」「パソコン」

（スライドに提示しながら）

これを、今日はみなさんにランキング、してほしいんです。だから、1位から4位までつけてほしいんです。

（ざわざわ）

T：つけてほしいんですけど、1から4まで並べてって言われても、無理ですよ？だから、この条件、この戦いではこれが1位やっていうのを決めてほしいんです。

P：あー。

T：3バトル用意してるので、ちょっとね、プリントとかやりながら、やってほしいなっています。

（プリントを配る）

T：今日は鉛筆だけ使うので。3つあります。3つありますが、まず最初にやってもらいたいことは名前を書くことです。忘れないでね。

T：できましたか？

T：それでは、名前を書けた人は顔をあげてください。はい、ありがとうございます。それでは、早速、ラウンド1いきましょう。ラウンド1、カーン！

P：ボクシング！

P：カキーン！

T: はい、情報をより多くの人に、いろんな人に伝えたいときに使ったら、一番自分がいいと思うもの1位から4位まで。これは、別に答えとかないです。自分が使ってる中でとか、そういったところで考えてくれたらいいです。

P: 1位と2位が一緒の場合は?

T: 1位と2位が一緒の場合は、一緒って書いてください。

P: 自分のことですか?

T: はい、自分が見たり使ったりしている感じで。

P: テレビとパソコンと…?

T: はい、テレビとパソコンと新聞と携帯電話ですね。プリントの上にも書いてあるんで、そっちも見てください。

T: そして、1位にした理由と、ビリにした理由なぜ、これがビリになったのかっていう理由を書いてください文章が難しいなら、言葉でも結構です。

P: 4位の理由はつけにくい。

T: つけにくかったら、できる範囲でいいです。

(記入中)

T: かけた人は先生に合図を送ってください。ええ目してますね、P29君。

T: 大体書けましたか? いけますか? まだですか?

かけたよ一って人はええ顔してください。

T: お、できました? では P12 くんができたみたいなのでぼちぼち始めます。気づいたら途中で書いてもいいので。

T: じゃあ、私の1位から4位は、ぼくの1位から4位はこれやって言ってくれる人。

P: はい。(挙手 10 人弱)

T: じゃあいきましょうか、P24 くん、お願いします。まず1位から4位言ってください。

P24: 1位が2つあって、新聞とテレビ。3位も2つあって、パソコンと携帯。理由は、新聞とかテレビは会社が調べてあることを教えてくれる。パソコンとかは、自分で調べたら出てくるから。

T: おー、なるほど。会社が教えてくれるのと、自分で調べるという所が違う。なるほど、そういうことやね。(板書)

T: まさかと思うけど、これと同じランキングができた人います? お、P1 さん一緒?

P1: ちょっと違う。

T: まったく一緒は? お、P16 さん、何か付け加えたいことありますか? 大体そんな感じ?

じゃあ、他のランキングを言ってくれる

人、P23 さん。

P23：私は、1 位をテレビ、2 位新聞を、3 位をパソコン、4 位を携帯電話にしました。

T：テレビ、新聞、パソコン、携帯電話。
はい、じゃあその理由は？

P：はい、テレビをもっている人はなんですけど、全国どこでも、どこにいる人にも伝えることができるからです。

T：全国どこでも伝えられる、なるほど。
じゃあ 4 位の…

P：はい、携帯電話が 4 位の理由は、自分の知り合いや特定の人間にしか情報を伝えることができないからです。

T：ほお、知り合いにしか教えられない！

P：あーそっか。

T：では、他に何か意見のある人いますか？
じゃあ、P19 さんどうぞ。

P19：えっと、私は 1 位がテレビと新聞で、3 位が携帯電話とパソコンなんですけど。

T：ほお、さっきの P24 君と同じ。

P19：理由は映像とか情報量とかがわかりやすく伝わるので、テレビが 1 位で、新聞も、もっと細かく丁寧に書いてあるので、よくその状況が分かりやすくて 1 位かなと

思ったんですけど、パソコンと携帯電話に関しては、P23 さんが言ったように個人個人の情報だけやから、あまり多くもないしくわしくもないかなあと思いました。

パソコンも、情報量が多いことは多いけど、あまり分かりやすすくないから 3 位にしました。

T：(板書) 映像の映って習ってます？

P：まだ。

T：じゃあ、今みんな出してくれましたね。
ではここで出た意見で、これはもうちょっとこうじゃないかとか、何かありますか？

P29 君答えたそうですね、どうぞ。

P29：えっと、P24 君のランキングを、1 位をテレビ 2 位を新聞、3 位を携帯電話、4 位をパソコンにした方がいいと思います。

T：した方がよい、それはなぜですか？

P：えっと、新聞だと、買っていないおうちもあるから、買っていない人には伝わらないから。テレビだと、もっている人たちが多から。3 位が携帯電話なのは、パソコンはあまりもっていない人が多いと思うから、携帯電話の方が持っている人が多いと思うから。

P：そんなもってない人はいっぱいいるやん

P：テレビもってない。

P：P11 くんテレビもってない！

P：そんなん言ったら果てしない。

T : はい、P7 さん。

P7 : 私は1位がテレビ、2位が新聞、3位が携帯電話、4位がパソコンだと思います。理由は、テレビだと同じ情報を繰り返し伝えることができるから。新聞だと、出す時間が決まってるから、速報とかを出せない。携帯電話も最近は多くの人にメールとかできるようになっている。

T : (板書) はい、みなさんまだ言いたいことがあるんでしょうけど、ちょっと我慢してくださいね。

次の戦いもあるんで。とりあえず、これで終わります。

はい、それでは、今みなさん色々な例を言ってくれたりしたんですけど、先生はこんな例を思いついたんですね。

(スライドで例を提示する)

テレビだったら、ニュースとか、天気予報とか、天気予報なんかはみなさんよく見るんじゃないですか？

パソコンやったら、ちょっと見にくいですね、ここに YAHOO ニュースって書いてあるんですよ。

パソコンでもニュースが見れる。あとはこんなん。

P : You tube ! !

P : いえーい !

P : めっちゃおもしろい !

T : You tube ですね。再生ボタンをポチって押したら、映像が見れますね。

P : ビデオみたいなもの。

P : 動画。

T : まあこんな感じで、テレビとかのパソコンとかの例を思いついたかなと思います。

それでは、ラウンド2です。カーン！情報をより速く、速く、時間が命です。

P : 時間が命笑

T : 広くじゃないですよ？範囲は関係ありません。

P : 速さ…

T : 誰かが、みんなに伝えたいって思ったときに、ぱっと！そんなランキングを作ってください。

(記入中)

T : 自分が送るときがイメージできなかったら、誰かが送るとき、みんなのもとに情報が届くときを

イメージしてもいいです。なかなか、自分が送るっていうことはイメージしにくいと思うので。

T : ちょっと難しいですよ、でも自分なりのランキングができればそれでいいので。

できた人がちょこちょこええ顔してますね。じゃあ、そろそろいきましょうか。P22 くん。

P22 : 1位がパソコン、2位がテレビ、3位が新聞、4位が携帯電話です。

T: 1 位がパソコン、2 位がテレビ、3 位が新聞、4 位が携帯電話。はい、では理由を聞きましょう。

P: パソコンはインターネットだから、やっぱり速い。

T: インターネットという言葉がでましたね。(板書)

P: 携帯電話は、たくさんの人には遅れるんですが、テレビと比べると遅い。

T: テレビと比べると、遅い。なるほど。

P: そんなことない

T: そんなことないっていう言葉が出ていますね。

P: そうだそうだ、そんなことないぞ!

P: ふざけるんじゃないわよ!

T: はい、そういうのは手をあげて言いましょうね。

それでは、P27 君いきましょう。

P27: 僕は 1 位がテレビと携帯で、3 位がパソコンで、4 位が新聞です。

P: オッケー!

P: オッケーって…

T: では理由を。

P: 1 位がテレビと携帯の理由は、テレビだと速報があるし、携帯でも警報が出ればすぐに連絡がくるからです。

P: 音なるよな。

P: ぶーぶーとかってさ。

P: それで、4 位が新聞なのは、朝刊と夕刊しかなく、速く伝えられないからです。

T: ほーなるほど。新聞は朝刊と夕刊がある。なるほど。(板書) はい、じゃあ P30 くん。

P30: えっと P27 くんに似てて、1 位がテレビ、2 位が携帯電話、3 位がパソコン、4 位が新聞です。

T: ではなぜテレビを 1 位にしたんですか?

P: テレビ局にはパソコンがいっぱいあって、情報が速くきそう。新聞は朝と夕方しかこーへんから、情報があってもすぐには分からない。

T: なるほど、テレビ局ではすぐに調べられる…。

じゃあ最後、一人!

P: はい! (挙手多数)

T: P10 さん。

P: あー…

P10: えっと、私は 1 位がテレビと携帯とパソコンで、4 位が新聞です。

T: じゃあ理由は?

P: テレビは、速報がすぐ出るし、携帯電話

も緊急メールがくる。新聞は速報が出ても…。

T: なるほど。ちょっと難しかったですね。速さっていうのは。

P1: 反論。

T: 反論? はい、P1 さん。

P1: 私は、1 位がテレビで、2 位が新聞なんですけど、新聞には朝刊と夕刊しかないって言うけど、買ってない人がいても、駅前とか人の多いところで号外とかを配ってるから・・・

P: あー。

P: そうや。

P: オリンピックとかのときも。

T: 号外! その存在を忘れてましたね。号外もらったことある人います?

(少数)

P: 号外ってなんですか?

P: 号外っていうのは、大きなニュースを・・・(子ども同士が教える)

T: では、先生が考えた例です。テレビはみんな言ってくれましたね、このニュース速報です。

P: 最悪、巨人優勝や。

P: 見せるんじゃない!

T: すみません、先生巨人ファンなので。

P: もう最悪!

T: はい、じゃあ携帯電話はこれも言ってくれましたけど、緊急メールがきます。地震とか、この前の台風のと きにもきましたね。

P: きた!

P: びっくりした!

T: あとは、電話もそうですね。なんか、これ伝えたいって思ったときに、すぐ「もしもし」ってできますね。

では、最後、ラウンド3! 最後も難しいかな?

P: これは簡単や。

T: 簡単ですか? 情報を保存しやすいもの。保存というのは、いつでも見れるようにできるというもの。保存しやすいなって思うものを書いてください。

(記入中)

T: お、ええ顔してくれてますね。焦らなくていいですよ。

保存で、その保存方法も思いついたら書いてください。

T: ではそろそろできたみたいなので、早速ですがランキングを言ってくれる人。P11 君はやかっただすね。P11 君行きましょう。

P11: えっと新聞が1 位で、あとは全部最下位。

P：えー！！

T：おもしろいです！理由を聞きましょう。

P11：新聞は切り取って保存しやすいけど、パソコンとかテレビとか携帯とかのニュースはなんかどんどん変わっていくから。

P：あー。

T：切り取って保存ができる（板書）、したことある人います？

（半数以上）

T：おもしろいですね。はい、じゃあ他に？
P15 さん。

P15：1 位が新聞で 2 位がテレビで、3 位が携帯電話とパソコン。

T：新聞人気ですね。

P15：理由は、P11 君と同じで、新聞はすぐに切り取って保存ができるからで、携帯とパソコンは録画することができないから。

P：できんで！

T：お、なんか言いたい人がいますね。P24 くん。

P24：1 位がパソコンで 2 位が携帯、3 位がテレビで 4 位が新聞。1 位がパソコンなのは、使ったやつ？使ったやつが…

P：りれき？

P24：履歴が残るから、テレビは録画ができるし、携帯もなんかそういうようなやつがあって、新聞は切り取って保存ができるって言うてるけど、何十年も前のやつやったら、なくす。

T：なくしてしまう。おもしろいですね。他に意見がある人、P31 さん。

P31：私は、1 位が 3 つあって、新聞とパソコンと、携帯です。それで、4 位がテレビ。

T：4 位がテレビ。

P31：それで、なんで 1 位なのかというと、パソコンやったら P23 くんが言ったみたいに保存とかできるし、携帯もなんかパソコンのちっちゃい版みたいな感じやからできて、新聞も切り取って保存できる。

テレビがなんで 4 位かというと、ニュースとか、見るけど保存しないからいつも、一瞬で終わっちゃって、そのうち消えるから。

T：P31 さんはそういう意見ですね。携帯電話はちっちゃいパソコンだと。おもしろいですね。はい、他に何か意見は。P9 さん、当たりました？

P9：先生？

T：…P9 さんいきましよう。

P9：1 位が新聞とテレビで、3 位が携帯で

4 位がパソコン。

T: 新聞、テレビ。こうですね。理由をどうぞ。

P9: なんで新聞とテレビが 1 位かというと、新聞は切り取って保存ができるし、テレビも録画ができる。パソコンは、ニュースがいっぱいあるから、何日かしたら消えて行く。

P: あーそっか。

T: 消えてしまう。どんどん新しいのが出てきて消えてしまう。おもしろいですね。じゃあ、最後。じゃあ、当たってないのは…

P21 君いきましようか。

P21: 僕は 1 位が新聞とテレビで、3 位が携帯とパソコン。理由は、新聞は紙に書いてあって、捨てない限り残るから。テレビは録画ができる。

T: 新聞は、紙。(板書)

P21: 3 位がパソコンの理由は、P9 さんと同じで、情報が新しくなって消えてしまう。

T: 消えてしまう。なるほど、はい。では、みなさんすばらしい意見が出ましたね。もっと言いたいっていう意見もあると思うんですけど…ちょっと例にいきますね。テレビ、これ知ってます？

(スライドで例を提示する)

P: ブルーレイ！！

T: お、即答できるんですか？先生最初見たとき、なんやこれって思ったんですけど、先生のときこれやったんですよ。(VHS の画像を指しながら)

P: あー持ってるー。

T: 今は大体これとか。

P: DVD !

T: これってなんですか？

P: 録画。

T: この前話してると、アニメとか録画してるって友だちもいましたね。これって保存ですね。ではこれは？(スクラップブックを指しながら)

P: スクラップノート。

T: そうですね、スクラップノート作ったりとかみなさんしたんじゃないですか？またこうやってファイルに新聞をとしたり、パソコン、これは？

P: グーグル

T: ですね、これは？

P: あー！

P: USB !

T: これすごいんですよ。こんなにちっちゃいのにすごい量のデータとか保存できます。

こんなもひとつ、方法ですね。

携帯電話の例はないですけど、みんなが言ってくれたように、履歴とかメールとか保存できますね。

また、みなさんの出てこなかった意見というのは、先生回収させてもらって読ませてもらいます。

T:それで、今日は何をしたかという、ランキングをつけて順位をつけるということは別に大事じゃないんです。みなさんに順位をつけてもらうということで、1位と2位、パソコンと新聞やったらどっちが上かなあとか、パソコンこっちの面でいいけど、新聞もこっちの面でいいなあとか、そういったことをちょっと考えて欲しかったんです。

T:ということでそれぞれのメディア、テレビ、携帯電話、パソコン、新聞。これらにはいい所と悪いところ、悪いところっていったらあれですけど、ちょっと不便かなってところがあります。長所と短所があります。それをちょっとだけ整理してみましよう。

T:まず、みなさんね、いろんな意見だしてくれましたけど、(まとめのスライドを出しながら)テレビの特徴、いいところ。広い範囲に速く伝えられる。ニュースとかそうですね。もう一個。録画して保存できる。アニメとか。ニュースも保存できるんですよ？

P:えー。

P:あまり撮らない。

T:で、短所。私たちが発信することは難しい。ちょっとテレビ作ってドラマ流してやろうとか、ちょっとそれは難しいですね。だから、見るならできますね、テレビは。見るならすごい便利ですね。

T:次パソコン。これも同じです。ただ誰かが言ってくれたように、自分で調べないといけない。テレビだったらつけてるだけでぼーっと見てたらいいですけど、パソコンはそういうわけにはいきませんね。

P:もういっこ長所ある。

T:はい、もういっこ長所ある？

P:自分から発信できる。

T:自分から発信できる？

P:You tubeとか！

P:動画！

T:おお、すごいすごいすごい！それ大事にしてください。ここには書いてないですけど、みなさんの頭の中で大事にしてください。そしてデータで保存できる。短所、使うためには技術が必要。

P:あー。

P:人差し指やったらあかんか。

T:なかなかね、使うためには打つ技術もありますし、どこをどうやったらこれを調べ

られるかということも分かってないといけない。

P：キーワードも分からないと。

T：キーワードもね。

P：キーボードめっちゃ難しい。

T：練習も必要ですね。はい次、携帯電話。これは速く伝えられますね。「ちょっとかぎ忘れたし、お母さん！助けて！」とかね。

P：よっぽどの場合やん

T：よっぽどの場合ですね、これ。速くできますね。メールも速いですね。

P：電波ないと無理。

T：電波！電波があればデータで保存もできます。E メールとかね、着信履歴とか。ただ短所もありますね。これも誰か言ってくれましたね。知り合いにしか教えられない。範囲が限られている。

P：スマホはそうじゃないで

T：そうなんですよ、スマートフォンなんですけど、これが少し難しくてスマートフォンは携帯電話とあまり思わないでください。

P：え？

T：ちっちゃいパソコンみたいなんですよ。

だからね、パソコンと携帯電話は区別が難しくなっています。まあまあ、そのあたりもこれから考えてもらえたらなあと思います。

最後、新聞。新聞の長所、広い範囲に伝えられる。新聞取ってる人？

(ほぼ全員挙手)

T：ほら、もうこれだけの人に情報がいきますね。

P：お父さんが新聞は信用できないって言うてる。

T：お父さんが信用できないって言ったはる？なるほど。

P：メディアはウソをついている！

T：メディアはウソをついている！？その言葉は大事にしといてください。

次、保存しやすい。これみなさんに大人気でしたね。スクラップノートとか、そういうことをしながら、保存ができる。短所。伝えるまでに時間がかかっちゃいます。でも P1 さんが言ってくれたみたいに、号外ってものもあるので、一概に時間がかかるとも言えないんですけど、大体は朝刊と夕刊だけなので、このようにまとめますね。

T：では、今日のまとめです。今日はこれだけ覚えるのと、今日考えたことをメディアの特徴として頭においといてくれたらよろしいです。

ひとつ、メディアにはそれぞれ長所と短

所がある。いろんな長所、短所出てきましたけど、こういったことをちょっとでも覚えておいてください。

こんな意見あったなとか、いや、でも自分はこう思うとか。

そしてもうひとつ。これ最初にね、誰か言ってくれたんです。最初にこのまとめを出してくれた人がいてびっくりしたんですけど、目的によって、メディアを使い分ける必要がある。

P：俺や！

T：P12 君ですね。素晴らしいですね、最初に言ってくれたのは。こういうときはテレビを見ようとか、保存するんやったら私は新聞の方がやりやすいかなとか、やっぱ俺はパソコン使えるし、パソコンが一番やわとか、そういった場合によって、P1 さんも言っていましたね、場所によって使い分けるとか、いろんなことを言ってくれたんですけど、そういったところで自分なりのメディアを持っていつてくれたらなと思います。これは、もう 1 時間先生が授業させてもらうんですけど、そのときにも大事になります。

T：それでは今日の先生の授業を終わります。

修士論文実践授業

(10 月 18 日 (金) 実施分)

T：授業者

P：京都教育大学附属京都小中学校 5-B の児童

T：これから社会の授業を始めます。

P：お願いします。

T：お願いします。

P：情報の世界を広げよう。情報を利用するわたしたち。(スライドを見て)

T：今日もね、大上先生が社会の授業をやっています。

P：はい。

T: えっと、前回ね、P2 君がお休みやったので、池内君は何をしたかちょっと分からないんで、みなさんもちょうと忘れてる…？

P: 覚えてる。

T: 覚えてます？何したか覚えてます？前回のプリントを見てね、思い出してほしいんですよ。P2 君にないのがごめんなさいなんですけど。

(前回のプリント配布)

T: ちょっと確認してくださいね。先生のコメントもついています。みなさんとても素晴らしい意見を書いていてくれました。意見には出なかったけどね、こんなことを考えてたんやって先生見させてもらいました。あとでまた尾辺先生にもお見せしたいので、授業の終わりにそのプリントは回収するのでまだ貼らないでくださいね。あと折りたたんで、机の中にぐちゃとかやめてくださいね。

T: はい、ということですね、前回やったことっていうのをちょっと思い出してください。メディアってやりましたね。メディアって何やったかっていうのを覚えている人いますか？メディアって何やったつけ？

P: はい。

P: はい。

(挙手半数ほど)

T: 結構あがってますね。では P26 さんいってみましょうか。言えますか？

P26: 多分…。

T: はい、いきましょう。

P26: 長所と短所があるもの？

T: はい、長所と短所がありましたね？メディアには長所と短所がありました。では、メディアっていうのは何やったかなっていうのが言える人いますか？

P: はい。

(挙手半数弱)

T: じゃあ P10 さん。

P10: はい。えっと多分ですけど、情報を伝えるもの？

T: はい、素晴らしいです。情報を伝えるときに使うものでしたね？ではそれが何やったかな一つっていうのがちょこちょこあったんですけど、何個かありましたね。いっぱいありますね。何個か言える人いますか？

P: はい！

T: じゃあ P29 君。

P29: 一個だけ？

T：一個でも二個でも。

P29：口とテレビ。

T：はい、口もそうでしたね、テレビもそうでしたね。前回やったのは、テレビと何やりましたか？

P：携帯。

T：テレビと携帯と・・・

P：パソコン！

T：パソコン。

P：新聞！

T：新聞もやりました。P2 君、分かるかな？

P2：大体。

T：テレビとか、携帯電話とかパソコンとか、そういったものにはどういった役割があるかなっていうのをこの前授業でやったんですよ。

で、そういうことも考えながら、まあこれは今日の授業では使う・・・使うか、けどまあ大丈夫でしょう。はい、では早速ですね、今日やることをやっていきます。

(パワーポイントを提示)

P：緊急？

T：緊急！

P：緊急告知？

P：先生、映画出んの？

P：ツチノコ？

P：えー！？

T：ツチノコを捕まえよう！探そう！

P：いえーい。

P：うえー。

T：捕まえれば！なんと！

P：お金お金！

T：はい、懸賞金です！

P：いえーい！！

T：はい、これいくらやと思います？

P：100万！！

P：2億！！

P：800万！！

T：これです！2013万！

P：いえーい！

P：2013年やから？

T：そうです、2013年だからです。

P：先生、億にしてよ。

T：ほんまにもらえるんですよ、これ。

P：絶対？命かける？

T:本当に本当に！和歌山県のところに持ってったらもらえるんですよこれ。

P: え？証拠ある？

P: 先生がくれるんちゃうの？

T: 先生があげるんじゃないよ？

P: なーんや。

P: 次の年になったら2014万？

T: そうそう、来年まで待てば2014万円。

P: じゃあ100年待てば…

T: それでは、大事なところです。ツチノコって知ってます？

P: なんかビデオでやってた。

T: 知らないって人？

(挙手4人)

P: えー！？

P: ウソやー。

T: だと思って、こんな知ってる人多いと思わなくて、ツチノコの特徴これから説明します。

P: え？先生見たん？

P: 見てたからそんなこと分かるん？

T: 大きさ、30cmから80cm。

(ツチノコの特徴を示すスライドを提示)

P: 先生見つけたからそなん分かるん？

T: まあこんなぐらい？

P: 笑

P: 色おかしい。

T: そして、色はこげ茶色。

P: あー。

T: こんなんですね。特徴が、ビール瓶くらいの胴体から、三角形の頭がちょこんと出ている。

P: 何これー！

P: なんか！あれや…

T: そして、まばたきをする。

P: あー。

P: えー！？

P: こんなんちゃう！

T: ウィンクしてますね。さらになんとか！すごいのが、2mくらいジャンプします。

P: 意味不明や！

P: なんや！

P: 笑

T: ツチノコ知ってる人！これであってますか？

P: 違う！

P：違う！

P：ビール瓶違う！

P：絵を描いたほうがいい！

T：頑張って作ったのに、先生。

P：絵かく絵かく！

T：先生も写真が欲しいと思いましたので、
これです。

(ツチノコのイラストを提示)

P：え！？

P：これでいい。

P：何で先生こんなん知ってるの？

P：捕まえたの？

P：これがたけのこ。

T：でも、見つかってないので、絵しかない
んです。

P：でも絵があるってことは誰かが見つけて
それを・・・

T：聞いた話で、こういうのを描いたんです
よ。だから本当にこれかどうか分からない。
で、この目撃情報を先生の友達の友達に
教えてもらいました。

P：怪しい。

P：名前は？

T：目撃情報を入手しました。これです！

P：え？

P：田んぼ。

T：ここにいるみたいです。

P：え？

P：本当に？

T：ここにいるんですよ！どうやら。

P：えー、うそ臭い。

P：水なくしたら？

T：で、ここにいるんですけど、どこか分か
ったら先生探しに行くんで、2013万円
を

P：山分け

P：ちょうだい！

T：分けたいと思います。

P：そのうちの2000万僕。

P：はあ？

P：俺が全部もらう！

T：欲張りな人いますね。で、この場所を
分かるようにちょっとみなさん考えて欲し
いんです。どうやったらこれ上手く分かる
かなっていうのを

P：メディア使ったら・・・

T：意見いろいろあると思うんですけど、注
意事項。

(スライドで注意事項を確認する)

P：何を使って？

T：何をつかってどんな方法で写真の場所が

どこかっていうのを知るために、みなさんに考えて欲しいんですよ。

プリントを渡すので、ゆっくり考えて欲しいんですけど、ただ、注意事項は2つあります。一つは、ツチノコのことは内緒にしてください。

P：なんで？

T：ツチノコを探してますってだれかに言っちゃうと、他の人教えてくれないでしょ？

P：あー。

T：だから、写真の場所が知りたいんやっていうのを前に出してください。そしてもうひとつ。ありえないことはやめてください。

P：え？

T：超能力で探すとか。

P：ツチノコ探知機。

T：部下100万人を使って探すとか。

P：大上先生を使って探す。

P：笑

T：いやいや、大変ですよ？先生が。ということで、ちょっとやって欲しいんですけど、写真はこれです。

P：先生、これにいるわけない！

P：先生の家近くやろ？

P：ここの場所が分かったら…

(写真の信憑性についての疑問が出る)

T：まず、自分ひとりで考えてください。何を使って、どんな方法で探すのか。

P：無理なことは書いたあかん？

T：無理なことはやめてください。

(記入)

T：もし、何を使ったらいいのかっていうのが分かりにくい場合は、前回の授業をヒントにしてもいいです。間違いはないですからね。

T：じゃあ、なかなか思いついていない人もいるかな？

では、隣の人同士で一度話し合ってみてください。そこでいいなっていう意見があれば自分の意見をパワーアップさせてください。

P：パワーアップ！

T：もちろん、自分の意見の方がいいわっていうのもオッケーです。

(話し合う)

P：はいじゃあ今からみなさんの意見聞きましょうか。みなさんに発表して欲しいんですけど、じゃあ私のぼくの考えたことを発表してくれる人は手を上げてください。

(挙手多数)	P14：足。
T：じゃあ P3 さん行きましょう	P 足かい！
P3：使うのはパソコン	P：えー。
T：パソコン、ほお。	T：足、足を使う。写真を蹴る？
P3：写真をブログに貼って、それを見ている人たちに聞く。	P14：自分で探す。
T：ブログ、ブログという言葉がでました。 (板書) ブログを知っている人。	T：自分で探す？これをもって、どこですか？って聞いてまわる。すごい大変そうですね。(板書) はい、P11 君行きましょう。
P：はい。	P11：勘！
(挙手多数)	P：勘？
T：誰か説明できる人。P1 さん行きましょう。	P：笑
P1：合ってるかどうか分からへんけど、ブログをやってる人が自分の日記みたいなものを写真と一緒に HP に掲載して、見てもらう。	P11：勘のいい人を使う！
T：その通りです。自分に何か最近起こったことをインターネット上に書き込むんです。それをみんなに見てもらう。パソコンでブログ…おもしろいですね、他に？	T：勘？！
P：めっちゃいいのできた。	P：当たると思ってたの？
T：何か危険なおいがしますね。P14 くん行きましょうか。まず使うもの。	T：でもね、これ当たるかもしれないですね。勘で？方法は？
	P11：場所を言い当てる。
	P：あはは。
	P：いやいや。
	T：場所を。(板書) 他に。じゃあ、P12 くん。
	P12：パソコンとお金と人を使う。

P：お金…？

P12：目撃情報をグーグルで調べて、あ違う、ヤフーで調べて、それをもとに探す。
お金で雇った総員1029名を

T：お金で雇うんですか？誰のお金？

(授業者を指差す)

T：嫌ですよ！まあ後半ちょっと怪しかったんですけどヤフーで探す。(板書)

P：一緒っばいけど…

T：一緒っばい、じゃあどうぞ

P：ほぼ一緒なんですけど、もって行くものが食べ物。

P：いやいや。

P：笑

P：方法は、お母さんが寝ているときに旅に出る。

T：心配しはりますよ？はい他に。P30 くん。

P30：はい、僕は黒川君と似てるんですけど、パソコンの地図アプリを使って、その場所をどんどん探して行く。

P：グーグル？

P：グーグルマップのストリートビュー使ったら…

T：これを使う、なるほどなるほど。(板書)
他に？じゃあ、P27 君。

P27：おっし。使うものが、電話で。

T：もう一度お願い。

P27：電話で、方法が国土交通省に聞く。

P：笑

P：あー。

P：答えてくれへんかも。

P：国土交通省がだめなら農林水産省。

P：農林水産省がだめなら文部省。

P：えー？森林やのに文部省？

T：はい、偉い人に聞く。(板書) じゃあ P23 さん。

P23：P3 さんの意見に似てるんですけど、使うものはパソコンで、掲示板内に質問のコーナーがあるっていうのが最近結構あるんですけど、そこにその写真を張り付けて、で早急に解答を要するっていうボタンがあるから、そこに設定したらいいと思います。

P：難しい…。

T：掲示板という言葉出てきましたけど、掲示板知ってます？

P：知ってる。

P：SNS？

T：何かね、ネットで聞けるところがあるみたいですね。

P:そこに夏休みの宿題どうしたらいいですかって聞いてはった。

T:そんなん聞いてるんですか？

P:この前受験勉強どうしたらいいですかって書いてあった。

T:はい、他に。じゃあ P19 さん。

P19: 使うものは大きく分けて二つあり、パソコンと友達（探偵）。

T: 探偵。

P: そんなんあり？

P: 友達に探偵いるんや、すごい。

P19: まあ探偵に、その場所がどうしても知りたいから、教えてって言って、例えば友達に頼むとしたら、友達の友達に頼むとかしてもらって、範囲を広げて方法としては、よくあるかもですけど、写真に写ってる木や建物を使って、季節とか時期を調べることができると思うので、それでやれば結構いけるんじゃないかと。

パソコンなんですけど、パソコンに関しては P3 さんや P23 さんと同じです。

T: 探偵。

P: 探偵ナイトスクープ。

P: 友達に探偵いたんや。

P: すごいやん。

P: コナン。

P: コナンに頼めば？

T: 他に何か言える人。P24 君。

P24: 電話で国土交通省に聞くってあるんですけど、電話で写真を見せることはテレビ電話じゃなかったらできひんから、車で、大阪の近畿国土交通省に行って、こんな写真って見せて聞いて、そこから無線とか使ったり、2013万円もらえるんやから、2000万円使って色々する。前借して。

T: なるほど、ほー。(板書) 他何か言いたい人いますか？P1 さん。

P1: P23 さんと一緒に、使うものはパソコンなんですけど、ブログじゃなくて、なんでブログじゃないかって言ったら、ブログだったらあんまり見ない人もいると思うから、インターネット上にはいろんな人が見てるところがあるから、そこに掲載して、聞く。

T: うん、掲示板とかともつながってくる感じがしますね。

はい、じゃあねちょっと質問を変えます。色々意見が出ましたね。この中で、何か気になる意見とかありますか？これいいんちゃうかなとか、これはどうなんですかね？とか。

P: 勘とかどうなん？

P: 足もそうやし。

T: はい、P31 さん。

P31: 足がなんか、足じゃなくて、足で歩

くより上から見た方が探しやすいから、ヘリコプターとか。

P：えー！

P：持ってるの？

P：えっと、鳥にカメラつけたりして。

T：おもしろい意見ですけど、ちっちゃく書いてきますね。じゃあ P23 さん。

P23：地図アプリで探すっていうのは、いいと思うんですけど、そういうのって写真を更新する期間が長いから、更新してなかったら、その場所じゃなくて、今その写真の場所が見つかったとしても、工事とかが行われている可能性があるんで、工事前だったら結構違うと思うので。

P：こういう森林とかやったら結構変わってるんちゃう？

P：あれズボン？（スライドの写真を指して）

P：ズボン干してある？

T：これですか？

P：うん。

T：網じゃないですか？これ。

P：ズボン。

T：ズボンかなあ。はいじゃあ他に何かありますか？

もうないですかね。

P：先生の家ベランダから撮った写真じゃ

ないの？

T：違いますよ？こんなところに住んでません、先生。

はい、ではみなさんに今色々だしてもらった意見と自分の意見もありますね。それを、この中から一つ選ぶとしたら、どれを使うか。下の方にある、クラスのみんなの意見を聞いて、自分が一番いいと思った方法を書こう。というところに書いてください。一つです。

T：どうしてもこれとこれは捨てがたいっていう意見もあると思うんですけど、一つです。

P：やばい。

P：勘。

P：勘はどうなんやろ。

P：絶対一つですか？

T：どうしても選べませんか？

P：はい…。

T：じゃあ分かりました。二つ書いてもいいです。

P：捨てがたい。

T：じゃあ、書いてください。どっちも。

P：足捨てたら歩けへん。

T：そっちの捨てるじゃありません、違いますよ？

P: よく考えなあかん。

P: You tube で探すのもありやな。

P: You tube は動画やん。

T: 一個書いてくださいね。書けましたか？
もうちょっと時間欲しい人。じゃああと1
分待ちますね。

P: 先生、ちょっと勘が変わった。

T: ほお、変える。

P: 勘が強い人を一万人と、探す人を1万人。

P: どうやってそなんすんねん。

T: はい、書けましたか？はい、それではみ
んな書けてるようなので、実際にこれとは
違う写真ですが、写真を探した人の話を紹
介します。

P: 先に見せてよ。

P: 実話ですか？

T: これは実話。

P: これ「は」？

T: 「は」

P: 言っちゃったね。

T: え？

P: ツチノコは嘘だってことだ。

T: あ、そういう意味じゃないそういう意味
じゃない。ごめんね、言い間違い。はい、
話を紹介します。(以降、スライドを提示し
ながら進める)

P: あーごまかした！

T: Aさんという人がいます。ある写真、き
れいな写真ですね。綺麗なやつて思いま
した。

P: 疎水や。

P: 違うやろ。

P: 違う。

T: そして、ひらめきました。ピコーン。

P: ピコーン。

T: どうしたと思います？

P: パソコン。

P: Twitter？

T: パソコンでね、まあこういうことです、
こういう掲示板とか、みんなが見ていそう
なところに場所を聞きました。「このきれい
な公園どこなんだろう？」っていう風にね、
こういうことをインターネット上で聞いた
んですよ。

そしたら、それを見たこんな人たちがい
ますね。

4人だけじゃなくてもっといます。ある人
は、分からへん。いやあちょっと分からへ
んわ。見たことないなー。

Bさんがね、何か思いついたんですよ。

何を思いついたと思います？別にね B さん
知っているわけじゃないんですよ。

P：探してあげた？

P：人に聞いた。

T：B さんは、自分のインターネットサイトに、
こういう話をしました。

「今年他界した、死んでしまった自分のお
父さんが、携帯電話にこんな写真をのこし
ていました。」

P：やばいやん。

T：この公園の場所を知りたいんですけど、
どこにあるのか分かりません。分かる方は
教えてください。こういう言い方をしまし
た。

P：お父さんほんまに死んでんの？

P：嘘や。

T：ねえ。嘘っばいですね。それを見た他の
人たち。お父さん死んだはるんやったら何
とかして探してあげな！

って思わはって、それでも分からない。ち
よっと知ってるぞ。分からへん、分からへ
ん、知ってる！

みたいな感じで、分かったんですね。で、
分かった人は何が分かったか？

その公園は〇〇公園じゃないでしょ
うか？ある人は、家の近くなので証拠の写真を
撮りました。

ということを書いてくれたんですね。

そしたら B さんはこの場所が分かりまし
た。そして B さんは、A さんに場所を教え

てあげました。

ということでいい話でおわりましたね。

P：でも父が…。

T：ここで確認してほしいことがあります。
A さんが最初にインターネットを使って、
聞きました。

そしたら、こんな人に広がりましたね。

で B さんがまた、情報を変えて送りまし
たね。

こういう風にまたいろんな人に広がってい
ます。

そしたら、ここに分かったひとが何人か
いて、それを B さんに教えてくれました。

B さんは A さんにその公園はどこかっ
ていうことを教えました。こういうつながり
が、インターネットを使うとあるんです。

P：嘘を言っているのはいいんですか？

T：ん？そこなんですよ、P12 君。今回は、
A さん写真の場所が分かってよかったです
ね。別にだれも傷つけてませんね。

でも、今回はうまくいったんですけど、
自分の送った情報っていうのが他人に勝手
に変えられてますね？

P：あー。

T：これについてはみなさんどう思います
か？難しいです。今のはいいパターンで終
わってます。言えますか？P19 さん。

P19：私たちから見たら、その場合はパッ
と見たら A さんにとっては良い情報、B さ
んがとてもいい人に思えるかもしれないけ

ど、Bさんは実際裏では、自分の父が死んだっていう嘘の、嘘か分からないけど嘘の情報を流しているということになるのでよく知らないけど、ツイッターとかは今問題になっていて、いろんな人が見ているっていうのがあるので、いろんな人に嘘をついていることになるので、結果的には悪い状態で終わっているんじゃないかなって思います。

T: ほ一、結果的には悪い結果で終わっている。でも誰も気づいていませんね。

P: いいじゃない、別に。

T: いいじゃないって思った人。(挙手少数)

P11: くん？どうぞ。なんでいいと思いますか？

P11: 別にハッピーエンドやん。

T: ほお。ハッピーエンド。やり方は別にいいやろ、と。じゃあ P26 さん。

P26: お父さんが死んだのは嘘かほんまか分からへんけど、お父さんがほんとは生きてはるかもしれへんし、そのお父さんがそのブログを見たら寂しいっていうかなんて言うか…

P: あ一。

P: ショッキング。

T: なんか傷ついてしまう人も出てきそうですね。

P: 死んでないのに…

T: ねえ。

P: 見てなかったらいいやん！

T: 見てなかったら！ほお。はい、じゃあ P1 さん。

P1: さっきの P26 さんに付け足しで、お父さんがもし本当に生きてたら、息子にそんなことを言われたら、それだけで嫌な気持ちになると思うし、あと、最後は良かったけど、結局 B さんに公園の場所を教えた人も、どちらかというと騙されてるっていうか、だから最後は良かったけど、そこまでのいきさつがよくないっていうか。

T: ん一。やり方にちょっと問題があるんじゃないか。P12 君。

P12: そこまでは知らないけど、もしもの可能性として、B さんのお父さんっていうのがもし、議員さんとか偉い人？でそうやって死んでることにされてると分かったら、それを部下が名誉棄損として警察に訴えて、その人が逮捕されるかもしれないという、その人だけだけど悪い結果に終わるかもしれない。

T: 誰かを傷つけてしまうってことですね。で、ちょっと聞いてくださいね。みなさん、この方法（板書した内容を指して）を色々考えてくれましたね。

中にはパソコンを使うっていう方法もありましたし、電話なんかもありました。いろんなメディアを使うっていうのから、自分

の足とか、勘とかで探してもいいんじゃないかっていう意見ももちろんありましたね。

そこでね、ちょっと思い出してほしいんですけど、先生、みんなにこんなこと言っちゃいました。

ツチノコが関係してるっていうことは秘密やでって。写真を探すときに。これも、情報を勝手に変えてませんか？

P：あ…

P：え？

T：分かります？ツチノコの場所を知りたいと思って、みんなは情報を送っているのに、ツチノコのことは何も言ってませんね。

P：ほんまや。

P：ウソや。

T：これは、嘘じゃない？情報を変えてませんか？

P：は…

P：ほんまや。

P：うそつきや。

T：別にこれくらい問題ないやろっていう意見もあると思います。

P：別に、写真の場所を知ってからいこうと思ってるから、まだ嘘はついてない。

T：写真の場所を教えられますね。でツチノコを捕って2013万円もらいますね。そしたら教えてくれた人はどう思いますかね。

P：あー。

T：あんどき！あんどきの写真ここやったんか！

P：だまされた！

T：俺が行つといたらよかった…

P：ちくしょう！

T：とかね。そういう、みんなが知らないうちにでも、何か情報のメディアを使うということはいろんな問題が起こってくるんです。

これをね、とても難しい問題です。いろんな人が考えてもなかなか答えがでない問題です。こういったことを、これからの社会の勉強でちょっとずつ考えて欲しいんですよ。

ということで、今日のまとめです。プリントの下の方角に書いてほしいんですけど。最初の言葉は難しいので、出しますね。わたしたちは情報の受信者でもあり、発信者でもある。受信者って分かりますか？

P：見てる人。

T：はい、みなさんテレビとか見てますね。これは情報を受信してるっていうことです。では発信者って分かりますか？

P：送ってる人。

T：送ってる人ですね。こういう風に今日やったのは、みなさん発信者になってました。

パソコンで何かを聞く、電話で何かを聞く。足で探して人に聞く。こういったものは発信者です。みなさん。

だからみなさんは、受信者になったり発信者になったりを繰り返してるんですね、知らず知らずのうちに。

そしてもう一つ。人は社会の中で、情報やメディア、いろいろやりましたね。携帯とかテレビとか。そういったものによって多くの人や物事と、つながりを持っている。テレビを見る、パソコンを使う。なんか誰ともしゃべってない気はするんですけど、その裏にはいろんな人がいます。

ちょっと戻しますね。(情報・メディアの関係図のスライドに戻す) これだけの人が、もっとたくさんの人が、これもっと広がってますよ？インターネットに情報を流したら世界中の人が見ててもおかしくない状態なので。

P：一億人の人たち。

T：かもしれないですね。

P：なんだってー！

T：ということでですね、これから情報と付き合っていく、メディアを使うっていうことは、いろんな人といろんなことと関係をもっているんだっていうことを頭のどっかに置いておいてください。

そしたらね、なんかちょっと悪さしたろかなとか、嘘ついたろかなとか、そういったことは出てこないと思うんです。まあこれは、これからの勉強でどんどん考えっていけばい

いかなあと思います。

T：それでは社会の勉強を終わります。ありがとうございました。

P：ありがとうございました。

